

大分市
埋蔵文化財調査年報

vol.8 1996年度



The Board of Education in Oita City 1997

大分市
埋蔵文化財調査年報

vol.8 1996年度

The Board of Education in Oita City 1997

序 文

本年報は平成8年度に大分市教育委員会が行いました発掘調査の概要を収録したものです。

大分市では、平成9年4月1日からの中核市への移行に伴って、公共の都市基盤整備事業や民間の開発事業などが益々増大しつつあり、それに伴って遺跡の発掘調査も増加する傾向にあります。

今年度は、大分駅周辺総合整備事業に伴って錦町で行った調査で、大友氏が営んだ戦国時代の城下町の一角が発掘され、幅10mの道路に沿った当時の町が姿を現しました。また、店舗建設に伴って調査が行われた猪野・中原遺跡では戦国時代の堀で囲まれた居宅の全体像を明らかにできました。さらに区画整理事業に伴って調査が継続している横尾遺跡群では平安時代の粘土採掘坑が発見されるなど市内全域で貴重な発見が相次いでいます。

この年報が郷土の歴史を説明する一資料となり、文化財の保護と理解のために活用されますことを心より願っています。

最後になりましたが、当市の文化財行政に対してご協力いただきました皆様、諸機関に心からお礼申し上げます。

平成9年12月15日

大分市教育委員会
教育長 清瀬 和弘

例 言

1. 本書は大分市域において大分市教育委員会が平成8年4月1日から平成9年3月31日の間に行った埋蔵文化財に関する事業内容をまとめた年報である。
2. 平成8年度における調査地点は表2および第3図に示している。
3. 本書の執筆は各担当者が分担しておこない、文末に執筆者名を記している。
4. 第IV章受贈図書目録は、平成8年4月1日から平成9年3月31日の期間中に大分市教育委員会文化財室に受贈された書籍等を掲載した。
5. 第IV章受贈図書目録の作成は新藤美由起・岩本留美（大分市教育委員会文化財室臨時職員）による。
6. 遺構・遺物の実測、図版の作成等において、幸しのぶ・井口あけみ・測野玲子・森由美子・堤美智代・山下順子・飛高裕子・西嶋スミエ・平田美智子・丸井久美子（以上大分市教育委員会文化財室臨時職員）の協力を得た。
7. 本文中に掲載した現場写真は各担当者が撮影した。
8. 本文中に掲載した地図は、大分市都市計画図を使用した。（縮尺は1万分の1である）
9. 本書の編集、校正は讃岐・坪根の他、井口が行った。

目 次

第Ⅰ章	大分市教育委員会文化振興課文化財室概要……………	1
1	沿 革 ……………	1
2	組 織 ……………	1
3	大分市文化財調査委員会 ……………	2
第Ⅱ章	平成8年度事業概要……………	4
1	開発事前審査事業……………	4
	(1) 平成8(1996)年度の概要……………	4
2	発掘調査事業……………	6
3	教育普及活動……………	11
	(1) 大分市文化財だより(1996年号)の発行……………	11
	(2) 研修参加……………	11
第Ⅲ章	発掘調査内容の概要 ……………	12
I	下郡道跡群第79次調査 D x _n ・o-18・19地点……………	12
II	下郡道跡群第81次調査 I x _p -10地点……………	15
III	下郡道跡群第82次調査 B x _f -16地点……………	16
IV	下郡道跡群第83次調査 H x _p -22・23地点……………	17
V	下郡道跡群第84次調査 F x _m -8地点……………	18
VI	下郡道跡群第85次調査 D x _o -17地点……………	19
VII	下郡道跡群第86次調査 I x _q -16地点……………	21
VIII	下郡道跡群第87次調査 E x _p -16地点……………	23
IX	下郡道跡群第88次調査 H x _o ・p-21地点……………	27
X	下郡道跡群第89次調査 G x _s ・t-3地点……………	28
XI	下郡道跡群第91次調査 H x _q ・r-18地点……………	30
XII	横尾道跡群第48次調査 A-20・21地点(横尾下組道跡)……………	32
XIII	横尾道跡群第49次調査 B-6,S地点(東中尾道跡)……………	34
XIV	横尾道跡群第52次調査 B-4・5地点(東中尾道跡)……………	36
XV	横尾道跡群第53次調査 B-11,N地点(東中尾道跡)……………	38
XVI	亀塚古墳第3次調査……………	40
XVII	尾崎道跡……………	44
XVIII	辻古墳群……………	46
XIX	東大道道跡……………	49
XX	井ノ久保道跡……………	50
XI	府内城・城下町跡 第8次調査……………	53
XII	中世大友城下町第1・2次調査……………	56
XIII	多武尾道跡第3次調査……………	58
XIV	下寒田道跡……………	60
XV	巨野原神原道跡……………	62
XVI	猪野・中原道跡……………	64
XVII	猪野新上井道跡(3次調査)……………	68
XVIII	羽屋・岡道跡(第3次調査)……………	72
XIX	尾崎丸田道跡……………	74
XX	米竹道跡……………	76
XXI	乙院屋敷道跡……………	77
第Ⅳ章	受贈図書目録……………	78
1	調査報告書……………	78
2	定期刊行物・図録等……………	94

插图目次

第1图	地域区分图	4
第2图	地区别前审查割合	5
第3图	調査遺跡位置図	11
下郡道跡群第79次調査 D区n-o-18・19地点		
第4图	調査地点位置図	12
第5图	遺構配置図 (1/200)	12
第6图	出土遺物実測図 (1/4)	13
第7图	調査区全景	14
下郡道跡群第81次調査 I区p-10地点		
第8图	調査地点位置図	15
第9图	遺構配置図 (1/200)	15
下郡道跡群第82次調査 B区f-16地点		
第10图	調査地点位置図	16
第11图	土層断面図	16
第12图	土層断面図 (1/40)	16
下郡道跡群第83次調査 H区p-22・23地点		
第13图	調査地点位置図	17
第14图	出土遺物実測図 (1/2)	17
第15图	遺構配置図 (1/100)	17
下郡道跡群第84次調査 F区m-8 地点		
第16图	調査地点位置図	18
第17图	遺構配置図 (1/150)	18
下郡道跡群第85次調査 D区o-17地点		
第18图	調査地点位置図	19
第19图	遺構配置図 (1/200)	19
第20图	調査区全景	20
下郡道跡群第86次調査 I区q-16地点		
第21图	調査地点位置図	21
第22图	調査区全景	21
第23图	遺構配置図 (1/200)	22
下郡道跡群第87次調査 E区p-16地点		
第24图	調査地点位置図	23
第25图	調査区全景	24
第26图	遺構配置図 (1/300)	25
第27图	SK025完掘状況	26
下郡道跡群第88次調査 H区o-p-21地点		
第28图	調査地点位置図	27
第29图	遺構配置図 (1/100)	27
下郡道跡群第89次調査 G区s-t-3 地点		
第30图	調査地点位置図	28
第31图	遺構配置図 (1/200)	28
第32图	出土遺物実測図 (1/4)	29
第33图	北壁土層断面図 (1/80)	29
下郡道跡群第91次調査 H区q-r-18地点		
第34图	調査地点位置図	30
第35图	遺構配置図 (1/150)	30
第36图	出土遺物実測図 (1/4)	31
横尾道跡群48次調査 A-20・21地点 (横尾下組道跡)		
第37图	調査地点位置図	32
第38图	掘立柱建物跡全景	32
第39图	調査区全景 (東より)	32
第40图	遺物実測図 (1/4)	33
第41图	遺構配置図 (1/300)	33
横尾道跡群第49次調査 B-6,S地点 (東中尾道跡)		
第42图	調査地点位置図	34
第43图	出土遺物実測図 (1/4)	34
第44图	粘土探掘坑出土遺物 (1/4)	35
第45图	粘土探掘坑完掘状況	35

第46図	遺構完備状況（東より）	35
第47図	遺構配置図（1/300）	35
横尾道跡群第52次調査 B-4・5地点（東中尾道跡）		
第48図	調査地点位置図	36
第49図	墓地平面図（1/80）・出土遺物（1/4）	37
第50図	調査区全景（東より）	37
第51図	遺構配置図（1/300）	37
横尾道跡群第53次調査 B-11,N地点（東中尾道跡）		
第52図	調査地点位置図	38
第53図	調査区道景（東より）	39
第54図	遺物出土状況	39
第55図	遺構配置図（1/300）	39
第56図	出土遺物（1/4）	39
亀塚古墳第3次調査		
第57図	調査地点位置図	40
第58図	葎石検出状況	40
第59図	第10・11トレンチ調査状況	41
第60図	亀塚古墳トレンチ配置図（1/100）	41
第61図	線刻両端輪片	42
第62図	出土遺物実測図（1/3・1/4）	43
尾崎道跡		
第63図	調査地点位置図	44
第64図	調査区全景（東より）	44
第65図	遺構配置図（1/200）	45
辻古墳群		
第66図	調査地点位置図	46
第67図	辻古墳群トレンチ配置図（1/800）	46
第68図	土坑・石棺検出状況	47
第69図	土坑内土器出土状況	47
第70図	石棺平面・断面実測図（1/50）	47
第71図	祭祀土坑平面・断面実測図（1/20）	48
第72図	出土遺物実測図（1/6）	48
東大道道跡		
第73図	調査地点位置図	49
第74図	遺構配置図（1/200）	49
井ノ久保道跡		
第75図	調査地点位置図	50
第76図	調査区全景	50
第77図	A地区遺構配置図（1/400）	50
第78図	S069焼成坑出土状況	51
第79図	B地区遺構配置図（1/500）	51
第80図	出土遺物実測図（1/4）	52
第81図	風子硯検出状況	52
第82図	S021土師器検出状況	52
府内城・城下町跡 第8次調査		
第83図	調査地点位置図	53
第84図	調査区全景	53
第85図	SX595出土状況（東より）	54
第86図	SX595出土遺物実測図（1/3）	54
第87図	遺構配置図（1/400）	54
第88図	SF200東西道路跡検出状況（西より）	55
第89図	SF200土層観察時（東より）	55
第90図	SX020・448出土遺物実測図（1/3）	55
第91図	墨書磁器実測図（1/3）	55
中世大友城下町第1・2次調査		
第92図	調査地点位置図	56
第93図	溝状遺構検出状況	56
第94図	道路遺構断面土層	56
第95図	遺構配置図	57

第96図	SE460 (上) SE400 (下) 水貯部	57
多武尾道跡第3次調査		
第97図	調査地点位置図	58
第98図	調査区全景	58
第99図	SD001遺物出土状況	58
第100図	遺構配置図 (1/300)	59
下寒田道跡		
第101図	調査地点位置図	60
第102図	調査区全景	60
第103図	遺構配置図 (1/250)	60
第104図	出土遺物実測図 (1/4)	61
巨野原神原道跡		
第105図	調査地点位置図	62
第106図	調査区全景	62
第107図	集石遺構平面・断面実測図 (1/20)	62
第108図	遺構配置図 (1/250)	63
猪野・中原道跡		
第109図	調査地点位置図	64
第110図	調査区全景	64
第111図	地蔵遺構 (SX050) 検出状況 (北より)	64
第112図	SX050出土遺物実測図 (1/3)	64
第113図	区画溝検出状況	65
第114図	土器埋納坑 (SX005) 検出状況	65
第115図	SX005出土遺物実測図 (1/3)	65
第116図	ST080・SX065出土遺物実測図 (1/3)	66
第117図	遺構配置図 (1/400)	66
第118図	SX065全景 (東より)	67
猪野新土井道跡 (第3次調査)		
第119図	調査地点位置図	68
第120図	調査区 (1・2・3区) 全景	68
第121図	調査区 (4区) 全景	68
第122図	遺構配置図 (1/750)	69
羽屋・園道跡 (第3次調査)		
第123図	調査地点位置図	72
第124図	遺構配置図 (1/400)	73
尾崎丸田道跡		
第125図	調査地点位置図	74
第126図	尾崎丸田道跡と周辺の道跡	74
第127図	調査区全景	74
第128図	住居跡 (SH001) 実測図 (1/40)	75
第129図	遺構配置図 (1/300)	75
米竹道跡		
第130図	調査地点位置図	76
第131図	遺構配置図 (1/200)	76
乙院屋敷道跡		
第132図	調査地点位置図	77
第133図	遺構配置図 (1/200)	77

表目次

表1	開発事前審査件数一覧	5
表2	大分市平成8年度発掘調査地一覧	7
表3	大分市平成8年度試掘調査地一覧	8

第Ⅰ章 大分市教育委員会文化振興課文化財室概要

1. 沿革

昭和51年4月1日	大分市教育委員会社会教育課内に文化財係を設置
昭和59年6月28日	大分市教育委員会社会教育課文化財係を大分市教育委員会社会教育課文化財室に改組
平成5年4月1日	大分市教育委員会文化振興課文化財室に改組

2. 組織

文化振興課	課長	野尻政文(平成9年度～)
	課長	工藤久典
文化財室	参事	秦政博
	主幹	玉永光洋(平成9年度～)
文化財室	室長	堀和則
	室長	植木正己(平成9年度～)
次長	長	讚岐和夫
	主査	佐藤宏明
指導主事	後藤	藤典幸
	指導主事	藤沢敏夫(平成9年度～)
主任	主任	安部貴美代(平成9年度～)
	主任	徳丸ひとみ
主任技師	主任技師	塔鼻光司
	主任技師	坪根伸也
技師	主任技師	池邊千太郎
	技師	塩地潤一
技術員	技術員	高畠豊(平成9年度～)
	技術員	河野史郎(平成9年度～)
嘱託	嘱託	杉崎重臣
	嘱託	新藤美由起
嘱託	嘱託	中西武尚
	嘱託	大野康弘(平成9年度～)
嘱託	嘱託	奥村義貴(平成9年度～)
	嘱託	羽田野達郎(平成9年度～)
高速道路対策室付	文化財調査員(臨時)	大野康弘
	文化財調査員(臨時)	奥村義貴
下郡区画整理事務所付	文化財調査員(臨時)	中西武尚(平成9年度～)
	文化財調査員(臨時)	幸しのぶ(平成9年度～)
横尾区画整理事務所	文化財調査員(臨時)	田淵芳則(平成9年度～)
	文化財調査員(臨時)	小野貴史(平成9年度～)
文化財調査員(臨時)	文化財調査員(臨時)	林潤也(平成9年度～)
	文化財調査員(臨時)	大藤弥生(平成9年度～)
文化財調査員(臨時)	文化財調査員(臨時)	永松正大(平成9年度～)

大分市文化財室設置規則（抜粋）

昭和59年6月28日教育委員会規則第5号
改正昭和62年9月29日教委規則第16号
平成5年3月30日教委規則第13号

（設 置）

第1条 文化財行政の円滑な推進を図るため大分市文化財室（以下「室」という。）を設置する。

（組 織）

第2条 室は、教育委員会事務局文化振興課に所属するものとする。（平5教委規則13号一部改正）

（分掌事務）

第4条 室の分掌事務は、次のとおりとする。

- (1) 文化財調査委員に関すること。
- (2) 文化財に関すること。
- (3) 文化財保護思想の普及啓蒙に関すること。

附 則 抄

（施行期日）

1 この規則は、昭和59年7月1日から施行する。

附則(昭和62年教委規則第16号)

この規則は、昭和62年10月1日から施行する。

附則(平成5年教委規則第13号)

この規則は、平成5年4月1日から施行する。

3. 大分市文化財調査委員会

大分市文化財調査委員会委員（平成9年4月1日現在）

	【氏 名】	【勤務先・職名】	【担 当】
委員長	佐藤 真 一	元荷揚町小学校長	動植物
副委員長	豊田 寛 三	大分大学・教育学部長	近世
	北野 隆	熊本大学・教授	建造物
	日高 稔	上野丘高校・校長	地質館物
	橋 昌 信	別府大学・教授	考古埋蔵
	橋本 操 六	大分大学非常勤講師・前県総務課参事	中世
	西別府 元 日	広島大学文学部・助教授	古代
	宗 像 健 一	大分県立芸術会館・課長	美術
	友 永 尚 子	大分県立芸術会館・主任学芸員	工芸
	小 泊 立 矢	大分県立先哲史料館・副館長	民俗

大分市文化財調査委員会条例

昭和51年3月29日条例第4号
改正平成4年12月21日条例第41号

(設置)

第1条 地方自治法(昭和22年法律第67号)第138条の4第3項の規定に基づき、大分市教育委員会(以下「教育委員会」という。)に大分市文化財調査委員会(以下「委員会」という。)を設置する。

(任務)

第2条 委員会は、教育委員会の諮問に応じて、文化財の保存及び活用に関する重要事項について調査審議する。

(組織)

第3条 委員会の委員は、10人以内とし、学識経験者のうちから教育委員会が委託し、又は任命する。

2 委員は、非常勤とする。

(任期)

第4条 委員の任期は、2年とし、その欠員が生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。ただし、再任を妨げない。

(委員長)

第5条 委員会に委員長及び副委員長を置き、委員が互選する。

2 委員長は、委員会の会務を総理する。

3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときは、その職務を代行する。

(会議)

第6条 会議は、必要に応じ、委員長が招集する。

2 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

3 委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

(部会)

第7条 委員会に、教育委員会規則の定めるところにより、部会を置くことができる。

(庶務)

第8条 委員会の庶務は、教育委員会文化振興課において処理する。(平4条例41・一部改正)

(委任)

第9条 この条例に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は、教育委員会規則で定める。

附 則 抄

(施行期日)

1 この条例は、昭和51年5月1日から施行する。

附 則(平成4年条例第41号)抄

(施行期日)

1 この条例は、平成5年4月1日から施行する。

第Ⅱ章 平成8年度事業概要

1 開発事前審査事業

(1) 平成8(1996)年度の概要

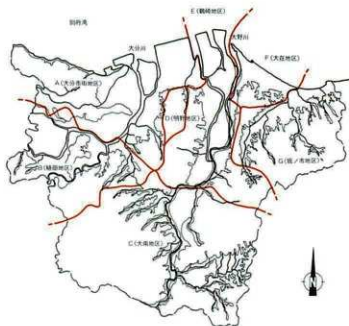
表1は平成8年度における開発申請内容を示したものである。

平成8年度の申請総面積は4,438,455.55㎡、総申請件数196件を数える。

その内訳は、開発計画事前審査件数22件、開発行為事前審査申請1件、開発行為事前協議申請99件、開発行為変更事前協議申請1件、大規模土地取引事前指導申請1件、宅地造成工事事前協議申請23件、都市計画法32条協議申請1件、土地売買等の届出44件、墓地経営に関する事前審査3件、事業計画事前審査申請1件、開発協議会における質問事項1件である。これを平成7年度の申請内容と比較すると、総件数は約35%もの大幅な減少がみられる。開発行為関係は若干の増加を示しているものの、土地売買関係が前年比で約49%まで落ち込んでいることが大きな要因といえよう。また、数年来減少傾向にあった申請面積は、今年度も前年比で約20%の減となっている。

申請エリアに関しても、この数年の傾向どおり、周知遺跡の集中する大分市街地区(A)、植田地区(B)、鶴崎地区(E)に開発申請が集中しており、3地区で大分市全体の約71%(件数)を占めている。これは、今後の発掘調査件数の直接的な増加要因になるものと考えられる。

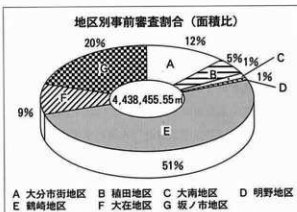
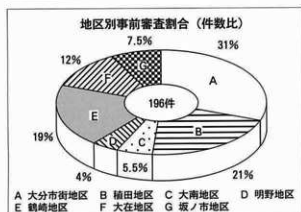
本年の特徴として、土地売買等の届出件数が激減したことがあげられる。前年比で $\frac{1}{2}$ 以下に減少しており、長びく経済不況の影響が如実に現れている。大型の開発は姿をひそめ、小規模な開発が増加する傾向はさらに平成9年度へと続いていくものと考えられる。(塔鼻)



第1図 地域区分図

表1 開発事前審査件数一覧

地区名	A-大分市街地区	B-稲田地区	C-大南地区	D-明野地区	E-鶴崎地区	F-大在地区	G-坂ノ市地区	合 計
【開発計画事前審査申請】								
件数	4	4	2	1	5	4	2	22
面積 (㎡)	240,185	150,063	22,506	6,569	128,862	77,772	861,238	1,487,795
【開発行為事前審査申請】								
件数	0	0	0	0	0	1	0	1
面積 (㎡)	0	0	0	0	0	28,699	0	28,699
【開発行為事前協議申請】								
件数	23	23	8	2	22	12	9	99
面積 (㎡)	155,758	39,488	37,120	8,243	8,243	63,435	21,686	1,323,111
【開発行為変更事前協議申請】								
件数	0	0	0		0	1	0	1
面積 (㎡)	0	0	0		0	226,435	0	226,435
【大規模土地取引事前指導申請】								
件数	1	0	0	0	0	0	0	1
面積 (㎡)	13,600	0	0	0	0	0	0	13,600
【宅地造成工事事前協議申請】								
件数	10	11	0	1	1	0	0	23
面積 (㎡)	7,326	33,074	0	800	780	0	0	41,980
【都市計画法32条協議申請】								
件数	1	0	0	0	0	0	0	1
面積 (㎡)	517	0	0	0	0	0	0	517
【土地売買等の届出】								
件数	20	1	1	3	9	5	4	44
面積 (㎡)	101,958.9	5,600.52	1,586	11,555.77	27,728.84	13,163.61	11,534.91	173,128.55
【墓地経営に関する事前審査】								
件数	0	2	0	1	0	0	0	3
面積 (㎡)	0	965	0	42	0	0	0	1,007
【事業計画事前審査申請】								
件数	1	0	0	0	0	0	0	1
面積 (㎡)	25,683	0	0	0	0	0	0	25,683
【開発協議会における質問事項】								
件数	0	0	0	0	1	0	0	1
面積 (㎡)	0	0	0	0	1,116,500	0	0	1,116,500
【総合計】								
件数	60	41	11	8	38	23	15	196
件数比	31%	21%	5%	4%	19%	12%	7.5%	
面積 (㎡)	545,027.9	229,790.52	61,212	27,209.77	2,271,557.84	409,198.61	894,458.91	4,438,455.55
面積比	12%	5%	1%	1%	51%	9%	20%	



第2図 地区別事前審査割合

2 発掘調査事業

本年度市内で実施された発掘調査件数は108件である。その内訳は試掘確認調査が76件（横尾遺跡群4件を含む）、本格調査32件を数える。内訳は表2・3に示している。

このうち試掘確認調査の内容について概観する。

76件の調査件数の中で遺跡の存在が確認されたのは全体の約63.2%に及び、設計変更等による盛土保存により本格調査に移行しなかったものを除くと、本格調査へ移行したものは総調査件数の約1割である。

以下において本年度（平成8年度）の発掘調査の成果を概観する。

旧石器時代・縄文時代

今年度行われた調査で旧石器時代の所産と考えられる遺物としては、猪野新土井遺跡でナイフ形石器等が、また尾崎遺跡では流紋岩製の刮片が出土している。しかしながら当該期の石器ブロックや礫群など明確な遺構を伴う生活面は検出されていない。猪野新土井遺跡では、流紋岩製ナイフ形石器1点と刮片数点が出土している。出土位置は古代・中世の遺構検出面である黄褐色土層（ローム）上面から漸移層にかけてであり、本来黄褐色土層中に分布していたものが浮き上がっていたのものであると考えられる。従って、調査地区内および周辺に石器ブロックが存在する可能性が考えられるが、調査期間等の事情により確認には至らなかった。尾崎遺跡で出土した遺物は他時代の遺構中からの出土である。ところで、尾崎遺跡に隣接する松岡地区の丘陵上に立地するスポーツ公園予定地内で今年度県教委が行った発掘調査では、旧石器時代と縄文時代早期の遺跡の存在が明らかになっている。特に一方平1遺跡では、遺跡内の礫層から採取した礫を素材にしたと考えられる多数の石核をはじめとする旧石器が出土しており、一種の石材原産地遺跡として評価できる。このため、ここから搬出された石核やナイフ形石器等の製品が遺存している遺跡が明野・猪野・横尾地区など周辺の台地や丘陵上に多く分布していることが推定される。火山灰風化土層の形成が良好なうえ、近年まで畑地や山林が多かった猪野地区には、後世の削平を免れて現在も比較的良好な状態で旧石器時代および縄文時代の生活面が遺存している地点が多く残されていると考えられる。現在急速に開発が進みつつある地域であり十分な注意をはらう必要がある。

縄文時代については旦の原神原遺跡で早期の遺構が検出されたほか、猪野新土井遺跡で早期の、下郡遺跡群で晩期の遺物が出土している。旦の原神原遺跡では集石炉1基と連結土坑1基、炉穴10基が検出された。

出土遺物には平槽式土器が1点出土している。連結土坑は近年鹿児島など南九州地域の縄文早期～早期の遺跡で多数検出されているものと類似しており、その関連が注目される。猪野新土井遺跡では押型文土器と当該期のものと思われる礫器が出土しているが、旧石器と同様に古代・中世の遺構検出面での出土であり、集石など当該期に帰属される明確な遺構は確認できなかった。下郡遺跡群では89次調査で晩期後葉の刻目突帯文土器が1点出土した。古代の遺構内に混入して出土したもので当該期の遺構は検出されていない。（高畠）

弥生時代

弥生時代に関しては、下郡遺跡群（79,85,86,87,88次）、尾崎遺跡、猪野・中原遺跡、多武尾遺跡の4遺跡8調査区で確認されている。

弥生時代中期の遺構・遺物については、下郡遺跡群の79,85,86,87次調査で検出された貯蔵穴、86次調査で検出された溝状遺構、猪野・中原遺跡の大溝が挙げられる。特に、下郡86次調査の弥生時代中期中頃～後半に位置付けられる溝状遺構については、同73次調査で検出されている溝状遺構との接続関係が確認されており、当該地域における弥生時代中期の環壕集落の復元が期待される。猪野・中原遺跡で検出された大溝については、その形状及び、土層堆積状況から現時点で、福岡市で発見されている瀬井遺構に共通点を見いだしており、今後、詳細検討が期待される。

表2 大分市平成8年度発掘調査地一覧

調査番号	種別	事業内容	遺跡名	調査地	調査担当	遺跡面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査期間
96001	公共事業	下部土地区画整理事業	下部遺跡群 第79次調査 第81次調査 第82次調査 第83次調査 第84次調査 第85次調査 第86次調査 第87次調査 第88次調査 第89次調査 第91次調査	大分市大字下郡 D区no-18・19地点 I区p-10地点 B区f-16地点 H区p-22・23地点 F区m-8地点 H区o-17地点 I区q-16地点 E区p-16地点 H区n-p-21地点 G区st-3地点 H区q-r-18地点	坪根伸也 坪根伸也 坪根伸也 坪根伸也 坪根伸也 坪根伸也 坪根伸也 坪根伸也 坪根伸也 坪根伸也 坪根伸也	(468) (238) (161.4) (65) (120) (345) (339) (1,435) (300) (210) (80)	500 238 202 65 120 345 339 1,435 300 210 80	960527~960717 960408~960427 960417 960425~960426 960518~960530 960527~960717 960722~960825 960810~961005 961122~961220 970107~970205
96002	公共事業	橋尾土地区画整理事業	橋尾遺跡群 第48次調査 第49次調査 第52次調査 第53次調査 試掘調査 試掘調査 試掘調査 試掘調査	大分市大字橋尾 A-20・21地点 B-6, S地点 B-4・5地点 B-11, S地点 D-13地点 B-8, N地点 B-8 D-22・41	池邊千太郎 池邊千太郎 池邊千太郎 池邊千太郎 池邊千太郎 池邊千太郎 池邊千太郎 池邊千太郎	(500) (1,200) (580) (1,050) (200) (20) (144) (100)	1,000 1,200 600 1,300 2,500 30 300 2,500	960802~960820 9604~960810 961007~961213 961210~970331 960710 961225 970217~970336 970107
96003	公共事業	史跡整備事業	鳥塚古墳 第3次調査	大分市大字里字大塚	讃岐和夫	古墳2基		961101~970331
96004	公共事業	校舎増築(本調査)	尾崎遺跡	大分市大字小池原	讃岐和夫	188	188	960512~960728
96005	公共事業	坂ノ市土地区画整理事業	辻古墳群	大分市大字里字辻	讃岐和夫	830	11,600	960805~961031
96006	公共事業	駅周辺総合整備事業	東大道路跡	大分市東大道路1丁目2473	杉崎重臣	346		960925~961011
96007	公共事業	東九州自動車道建設	井ノ久保遺跡	大分市大字橋尾字井ノ久保	塔鼻光司	2,800		960401~970331
96008	公共事業	公園リフレッシュ事業	西内緑下町跡 第8次調査	大分市中央町2丁目4番地	堀地潤一	1,101	6,200	961024~970519
96009	公共事業	駅周辺総合整備事業	中世府内町跡 第1次調査 中世府内町跡 第2次調査	大分市総町2丁目 大分市東大道路1丁目2473	杉崎重臣 杉崎重臣	620 345		960507~970811 960925~961011
96010	公共事業	武道場建設	多武尾遺跡 第3次調査	大分市大字橋尾字南誠の辻	塔鼻光司	550	600	961007~9611
96011	公共事業	武道場建設	下塚田遺跡	大分市大字塚田1369-1	讃岐和夫	580	600	961007~961202
96012	本調査(民間)	宅地造成	旦野原神原遺跡	大分市大字沼野字神原378	後藤典幸	600		960614~960731
96013	民間開発	店舗建設	猪野・中原遺跡	大分市旦野原字中原1244-3 他4基	堀地潤一	2,693	5,590	960813~961009
96014	本調査(民間)	宅地造成	猪野新土井遺跡 第3次調査	大分市大字猪野字新土井	後藤典幸	3,500		961015~970906
96015	確認調査(民間)	ガソリンスタンド建設	石原・橋田遺跡 第3次調査	大分市大字別所1058-1	堀地潤一	1,300	1,300	960410~960424
96016	民間開発	宅地造成	乙院原古尾崎 丸田遺跡	大分市大字小池原	塔鼻光司	400	1,400	970311~970331
96017	確認調査(民間)	宅地造成	米竹遺跡	大分市大字千歳字米竹	塔鼻光司	130	1,000	961125~961129
96018	確認調査(民間)	宅地造成	乙院原遺跡	大分市大字上京方	塔鼻光司	200	1,000	961209~961213

弥生時代後期の遺構・遺物については、下郡遺跡群の88次調査で検出された竪穴住居跡、尾崎遺跡で検出された竪穴住居跡、土坑、溝状遺構、多武尾遺跡で検出された溝状遺構、土坑、土器棺が挙げられる。特に、多武尾遺跡・尾崎遺跡で検出された遺構群については、昭和54～55年度(多武尾)、昭和57～58年度(尾崎)にそれぞれ実施された調査区に、隣接又は近接した位置にあることから、両遺跡の広がりを確認する上でも重要な位置づけとなっている。

古墳時代

当該期の遺跡では、猪野新土井遺跡、下郡遺跡群、鬼塚古墳、辻古墳群がある。

表3 大分市平成8年度試掘調査地一覧

番号	種別	住 所	調査面積 (㎡)	調査対象 面積 (㎡)	調査期間	開発原因
1	試掘(公共)	大分市大字市字	2,330		96.03.04~03.02	自然公園整備
2	試掘(民間)	大分市大字横尾字芝尾3742-3	20	992.3	96.04.03	宅地造成
3	試掘(民間)	大分市大字猪野字中原1236・1237	320		96.04.05~96.04.05	店舗建設
4	試掘(民間)	大分市大字野田字後田224番地の1	18	80	96.04.09	通信施設建設
5	試掘(民間)	大分市大字鶴崎字家形2688-7	50	767.57	96.04.18	アパート建設
6	試掘(民間)	大分市大字市字石橋43-1外2筆	31	1,323.68	96.04.22	ガソリンスタンド建設
7	試掘(民間)	大分市大字羽根1058-1	1,300	1,300	96.04.10~96.04.24	ガソリンスタンド建設
8	試掘(公共)	大分市大字市字205・208-1、高瀬31			96.05.01~96.05.02	自然公園整備
9	試掘(公共)	大分市大字里字辻461番地外20筆	110	500	96.05.09	区画整理事業
10	試掘(民間)	大分市大字横尾字芝尾3709-1外6筆	116	3,125	96.05.27	アパート建設
11	試掘(民間)	大分市大字猪野字新土井755番地	168	3,000	96.05.13~96.05.17	宅地造成
12	試掘(民間)	大分市大字下郡飯換地C-24リ	42	999	96.05.24	アパート建設
13	試掘(民間)	大分市大字古国府404番地の1	40	654	96.05.28	店舗建設
14	試掘(民間)	大分市古国府408-1他3筆	85	1,500	96.05.31	アパート建設
15	試掘(民間)	大分市大字木上大字柳下420-3番地	67	925	96.05.27	アパート建設
16	試掘(公共)	大分市大字市589番地	25	375	96.06.14	武道場建設
17	試掘(公共)	大分市大字羽田349番地	6	200	96.06.14	武道場建設
18	試掘(公共)	大分市大字寒田1368番地の1	37	375	96.06.13	武道場建設
19	試掘(公共)	大分市大字横尾2843番地の4	72	3750	96.06.13	武道場建設
20	試掘(民間)	大分市大字猪野東ノ平238-1他3筆	51.6	779.96	96.07.08	共同住宅建設
21	試掘(民間)	大分市東大通1丁目2473番地	80	1,500	96.07.09	事務所建設
22	試掘(民間)	大分市大字田尻5637-2	50	993.34	96.07.09	アパート建設
23	試掘(民間)	大分市大字上京方字新園敷1277-1他2筆	132	945.91	96.07.12	アパート建設
24	試掘(民間)	大分市大字曲字宮ノサキ1145番地	104	1,320	96.07.15	アパート建設
25	試掘(民間)	大分市大字上戸次字王惣3958-1他1筆		1,274.5	96.07.26	ガソリンスタンド建設
26	試掘(民間)	大分市大字猪野1421番地	15.5	15.5	96.07.29	通信施設建設
27	試掘(民間)	大分市大字津守823-1外3筆	78	78	96.08.01	マンション建設
28	試掘(民間)	大分市大字木上ノ上大字大柳下420-3番地	53	53	96.08.05	アパート建設
29	試掘(民間)	大分市大字古国府字五町651番地1	13.4	13.4	96.08.09	アパート建設
30	試掘(民間)	大分市大字津守字公門園1036番地他1筆	35	35	96.08.08	宅地造成
31	試掘(民間)	大分市大字田尻字川成58-1外3筆	45	45	96.08.26	葬祭場建設
32	試掘(民間)	大分市大字田尻字麦生田227-1外2筆	60	60	96.08.27	店舗建設
33	試掘(民間)	大分市大字賀来字庄ノ原1910-1他2筆	210	210	96.08.30	本堂建設
34	試掘(公共)	大分市大字政所字此間及び永来	236	236	96.08.29	公園建設
35	試掘(民間)	大分市大字森字北原1225-1	54	54	96.09.04	アパート建設
36	試掘(公共)	大分市大字北字磯田及び牟田	232	2,500	96.09.09	公園建設
37	試掘(公共)	大分市大字下郡字茶エン2030-1	110	643	96.09.16	アパート建設
38	分布(民間)	大分市大字丹生字堂館寺478-1外23筆		8,867	96.09.24	造成宅地
39	試掘(民間)	大分市大字下郡字堀向2493番地	66	390	96.09.26	個人住宅
40	試掘(民間)	大分市大字丹生字五田ヶ下182-1他3筆	42	4,500	96.10.03	宅地造成
41	試掘(民間)	大分市大字上京方字乙院敷1348・1354	94	923.11	96.10.07	宅地造成

番号	種 別	住 所	調査面積 (㎡)	調査対象 面積 (㎡)	調査期間	開発原因
42	試掘(民間)	大分市大字上宗方字川下275-1	60	803	96.10.14	宅地造成
43	試掘(民間)	大分市大字賀来字庄ノ原1902外4筆	108	2,844	96.10.16	墓地造成
44	試掘(民間)	大分市大字野田字原652番地2外2筆	15	311.33	96.11.01	住宅建設
45	試掘(民間)	大分市大字千歳字米竹1745-1	117	1,314	96.10.30	アパート建設
46	試掘(民間)	大分市大字下郎字埴目14-1・15-1、 羽田字井山4-5	27.95	692	96.11.11	アパート建設
47	試掘(民間)	大分市大字毛井字仲野821-1	12	383.69	96.11.16	個人住宅
48	試掘(民間)	大分市大字鷺野字宮ノ前1231-1	52.5	487.07	96.11.23	アパート建設
49	試掘(民間)	大分市大字田尻462-1、2、4	80	1,182.47	96.11.21	アパート建設
50	試掘(民間)	大分市大字羽田字上サ613	12	470.12	96.12.03	個人住宅
51	試掘(民間)	大分市大字曲119-1	15	723	96.12.03	アパート建設
52	分布(民間)	大分市大字城原字福門寺424-1外5筆	現地踏査		96.12.04	宅地造成
53	試掘(公共)	大分市大字横尾字猪野原574-2・3・4	27.18	1,039.72	96.12.05	アパート建設
54	試掘(民間)	大分市大字府内町3丁目81-1他3筆	36	1,067	96.12.10	ビル建設
55	試掘(民間)	大分市大字西鶴崎3丁目34番地	64	627.48	96.12.11	病院増築
56	試掘(民間)	大分市大字永興1019番地1外	66.84	1,200	96.10.18	宅地造成
57	試掘(民間)	大分市大字古国府字下新田1001-1他1筆	76	2,430.62	96.12.12	寮建設
58	試掘(民間)	大分市大字下郡字江崎71-2番地	335	335	96.12.18	個人住宅
59	分布(民間)	大分市大字下宗方字大内田286-1他1筆			96.12.25	住宅建設
60	試掘(民間)	大分市大字小池原596-1他3筆	78	1,400	96.12.25	アパート建設
61	試掘(公共)	大分市大字口戸字田嶋下16・19・20-3	87		96.12.25～96.12.26	墓地造成
62	試掘(民間)	大分市大字羽屋字小津ヶ田144番1・6	108	2,897	97.01.10	店舗建設
63	試掘(公共)	大分市大字下郡字七歩1710-1、1711-5	24	872.8	97.01.11	金庫所建設
64	試掘(民間)	大分市大字賀来字西ヶ平1979-15	26.4	262.03	97.01.25	個人住宅
65	試掘(民間)	大分市大字曲字埴目1494番地1他1筆	70	1,557.37	97.01.29	店舗建設
66	試掘(民間)	大分市大字口戸字田島86	15	282.96	97.02.01	宅地造成
67	試掘(民間)	大分市大字系K-6他8筆	270	4,750	97.02.10	店舗建設
68	試掘(民間)	大分市大字横尾字芝尾3717、3719-2			97.03.05	共同住宅
69	試掘(民間)	大分市大字田尻字尾崎580-3		393.17	97.03.06	アパート建設
70	試掘(民間)	大分市大字猪野字東角347番1・2	30		97.03.10	宅地造成
71	試掘(公共)	大分市大字市尾字堤原1470番地			97.03.17～97.03.21	園地整備
72	試掘(民間)	大分市大字賀来字御坊迫2037他			97.03.24～97.03.25	老人福祉施設

猪野新井遺跡は、方形の竪穴住居跡が3基確認され、つくり付けの甕も検出され、一括廃棄された状態で土師器の坏・壺・埴・高坏などの完成品や滑石製勾玉が出土している。

下郡遺跡群においては、(86次調査区)古墳時代初頭と後期、(87次調査区)6世紀の竪穴住居跡を検出している。

また、亀塚古墳本体については、本年度調査として東西の両くびれ部および裾部、前方部と後門部の埴輪列、接続部、東西の稜線部葺石状況等を見るためのトレンチ調査を実施し、継続した調査が行われている。

さらに、辻古墳群の調査では、遺構については、丘陵頂上付近に石棺材が抜き取られ放置された状況で確認されている。中段では、墓礎と石蓋をもつ箱式石棺に伴う4世紀前半の壺・鉢、高坏等が祭祀された状況で出土している。今回の調査は、試掘調査のため、遺跡の全容は把握できないが、直径40mを超える周濠をもち、墳丘には葺石を施し、埴輪を飾る大型の古墳が存在したことが窺える遺跡として、今後の本格的調査が待たれるところである。

(藤沢)

古代

当時代の遺構は、猪野新土井遺跡第3次調査、下部遺跡群、横尾遺跡群、井ノ久保遺跡で検出されている。

猪野新土井遺跡第3次調査では、前回調査で検出された平安時代（8世紀末から9世紀初頭）の方形区画の南西部の様子が判明し、主体となる大型建物跡の規模が5間×2間であることが確認された。また、方形区画の南側に鶴崎丘陵を横断する東西に延びる8世紀中頃前後に比定される道路状遺構の存在も明らかになった。さらに、南東部に別の方形区画も検出され、この地域の古代の様子が徐々に解明されつつある。

下部遺跡群では、奈良時代の区画を意図した柵列やそれに伴う掘立柱建物跡、また、平安時代前期の略方形の大型の掘り方を有する軸柱の掘立柱建物跡や溝状遺構、井戸跡などを検出している。さらに、溝幅8m以上の大溝も確認された。

横尾・松岡地区にまたがり所在する井ノ久保遺跡では、土師器焼成坑（8世紀末～9世紀初頭）が検出された。このうちの1基は残存状態が良好で、焼成を受けた壁面の立ち上がりが確認され、中には廃棄された形で土師器の蓋・坏等が多量に発見された。また、隣接して埋土に炭化物を含み多くの土師器が出土する落ち込みや、土坑が検出されている。焼成坑付近には、掘立柱建物跡と掘立柱倉庫跡が検出された。この遺跡の同一丘陵上には、地蔵原遺跡や猪野新土井遺跡など同時期の官衙的要素をもった遺跡が位置しており、その関連も注目されるところである。

（後藤）

中世

今年度の調査では、6遺跡9調査地点で当該期の遺構が検出された。中でも戦国期の遺跡は4遺跡を数える。中世大友城下町跡では錦町において第1次調査が行われ、大友氏の築いた中世都市遺跡についての本格的な調査が開始された。今回の調査地点は「横小路町」に比定される地点であったが、幅約10mで版築状に築かれた側溝を有する東西方向の道路遺構が検出され、それに沿って、柵列や掘立柱建物跡、井戸等が多数検出されている。遺物には青花や漆器、燗鉢等の生活雑器の他、鉄滓や埴輪などの生産関係遺物も多量に出土している。このほか、京都系土師器も多数出土しており注目される。これらの遺物の多くは概ね16世紀後半を中心とする時期のものと考えられ、今後調査の進展によって当該期の都市景観の復元や、生活文化の解明が進むことが期待される。猪野・中原遺跡では、幅約2mの堀に囲まれた約50m×40mの戦国期の居宅跡を検出した。銭貨を用いた地鎮遺構を中心に掘立柱建物が立てられていることが注目されるほか、井戸、墳墓、土器埋納坑をも含む居宅の全域が調査された意義は大きく、当該期の土蔵・名主屋の居宅構造を窺い知ることができる貴重な資料と思われる。猪野新土井遺跡では、幅約5mの堀で囲まれた居宅跡を検出した。内法で20～25m四方程度と推定され、猪野・中原遺跡の半分程度の規模である。遺構の時期は戦国期と考えてよく、付近の猪野・中原遺跡の例と合わせて地域史を考える上で重要な資料となるであろう。このほか亀塚古墳では小亀塚古墳北側の整備に伴う調査で15～16世紀のものと考えられる整地遺構と掘立柱建物跡群が検出されている。横尾遺跡群では第48次調査で15世紀と考えられる掘立柱建物跡が2棟検出され、下部遺跡群では第79次、85次、87次、88次の各調査地点で井戸、溝状遺構など中世の遺構が検出されている。継続的に調査が行われている横尾遺跡群と下部遺跡群では、当該期の集落景観やその変遷を明らかにしていくことが期待される。

（高島）

近世

近世に関しては、近年の市街地（府内城・城下町跡遺跡）における調査での確認に加え、郊外における確認例も増加している。平成8年度の調査においては、府内城・城下町跡遺跡第8次調査、下部遺跡群の第79,85,88次調査、横尾遺跡群第48,49,52,53次調査、猪野・中原遺跡、旦の原遺跡の、5遺跡10調査区において確認されている。

府内城・城下町跡遺跡は、第8次調査として推定西町と西上市町の一角が調査され、推定西上市町のメインストリートが検出された。遺物においても「西町長右衛門」墨書されたものや「西町 □□」と焼継文字の入る陶磁器が出土し、西町、西上市町の存在を裏付ける資料が得られている。

一方、郊外の調査例については、「蔓や町 中村や □ケ□」と焼継文字の入る陶磁器や、博多人形を出土した下郡遺跡群の第79次調査、及び横尾遺跡群第48,49,52,53次調査で確認された、近世墓群が目される。(河野)

3 教育普及活動

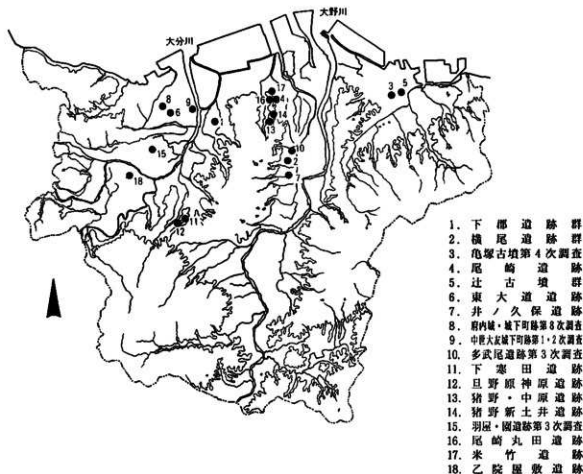
(1) 大分市文化財だより 1996年号の発行

平成3年度から発行を続けている文化財だよりの1996年号(第6号)の作成、配布を行なった。

本号は、平成8年度からスタートした、駅南区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査の一環として、戦国時代の「府内町」跡の発掘調査を特集し、発掘調査による最新の成果を掲載した。

(2) 研修参加

奈良国立文化財研究所による埋蔵文化財発掘技術者一般研修に職員1名を派遣した。



第3図 調査遺跡位置図

I 下郡遺跡群第79次調査 D区n・o-18・19地点

調査面積 468㎡
地域 A

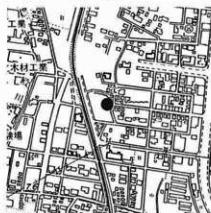
調査期間 96.05.27～96.07.17
調査担当 坪根伸也

遺跡は大部分野中央部を貫流する大分川右岸の標高約6m前後を測る自然堤防上に位置する。今次の調査地点の周辺ではこれまでに数次におよぶ調査が行われており、当地域の遺跡の展開状況が明らかになりつつある。具体的には、南側部分に広く後背湿地が存在し、遺跡はその北側部分に形成されており、弥生時代前期末～近世の間に継続的な遺跡展開が看取される。

弥生時代には中期中頃～後半にかけての集落が広範に分布する。後世の上面削平のため、堅穴住居跡の明確な検出事例は少なく、もっぱら貯蔵穴が検出遺構の主体となっているが、なかには良好な土器資料や炭化米などの植物質資料を内包するものも散見される。

今回の調査では、弥生時代中期の貯蔵穴多数、12世紀代に比定される井戸跡、近世の溝状遺構・土坑等を確認した。なお、調査区の南側部分は18世紀以降に掘削されたと考えられる大型の溝状遺構が存在し、それ以前の遺構は欠失している。

弥生時代の遺構として多数の貯蔵穴を検出した。下郡遺跡群内で確認される貯蔵穴の平面プランには円形基調のものと同方形基調のもの2種が存在するが、今回の調査地点で確認した貯蔵穴は円形基調のものが主体を占め



第4図 調査地点位置図



第5図 遺構配置図 (1/200)



第 6 图 出土遺物実測図 (1/4)

る。土坑埋土には暗黒茶褐色土と黄茶褐色ブロック土の混土層が充填されるものが多くあり、このような埋土状況は人為的に埋め戻された結果と考えられる。また、分布の上でも径約8 m程度の円を描くような分布を示し、この円周上で貯蔵穴の作り替えを想定できるような様相を呈している。このような想定が妥当であるならば、前述の貯蔵穴の埋め戻しはこの作り替えに伴って行われたものである可能性を指摘できよう。

12世紀代の井戸跡(SE101)は調査区の東壁際において確認された。上部は18世紀後半以降に掘削された大型の溝状遺構により切られており、この溝状遺構の斜面部においてかろうじてプラン確認を行うことができる。検出面での径1.4 mを測る円形プランを呈し、北側部分を18世紀前半に構築されたと推定される近世井戸跡(SE088)により切られている。現存深度約1.0 mを測り、埋土は淡暗灰色粘質土の単一土層により構成される。裏込めの存在を示す土層堆積を確認することができなかったことから、機能当時から素掘りの井戸であったと考えられる。出土遺物は混入状態で弥生中期土器片が多数出土する他、白磁碗IV類口縁部片、内・外面にミガキを施す白色系統(研磨土師器)の高台部破片等が出土しており、これらの様相から11世紀後半から12世紀の所産年代を推定することができる。



第7図 調査区全景

近世の遺構には、溝状遺構、井戸跡、土坑等がある。溝状遺構は幅4 m程度のものを基調とし、数回の掘り返しが認められる。ほぼ真東西、真南北方向に掘られており、断面形状はU字形を呈している。今次の調査において、断面土層の観察結果から積極的に流水があった事実を示すことはできなかったが、溝底の随所にみられる窪み状の溜まりには暗灰色の粘質土の堆積が認められ、溝が機能していたある段階に滞水していた状況を示唆している。下部遺跡群内のこれまでの調査でも各所で同様の溝状遺構が確認されているが、これらの出土遺物の様相はいずれも類似し、18世紀前半以降の肥前陶胎染付を主体とする陶磁器群を出土する。また、現況の土地境界と一致する事例も多く、最終的には区画溝として機能した可能性を指摘できよう。

下部地区周辺の土地開発に関しては、「明治水路」の完成による水田耕地の飛躍的な拡大という画期をもって土地利用の転換が行われたという歴史的経緯がある。下部遺跡群内で検出される同種の溝状遺構の所産年代はこの時期に先行し、しかも、遺跡が密に分布する高位面にもみられる点は注意される。今後はこの溝状遺構の展開状況の把握と性格究明が当地域の土地開発史を考究するにあたっての留意点といえよう。

調査区のほぼ中央には略方形プランを呈するSX007がある。現存深度約0.4 mを測り、埋土は4層に分層でき、この中で最上部に位置する第1層は堆積土および堆積状況から後の掘り返しであると判断される。第1層の出土遺物は近代まで下る可能性を指摘できるものの、第2層以下には幕末段階のものを中心に多量の遺物を内包する。その中には焼継により補修された肥前青磁染付大皿や博多土人形などがあり、前者の底面には「萬や町中村や□□ケ□」の焼継文字がみられる。この萬や町は府内城下町の塩九升口に近い「万屋町」を指し示していると考えられ、当時、大分川を介した下部地域と「府内」との物流状況の一端を示す資料として注目されよう。

(坪根)

II 下郡遺跡群第81次調査 I 区p-10地点

調査面積 238㎡
地域 A

調査期間 95.04.08～95.04.27
調査担当 坪根伸也

今回の調査地点は、字「池の上」にあたり、大分川にそって展開する自然堤防上を南北に走るJR豊肥線の西側部分に位置する。

調査の結果、整地層を伴う近世集落跡を確認した。調査対象範囲の東側と南側には泥炭土層の堆積する低湿地帯が存在し、なかでも東側の低湿地部分には近世段階に行われた複数の整地痕跡が認められ、土地基盤改良による土地利用範囲の拡大を指向した状況がうかがえる。

東側整地部分には2枚の整地層を挟みこの間に遺構の形成が認められ、都合6時期の変遷を推定することができる。

古い順から示すと次のようになる。

SK004→下部整地層→SK005→SK003→上部整地層→SD001

SK004からは当地域で8世紀段階にみられる有溝土鍾以外に目立った遺物の出土がなく、具体的な所産時期は不明である。下部整地層中からは陶磁器片が出土しており、その遺物様相から18世紀前半から中頃の年代を推定することができる。SK005は直接的に年代を示す遺物の出土はないが、瓦質の井戸枠片が円礫とともに投棄されており、廃棄土坑としての機能が想定される。SK003には獣骨片、陶胎染付、青磁染付片などが内包され、18世紀後半以降の所産年代を推定できる。また埋土の最下部には滞水状況を示す粘質土層の堆積がみられ、水溜としての機能の想定も可能である。

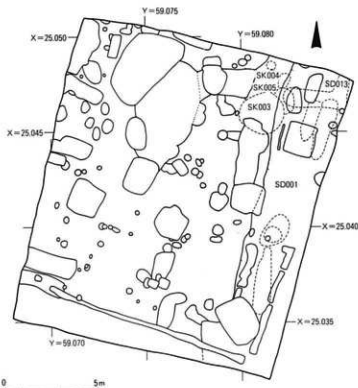
以上の所見から、整地層は18世紀後半～19世紀初頭前後に施行されたものと推定される。また、下部整地はSD013の掘削を伴い、SD013の埋土状況から常に滞水していた状況を想定することができ、東側の低湿地からの誘水を意図して構築されたものと考えられる。なお、上部整地層はこれらの施設の埋め戻しも含めた低湿地部を完全に埋めてしまうことを目的としたものである。

今回の調査において、下郡地域の近世集落の様相の一端を明らかにすることができた。上記の変遷は集落全体の構造変化に伴う可能性も指摘され、整地層の存在の確認は今後の下郡集落の変遷解明に大きく資するものと期待される。

(坪根)



第8図 調査地点位置図



第9図 遺構配置図 (1/200)

Ⅲ 下郡遺跡群第82次調査 B区f-16地点

調査面積 161.4㎡
地域 A

調査期間 95.04.17
調査担当 坪根伸也・新藤美由紀

今回の調査地点は、昭和63年に弥生時代の家畜動物遺体を確認した下郡桑苗遺跡の南東約100mの地点に相当する。

調査当初、対象地域の東側部分の掘り下げを実施し、地表面からおよそ4.5m掘り下げた段階において第64次調査地点で検出した河道跡様の落ちと同様の土層堆積を確認した。これを受け、約160㎡について面的な掘り下げを実施した。

調査は大量の湧水のため下方への掘り下げは困難を極めたものの、調査区北西角部分において現地表下3.6mまでの土層断面柱状図の作成と写真撮影を行った。

土層断面観察の結果、最上部の客土層を含み16の土層の堆積を確認した。

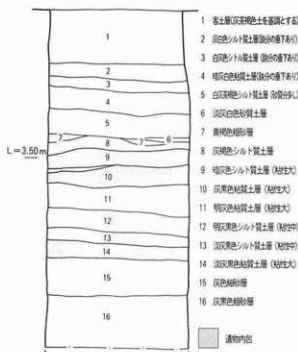
第2～4層には土層状況から水田耕作層と考えられる。第5層はシルト質の土層であるが、下位に位置する第8層との間にラミナ堆積物を確認することができ、この層の堆積直前まで流水のあったことを示唆している。この下部土層はシルト質土層と粘質土層の互層により構成されることから、第8層以下の堆積土層が河道跡の埋土となる可能性が高い。出土遺物に関しては、第9、10層において古墳時代初頭に比定される土器片が少量出土した他、第14層中には弥生時代中期初頭に編年される下城式壺形土器破片などが出土しており、本層の所産年代推定の参考となる。その下部の第15層以下は灰色細砂と灰黒色粗砂との互層となり遺物は確認されない。(坪根)



第10図 調査地点位置図



第11図 土層断面



第12図 土層断面図 (1/40)

IV 下郡遺跡群第83次調査 H区p-22・23地点

調査面積 65㎡
地域 A

調査期間 96.04.25～96.04.26
調査担当 讃岐和夫・坪根伸也

本地点は、下郡遺跡群の中でも大規模な弥生時代後期末の環濠集落の存在が確認されているエリアに位置する。

調査の結果、調査区の長軸方向に沿って4条の溝状遺構を検出した。この4条の溝状遺構のうち、南側の3条は近世（18世紀後半以降）に掘削されたもので、同一溝の掘り返しにより形成されたものである。

北側に位置するSD001は検出面での幅約0.6mを測り、現存深度約0.5mを測る。溝の断面形状は略台形を呈し、埋土は暗茶褐色土の単一土層により構成される。出土遺物は概して少ないが、底面付近から完形の土師器小皿、龍泉窯系の腰折高台付青磁皿の破片が出土している。後者から導かれる溝の機能時期はほぼ15世紀後半～16世紀前半後と考えることができ、他の出土細片を精査しても今のところ時期的に矛盾するような資料はない。

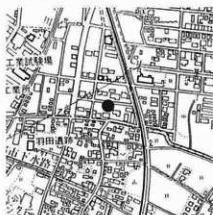
以上の状況から、現状ではSD001の機能時期をほぼこの時期のものとして大過ないものと考えている。

出土した土師器小皿は完形品であり、口径8.3cm、器高1.8cm、底径4.4cmを測る。胎土中には褐色粒子、石英粒を含んでいる。

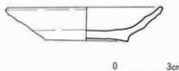
これまでの周辺地域での調査所見に目を転じると、本調査地点に近接する下郡遺跡群第5次調査において京都系土師器皿3枚をもつ木棺墓1基が確認されており、近接する時期の遺構として相互の関連が注目される。

溝出土資料という性格上、出土遺物の同時性には慎重な姿勢が必要となるが、溝埋土が単一層であり、また、先述した理由から出土した2点の遺物の時間軸上の距離は極めて近い可能性を指摘できる。そういった意味合いからもこれらの遺物は編年作業の遅れが否めない当地域の中世末期の土器編年作業にもひとつの見通しを与えるものとして重要といえよう。

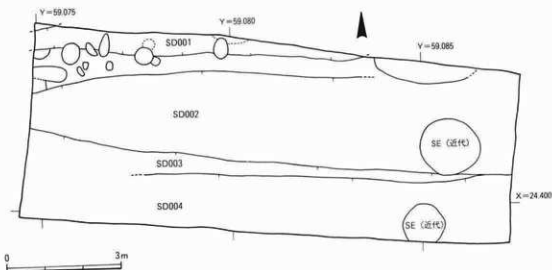
(坪根)



第13図 調査地点位置図



第14図 出土遺物実測図 (1/2)



第15図 遺構配置図 (1/100)

下郡遺跡群
第82次調査
第83次調査

V 下郡遺跡群第84次調査 F区m-8地点

調査面積 120㎡
地域 A

調査期間 95.05.18～96.05.30
調査担当 坪根伸也・新藤美由起

今回の発掘調査地点は平成4年度に調査を実施した第34次調査地点に隣接し、当時水路が所在し調査が行えなかった部分にあたる。

調査の結果、規則的な配列状況を示す柱穴列を確認した。遺構配置図には柱穴の埋土の状況、深度、検出位置等の現地における観察を基に最も妥当性の高いと思われる復原案を示したものである。

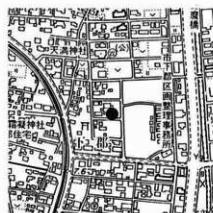
この復原案により注目すべき所見を得ることができた。柵列(SA001)の存在である。

検出した柱穴列は調査対象範囲の制約から、全容を明らかにすることはできないが、この柵列は明らかに真北を指向した方向性を示し、ほぼ直角に近い屈曲を示し西方向へ展開する。時間的には柱穴内の埋土内から8世紀中頃～後半代に比定される須恵器蓋の破片等が出土しており、ほぼこの時期の所産と考えられよう。

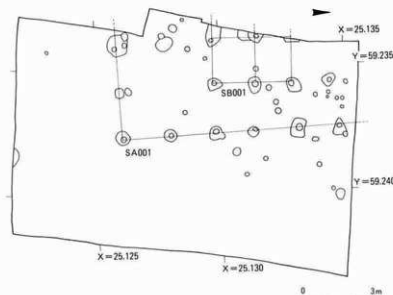
このような柵列は、明確に区画を意図したものであり、本調査地点の西側に柵によって区画された空間の存在を示唆している。しかも、今回の調査区はこの区画空間の南東角にあたと想定される。また、SB001の存在から区画内にもかなり規則性の高い建物配置が存在することも考えられ、これらの検証が今後の周辺調査における重要な課題といえるであろう。

これまでの調査で近接する第34次調査においても真南北、真東西方向に沿う建物群が確認されており、今次の調査で想定される区画空間の外側に展開する建物群として関連が注目される。

(坪根)



第16図 調査地点位置図



第17図 遺構配置図 (1/150)

VI 下郡遺跡群第85次調査 D区o-17地点

調査面積345㎡
地域 A

調査期間 96.05.27～96.07.17
調査担当 坪根伸也・新藤美由起

今回の調査地点は第79次調査地点の北側にあたり、住宅建設のための事前調査として調査を実施した。

調査区の東側部分は、基盤土層が砂層であり、そのため遺構の遺存状況が極めて悪い。

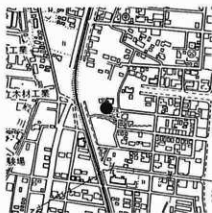
これに対して調査区の西側部分は黄褐色土層を基盤としており、明確に遺構を確認することができる。この基盤土層の二極的な現象は、東側部分に旧河道が重複している可能性を示唆しているものと理解される。

また、このような状況の中で当地は下郡集落内に連絡する旧道沿いに位置し、それ故近世段階から現代に至るまで間絶なく家屋が建てられていた場所でもある。

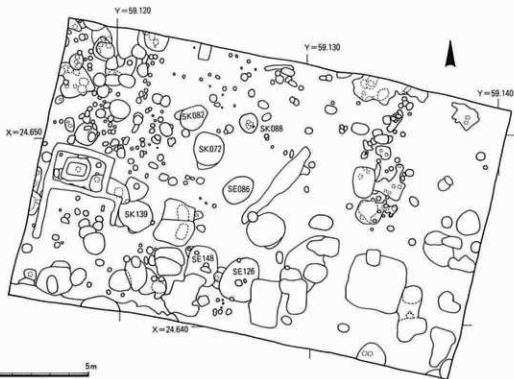
調査の結果、この状況を裏付けるように多くの擾乱土坑と井戸跡の存在が確認された。これに中世段階、弥生時代中期段階の遺構が重複するといった状況で調査区内に遺構が展開する。

以下には多くの検出遺構の中で主要なものについて概略を記述する。

井戸跡ではSE086、SE126の2遺構を確認した。SE086は現存深度約1.5m、径約1.5mを測る。井戸埋土内からは須恵器片、土師器片、瓦質土器片、青磁片、銅片等が出土しており、さらに曲物の出土も確認した。明確に所産時期を押さえることのできる遺物の出土はなかったが、銅等の形態が下郡遺跡群第31次調査で確認され、12世紀後半代と考えられているSE001出土のものに類似し、形態の上で典型的に若干後出するものと考えられること



第18図 調査地点位置図



第19図 遺構配置図 (1/200)

からこの井戸を13世紀初頭前後の所産になるものと考えている。SE126は深さ2m以上、径約2.5mを測る井戸跡である。

出土遺物には須恵器片、白磁碗IV類の底部片、瓦器碗底部片、龍泉窯系青磁碗1-V-b類片等が出土した。これらの出土遺物の様相から12世紀前半に使用されていたものと考えられる。

SE148は深さ約2m、径約1.8mを測る井戸跡である。埋土内からは染付碗、陶胎染付碗、瓦質土器等が出土しており、およそ18世紀代の所産年代を推定できる。

弥生時代の貯蔵穴としては、SK072、SK082、SK088、SK139の4遺構を確認した。SK082、SK088、SK139はいずれも出土遺物は僅少であるが、SK072からは数多くの土器片が出土した。

SK072は径約3mの貯蔵穴であり、床面中央部にセンターピットを有する。

出土した土器は全て弥生時代中期中頃の土器片であり、貯蔵穴の機能終了後に廃棄されたものと考えられる。

これら貯蔵穴の堆積土層はブロック土を含む単一土層で構成されており、人為的に理められた可能性が高いと推定される。

今回の調査では、弥生時代中期の貯蔵穴、中世井戸跡、近世井戸跡、土坑等を確認した。

弥生時代中期の遺構に関しては、既往の周辺調査地点においても確認されており、当該期の遺構が広く展開している事実を改めて示したといえる。この弥生時代中期中頃には長大な溝状遺構を有する集落が当地周辺に展開する状況が次第に明らかになりつつある。

当地点は当該集落跡の南辺部分に想定され、第79次調査の所見も踏まえると、貯蔵穴が密集するエリアとして今後の周辺調査の進展に伴う弥生集落内での位置づけが注視される。

中世に関しては井戸跡の確認のみであったが、古代末から中世への過渡期の集落展開が本地点にも及んでいる事実を示し得た点は注目される。

今回の確認により12世紀前後の集落展開が下郡遺跡群の中で予想以上に広範な分布を示している事実が明らかとなった。今後は遺構の遺存状況の良否が大きく左右することになるが、井戸跡に伴う建物遺構の確認とその配置の検討が緊急の課題と言えらる。

(坪根)



第20図 調査区全景

Ⅶ 下郡遺跡群第86次調査 I 区q-16地点

調査面積 339㎡
地域 A

調査期間 96.07.22～96.08.25
調査担当 坪根伸也

今回の発掘調査地点は平成7年度に調査を実施し、8世紀代に比定される道路状遺構を検出した第69次調査地点とJR豊肥線を挟み対置する地点に位置する。

調査の結果、弥生時代中期中頃から後半の溝状遺構(SD014)、古墳時代後期のものと考えられる作り付け竈を有する堅穴住居跡(SH013)、8世紀末から9世紀に比定される総柱掘立柱建物跡(SB050)を確認した。弥生時代の溝状遺構は、隣接する下郡遺跡群第73次調査地点において検出されている溝状遺構に接続するものである。検出面での幅3.5mを測り断面形状は逆台形を呈する。前回の調査と同じく堆積埋土中位に遺物出土の集中部分があり、溝埋没途中に投棄されたものと推定される。これまでの各地点の調査地点の状況を総合すると、この溝状遺構は南北に延びる自然堤防に沿って掘削され、同時期の遺構がこの溝状遺構の東側に集中的に検出されていることからこの溝は当該期の集落の西限にあたるものと推定される。

古代の遺構に関しては総柱の掘立柱建物跡が唯一である。柱穴は一辺約1mの略方形の大型の掘り方を有し2間×2間の規模を有する。柱穴内の平面精査により確認できる柱痕の径は約0.35mを測る。柱穴の掘り方埋土から8～9世紀に比定される土師器小片が出土しており、建物跡の帰属年代をおおよそ9世紀代に求めることができる。これまで本次の周辺地域での顕著な古代遺構としては第69次で確認されている道路状遺構がある。これは、JR豊肥線を挟むといった位置関係にあり、極めて至近な距離にある。道路状遺構は真南北を基準として溝状遺構を掘削し、この底面に連続土坑の構築、粘土層の充填といった所作がなされていた。路面幅は1m前後と小さく、区画路的な機能を想定している。掘削年代は埋土から出土する土器の諸相から8世紀中頃と考えられ、その後は掘り返しを含めた再整備を順次行いながら、9世紀の早い段階に機能を停止するものと考えられている。

今回検出した総柱建物跡の主軸方位はN-18°-Eを示し、真南北方向に展開する第69次調査区の道路状遺構とは方向が異なる。时期的な面に関しても道路遺構の最終段階で同時併存はありえるものの、道路遺構は終息の段階へと向かっており、道路遺構の変遷のみを見る限りにおいては、この段階に巨大な掘り方をもつ建物を傍らに作る必然性はないように思われる。

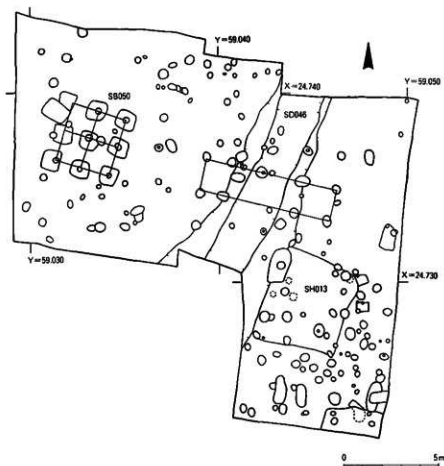
もうひとつの疑問としては、この建物が群をなして存在するのか、それともなんらかの目的をもって単独で存在するのかという点である。同時期の他地点で確認されている建物群とは柱穴掘り方の規模において卓越しており、気になる建物跡と言える。少なくとも第73次の状況を踏まえると南側への展開は考えにくく、北側、



第21図 調査地点位置図



第22図 調査区全景



第23図 遺構配置図 (1/200)

あるいは西側へ展開する可能性が残されている。今後の調査における留意点といえるであろう。

第69次、今回の第86次調査の所見によって、下郡遺跡群の南西部分に相当するH区においても8世紀段階から古代の遺跡展開が活発に行われていた状況がおぼろげながらイメージされるようになってきた。

これまでの下郡遺跡群の8世紀から9世紀の遺構群というのは、遺跡群のほぼ中央にあたるF区、および巨大な旧河道を介して東の鶴崎丘陵の麓に展開するB区の2地区に集中分布する状況が想定されてきた。それが、今回の一連の成果により新たな遺跡エリアが追加されることになり、大分都衙の可能性も示唆されている下郡遺跡群の当該期の遺構群の広がりが予想以上に広範な分布を示していることが明らかとなった点は大きな成果といえよう。今後は各エリア間の関連性の追求をも射程にのれた遺跡、遺構の評価が重要となてこよう。（坪根）

VIII 下郡遺跡群第87次調査 E区p-16地点

調査面積 1,435㎡
地域 A

調査期間 96.08.10～96.10.05
調査担当 坪根伸也・中西武尚他

今回の調査は区画街路一庄ノ原佐野線の築造に伴う事前調査として実施した。調査の結果、縄文時代後期から近世の遺構・遺物を検出した。なかでも主体を占めるのは弥生時代中期のものである。主要な遺構として、円形竪穴住居跡2基+α、方形竪穴住居跡1基+α・土坑9基+α、階段状土坑1基、掘立柱建物跡1棟+α、溝状遺構3条、井戸跡3基を検出した。

以下に主要遺構について略述する。

竪穴住居跡

竪穴住居跡には円形と方形を呈するものの2種がある。

SH478は4つの主柱穴を有する方形竪穴住居跡である。一部が調査区外にあたるため、全体規模は不明であるが、現状で3.8m×3.9m+αの規模を有する。住居内の西壁中央には竈が付設されている。出土遺物は概して少ないが、竈の部分から小田編年ⅢB期に相当する須恵器坏蓋が出土しており、住居の帰属年代(6世紀後半)を示している。

SH559は調査区北東端において確認した径約7mを測る円形竪穴住居跡である。北側は井戸跡(SE670)によって大きく削平されている。住居のほぼ中央付近においてほぼ完形に復元可能な東北部九州系の甕形土器(跳ね上げ口縁甕)2個体が出土した他、口縁部に掘凹線文を施した土器などが伴出することから、この住居を弥生時代中期末～後期初頭の所産と考えることができる。住居床面には明確に炉と認識できるような施設は確認することはできなかったが、北東隅に青白色粘土塊が認められ、その用途が気になるところである。また、この住居からは先の欠損した磨製石鐙の出土も確認されている。

SH833は調査区のほぼ中央北側に位置する。検出面での径約6.5mを測る円形竪穴住居跡であり、埋土内に中期初頭に編年される下城式甕形土器を主体的に内包する。

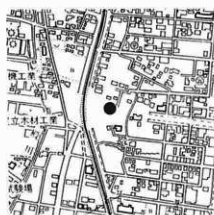
土坑

土坑は調査区の中央から西側にかけて比較的多く分布する。土坑の平面形状には方形・不整円形・長楕円形のものがある。

SK007は調査区の西側に位置している。検出面において長軸1.8m、短軸1.7mを測る隅丸方形プランを呈している。現存深度0.2mを測り、長軸方位N-45°-Wを示す。底面中央には長軸0.7m、短軸0.55m、深さ0.2mの掘り込み(センタービット)を有している。出土遺物は少量であるが、頸部突帯をもつ弥生中期の甕形土器や下城式甕などの破片が出土している。

SK106は長軸2.3m、短軸1.4mの隅丸長方形プランを呈している。現存深度約0.25mを測り、長軸方位はN-30°-Wを示す。底面中央にセンタービットを伴う。埋土内には廃棄されたような状況で中期中頃の土器が出土する。

SK200は調査区のほぼ中央に位置しており、SD177により遺構の東側を一部削平されている。検出面で長軸2.3m、短軸1.4mを測り、不整楕円形プランを呈する。現状での深さ0.15mを測り、長軸方位はN-60°-Eを示す。底面のほぼ中央には段落状の掘り込みとそこから掘り込まれる柱穴が認められる。柱穴は径約0.25～0.3mを



第24図 調査地点位置図

測り、0.25mの深さを有する。遺物は埋土上層からまともに出て出土し、下層からの遺物の出土はほとんど認められない。

SK215は東側の一部をSD177により削られている。長軸1.85m、短軸0.9mを測る不整楕円形プランを呈している。0.3mの深さを有しており、長軸の方位は $N-45^{\circ}-E$ を示す。出土遺物は概して少ない。

SK254はSB001などによって一部削平を受けている。検出面での規模は長軸長1.85m、単軸長1.8mを測り、不整円形を呈している。現存深度0.3mを測り、長軸方位は $N-40^{\circ}-W$ を示している。底面中央には深さ0.4mのセンターピットをもつ。遺構の南側部分ではほぼ完形の丹塗りの甕形土器をはじめとしてまともな遺物の出土が認められる。また、これらの遺物とともに焼土の出土がみられ、出土土器との関連が注目される。

SK426はSD244により東側を一部削平されている。このため本来の平面プランは不明であるが、現状で長軸2.0m、短軸1.5mを測る不整楕円形を呈している。

SK429はSD244の東側に位置し南西部をSD244により削平されている。長軸2.0m + α 、軸方位 $N-50^{\circ}-E$ を示す。出土遺物には、ほぼ完形に近い跳ね上げ口縁甕や下城式甕などがある。

SK445は調査区東側のほぼ中央に位置している。長軸1.6m、短軸1.0mの不整方形を呈している。0.2mの深さを有し、 $N-42^{\circ}-E$ の長軸方位を示す。

以上が主要な土坑の概略であるが、これらは今回の調査区内において一定の規則性を見出すことができる。具体的には調査区の西側に分市するものは長軸の方向が北から西に振れるのに対し、東側のものは逆に北から東側に振れるという傾向にある。

当地域の貯蔵穴の分布に関しては、すでに下部遺跡群第3次調査において6～8基の貯蔵穴がひとつの群を形成し、径7～8mの円を描くような分布を示すことが指摘されているが、今回の分布傾向はこのようなものとはまた異なった分布を示している。現段階では方位を異にするそれぞれのグループの出土遺物の分析を通じて厳密な時期比定とそれに基づいた比較をおこない、上述の傾向が同時代的に有為の所作として行われているのかどうかの究明をおこなう必要がある。今後の課題としておきたい。

特殊な形態を示す土坑としてSK025がある。調査区の西側部分に位置し、長軸3.2m + α 、短軸1.1mを測り長軸の方位 $N-42^{\circ}-W$ を示す。土坑の南東部は階段状になっており、それに伴う段部は3段 + α を確認できる。最下段は0.9m × 0.7mの比較的広いフラット面を形成し、他の段と比較すると2倍強のスペースを有している。遺構の北西部分は最終段から約0.75mの段差を有する円筒状の掘り込み部となっており、この部分の平面プランは径1.3mの円形を呈している。階段状の部分と円筒状の部分は平面精査段階において切り合い関係を確認することができなかった点や埋土に両プランを通じて連続的にまともな状況で土器が出土している点などを考慮するとこの両者は一連の遺構である可能性が高いと考えられる。この想定に基づき土坑の機能を考えてみると、階



第25図 調査区全景

段状の部分で最下段の広くフラットな空間を有する部分まで降り、堆積土層の状況から滞水していたと考えられる円筒部分に対し、なにがしかの作業を想定することができよう。したがってこの土坑については簡易な井戸的な性格を想定することができるものと考えられる。所産時期に関しては埋上中の遺物のあり方から弥生中期の範疇で考えることができ、上部層の土器様相からやはり中期の範囲の中で廃絶したものと推定される。

掘立柱建物跡

SB001はSH833の上部において検出されている2間×2間(3.4m×3.0m)の掘立柱建物跡である。主軸方位はN-65°-Eを示す。

出土遺物がほとんどなく、所産時期は不明である。遺構の切り合い関係から弥生時代中期以降の所産という点のみを指摘することができる。

溝状遺構

南北方向に走る溝状遺構3条を検出した。

SD100は調査区の中央西側に位置しており、検出面での幅約1.0mを測り、溝底面幅約0.85m、深さ0.3mを測る。約29mについて検出している。溝の断面形状は逆台形を呈しN-5°-Eの方向に展開する。調査区内をほぼ南北に同じ形態で掘られている。出土遺物には土器器蓋や碗の底破片がみられ、その形態から8世紀後半～末の所産と考えられる。

SD177は調査区のほぼ中央に位置して



第26図 遺構配置図 (1/300)

いる。検出面での幅0.3～0.4mを測り、深さ約0.3～0.4mを測る。約27mについて検出した。溝の断面形状はU字形を呈しており、N-15°-Eの方向に展開する。出土遺物には双孔棒状土鐏の他、白磁の小破片等がみられることから中世以降の所産と考えられる。

SD244はSD177の東側に位置する。約29mについて検出しており展開方位はN-10°-Eを示す。調査区の北側部分での溝幅約1.0m、南側では0.6mを測る。深さについては北側で0.5～0.6m、南側で0.4mを測る。溝の断面形状は北側ではV字状を呈し、南側では次第に鈍くなりU字形に近くなる。出土遺物に白磁碗IV類、緑釉陶器片がみられ11世紀末～12世紀前半の所産と考えられる。

井戸跡

井戸跡には素掘りのもの1基（SE670）、基底部に曲物を有するもの2基（SE074・SE360）を確認した。いずれの井戸跡とも瓦器碗、土師器小皿、白磁碗IV類、研磨土師器破片などが出土し、12世紀前半代の所産年代を推定できる。



第27図 SK025完掘状況

以上が第87次調査の主要遺構に関する概要である。

文頭で触れたように今回の調査区では縄文時代後期～近世の遺構・遺物が出土した。縄文時代に関しては後期に偏年される土器破片数点が弥生土器と混在状態で出土した。この時期の所産となる遺構の確認はなされていないが、当地点の周辺調査区では縄文土器の出土が数点単位で確認されており、付近に当該期の遺構が存在している可能性は高い。

弥生時代の遺構に関しては、中期を中心とする遺構が密に分布する。これは調査区の西側で確認されている当該期の溝状遺構に伴うものと考えられ、集落が東側により濃密に分布している状況を示している。

古代については今次の調査区の西側に主要遺構が点在しているのに対し、第87次調査地点での検出遺構が溝状遺構と少数の土坑といった状況は極めて対照的であり、この差異の原因究明も今後の課題となろう。

中世に関しては、3基の井戸跡を確認した。いずれも時期が近接しており、付随する建物の探索とその配置構造の把握が急務といえる。

（坪根・中西）

IX 下郡遺跡群第88次調査 H区o・p-21地点

調査面積 300㎡
地域 A

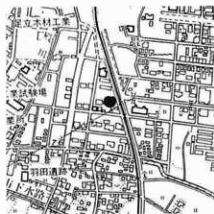
調査期間 96.11.22～96.12.20
調査担当 坪根伸也

今回の調査地は下郡遺跡群の中でも羽田遺跡に近接する南部地域に位置する。調査は電波塔の建設に先立つ事前調査として実施した。

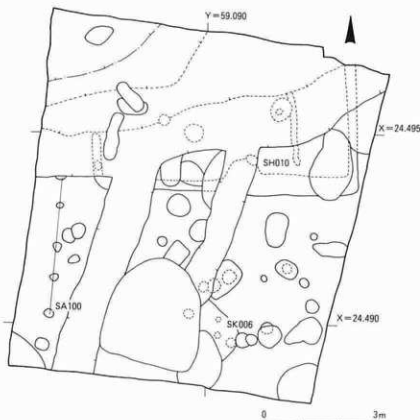
調査の結果、弥生時代後期終末の堅穴住居跡（SH010）、8世紀後半代の土坑（SK006）、中・近世の溝状遺構、柵列（SA100）を検出した。

今回の調査地点は、大分川が形成した自然堤防上の最高位面に位置する。周辺地域には過去の調査において弥生時代終末～古墳時代初頭に比定される環濠集落の存在が知られている。また、近世溝、中世溝はほぼ同一地点に掘削され、長期間、同一ルートを踏襲していた状態を看取することができる。SH010は方形プランを呈する堅穴住居跡であり、出土遺物から弥生時代後期終末に比定される。北側半分を中・近世溝により切られ欠失する。現状により推定される規模は $6.8\text{m} \times 3.3\text{m} + \alpha\text{m}$ を測り主柱は4本であったと考えられる。壁溝を有し、東側には間仕切りの痕跡が認められた。当地点は上述の環濠集落の推定エリアの外に相当し、当該期の住居分布を考える際の新資料を提供したといえよう。また8世紀代の遺構にSK006がある。いわゆる企救型甕等を伴うが、表土中にも焼塩釜の底部片などが散見され、周辺に当時期の遺構が密に展開しているものと推定される。

（坪根）



第28図 調査地点位置図



第29図 遺構配置図 (1/100)

下郡遺跡群
第88次調査
H区o・p-21

X 下郡遺跡群第89次調査 G区s・t-3地点

調査面積 210㎡
地域 A

調査期間 97.01.07～97.02.05
調査担当 坪根伸也

第89次調査地点は、下郡遺跡群が立地する自然堤防の北西端部に相当する。調査区の西側は現状で約3mの段差をなし、この低位面は大分川方向に展開する。

調査は整地工事に伴う事前調査として実施した。調査の結果、N-5°-W方向に展開する古代の溝状遺構（SD001）、土坑（SK002・003）を確認した。

表土直下に拳大の円礫と粗砂によって構成される堆積土層が存在し、遺構はその上面において確認される。他地点との遺構確認下の堆積土層の比較から、現況においても検出遺構の上部はかなりの削平を受けているものと推定される。この推定を傍証するように、溝（SD001）埋土の中には他地点で基盤土層として認識される黄茶褐色土の多量の流入が認められた。

遺構検出面での平面精査の結果、現存する西側の段差は、後世の人工改変の結果であることが判明し、旧地形は現状よりも西側に延びていたことが明らかとなった。この人工改変による段差形成により、溝状遺構の西側部分は欠失する。

SD001には数回の掘り返し痕跡が認められる。掘削当初の溝幅は西側部分が調査区外に延びており、先述したようにすでに削平され不明である。ちなみに調査段階で確認できた溝幅は約8mであり、本来はこれ以上の規模を有していたことになる。

SD001の構築年代に関しては、最下層から出土する土師器環や甕形土器破片の諸特徴から8世紀後半～9世紀前半に掘削された可能性が高い。その後、数回にわたって掘り返しや改修が行われたと推定されるが、溝埋土から出土する遺物の下限が9世紀の範疇を出ることがない点を考慮すると、溝は9世紀のうちにその使命を終え、廃棄されたものと推定される。

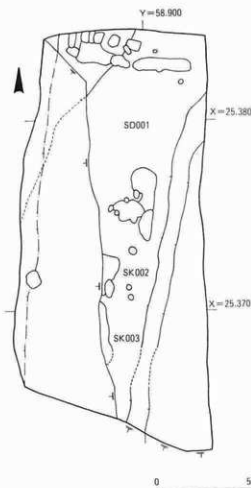
また、溝埋土には粗砂層、シルト質土層などの水性堆積物が認められ、当時流水があったことを物語っている。

土層の堆積状況の観察から、数回におよぶ掘り返しの直接的な原因の中には、自然営力による土砂の大量堆積があった点も指摘される。

出土遺物には、縄文土器片、弥生後期甕底部破片、古墳時代土師器・須恵器片、7世紀後半に比定され

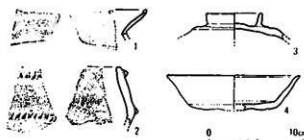


第30図 調査地点位置図



第31図 遺構配置図 (1/200)

る須恵器蓋、8～9世紀代に比定される土師器環、甕型土器I緑部破片、緑軸陶器破片などがある。いずれも溝埋土内から出土するものであるが、細文土器以外の遺物にはそれほどローリングを受けたような痕跡は認められず、溝機能時に極めて至近場所から流れ込んだ状況を想定することができよう。

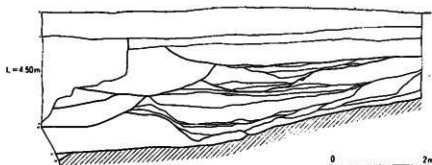


第32図 出土遺物実測図 (1/4)

の時間的位置づけの確立といった方向性により、精緻な編年案が構築されつつある。これらの成果を援用すると、今回出土した刻目突帯文土器はその諸様相から直人郡直人町に所在する日向塚遺跡、同古戦遺跡出土資料に類似しており、刻目突帯文土器の中でも新出のものである可能性が高い。

古代の遺物としては、8世紀～9世紀に属する種々の遺物が出土している。主要なものとしては、輪状つまみを有する土師器蓋、緑軸陶器破片、甕後大分型甕片、企救型甕片、暗文土師器片、有溝土鍾などがある。

SK002・003は調査区の南側部分において確認され、SD001埋土上面に掘り込まれている。西側部分は近年の掘削によって切られている。両者とも淡茶褐色土の単・土割を埋土とする。埋土中には瓦質の楕円片、瓦器境のI緑部片などを内包しており、これらの遺物の様相から14世紀以降の所産になるものと考えられる。



第33図 北壁土層断面図 (1/80)

統して道跡が営まれる。SD001が構築される8世紀後半～9世紀は道跡が大規模化する時期にあたり、この時期にこのような大規模地業が行われた点は注意される。

(坪根)

細文土器には晩期に比定される2点が出土している。1は晩期後半の精製土器のI緑部破片である。かなりローリングを受けており、流水により当地に運ばれたものと推定される。2は晩期終末に位置づけられる刻目突帯文土器深鉢のI緑部破片である。内・外面には1率なナデ調整が施される。点内の刻目突帯文土器の編年研究は、近年浅鉢の型式変化を基軸とし、これに組み合わせる他器種

今次の調査では8世紀後半～9世紀の時間軸の中で機能したと推定されるSD001の性格が極めて注目される。下部道跡群ではこれまでの調査において8世紀中頃に官衛的な道跡の形成が看取され、継

XI 下郡遺跡群第91次調査 H区q・r-18地点

調査面積 80㎡

地域 A

調査期間 97.03.03～97.03.28

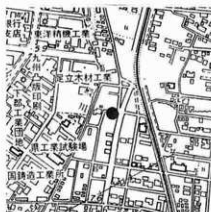
調査担当 坪根伸也・林潤也

今回の発掘調査地点は、昭和62年度に調査を実施した第5次調査、および平成6年度の第49次・第50～53次調査地点に近接する。過去に行われたこれらの調査では弥生時代中期～古墳時代におよぶ集落跡が確認されており、今回の調査区も当該集落エリアの一角に相当する。

調査は、道路建設に伴うもので、調査の結果、弥生時代後期末の堅穴住居跡、古墳時代以降の所産になると考えられる柱穴群などを確認し、前述の想定を追証する結果を得ることができた。

SH001は弥生後期末に位置づけられる堅穴住居跡である。

調査区の北西部分で検出されており、大半が調査対象地外に展開するため、規模、支柱の位置など詳細は不明である。今次の調査では住居の南辺部分について調査を実施した形となり、この南壁に沿って構築された長径約1.0mを測る屋内土坑を確認した。埋土中からは当該時期の土器資料が出土している。多数の円孔を脚部に施した器台、ベルト状突帯を胴中位に有する壺形土器片などがあり、特に前者は西部瀬戸内に特徴的に分布する多円孔の大型器台との関連が注目される。

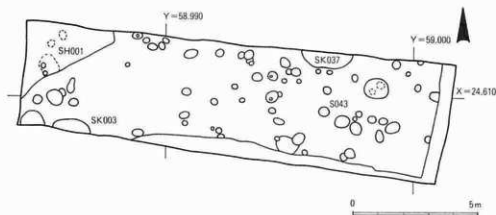


第34図 調査地点位置図

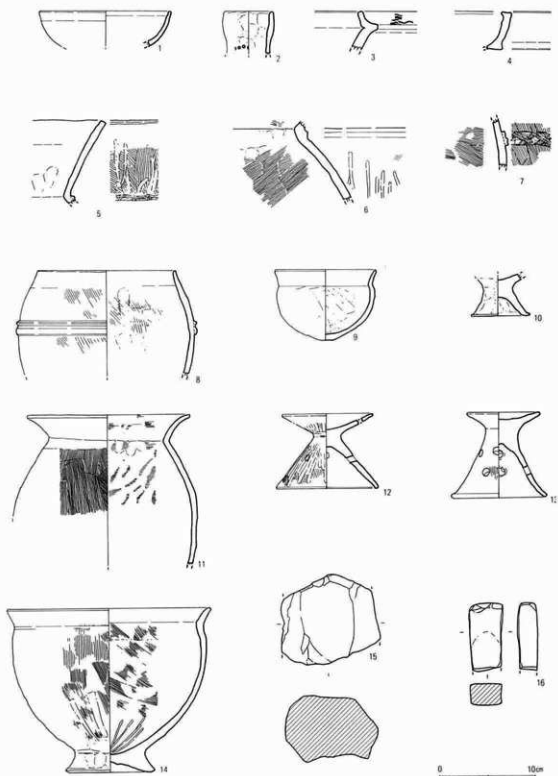
SK003・SK037はその構造・形態から貯蔵穴と考えられる。いずれも調査区内で完結しておらず、不明な点は残るが、規模の上では径1.5～2.0m程度の円形プランを呈するものと推測される。両者ともに出土遺物が僅少で帰属年代に関しても不明な点が多いが、SK037出土遺物はいずれも弥生中期の範疇で理解される。一方、SK003は埋土内に櫛歯波状文を施した複合口縁壺の破片資料を内包することから、最終埋没時期を後期と考えることができる。

調査区内には上述の遺構と混在し、多数の柱穴が点在する。これらの柱穴に関して今回の調査範囲の中で建物等として完結する規則的な配列を認めることはできなかった。各柱穴から出土する遺物は少なく、厳密な所産時期の特定は困難であるが、唯一S043から時期特定の可能な須恵器蓋破片が出土しており、時期推定の参考となる。出土した須恵器蓋は陶邑編年のⅢ型式2～3段階に相当するものであり、7世紀後半の年代観を付与できる資料である。他の柱穴からも形状は不明瞭ながら同種の須恵器破片が出土しており、柱穴群の構成時期の一定点を示唆するものである。

(坪根)



第35図 遺構配置図 (1/150)



第36図 出土遺物実測図 (1/4)

ⅩⅡ 横尾遺跡群48次調査 A-20・21地点（横尾下組遺跡）

調査面積 500㎡
地域 E

調査期間 96.08.02～96.08.20
調査担当 池邊千太郎

遺跡は、大野川下流左岸の第一河岸段丘上の標高35mにあたり、大分市横尾土地区画整理地内の中央西側付近、大分市大字横尾字寺ノ下に所在する。調査は、道路建設に伴って平成8年8月2日から8月20日にかけて行われた。

調査の結果、中世から近世の掘立柱建物跡5棟、近世の円形・隅丸方形の土坑15基、墓を2基、用途不明の曲げ物を埋設した土坑3基を確認した。

掘立柱建物跡は調査区の北側に位置する。SB001は、桁行方向を南北に向け、建物規模は3間×2間（2m+2m+3m×2.5m+2.5m）である。身舎面積は35㎡、桁行方向は、N-14°-Eである。中世須恵器の甕片と思われる遺物が出土している。SB002は、桁行方向を東西に向け、建物規模は3間×2間+α（2m+2m+2m×2.5m+αm）である。桁行方向は、N-12°-Eであり、SB001と柱穴の形状や柱間隔ならびに建物方向が類似しており、同時期のものと考えられる。遺物には土師器の糸切り底の杯片が出土しており、15世紀代を中心とする年代が想定される。

近世の墓は、SK019が棺桶を埋設した早桶でSK011が曲げ物を埋設したものである。SK019は直径1mの桶を埋設したもので、埋土中に揺鉢や土師質土器など18世紀前半代の遺物が含まれることから、遺構の年代の上限として捉えることができる。

調査区域東南隅には直径1mほどの円形の土坑が多く見られる。SK002・SK025・SK026は、土師質の埋甕が見られた。SK002からは、塚産の揺鉢や陶器など18世紀中頃の遺物が出土しており、他の埋甕も近似した年代が考えられる。SK001とSK006は直径1.4mの土坑で床面の壁際に沿って溝が巡っている。用途は不明である。SK012・SK014・SK016の遺構は直径80～100cmほどの円形の土坑である。肥前産の碗、揺鉢、香炉、紅皿など18世紀後半代の遺物が多く出土している。

このように東南隅に18世紀後半代の土坑が集中し、幅30～40cmほどの溝が東西に走っているなど生活遺物や生活遺構が見られることからこの付近に集落があった可能性が高い。

今回の調査で中世の掘立柱建物跡が発見されたが、この付近では平成5年度に調査を行ったB-6、S地点などで見つかったのみであり、調査が進めば次第に中世集落の状況が判明していくであろう。（池邊千太郎）



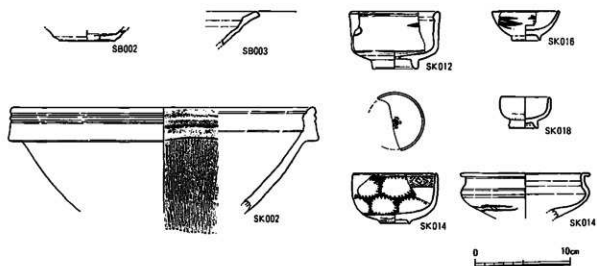
第37図 調査地点位置図



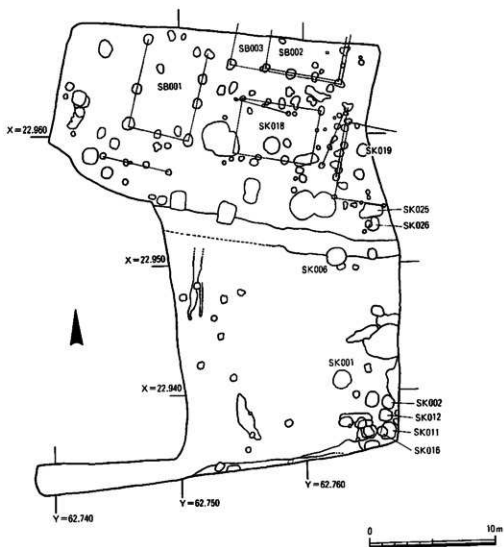
第38図 掘立柱建物跡全景



第39図 調査区全景（東より）



第40図 遺物実測図 (1/4)



第41図 遺構配置図 (1/300)

福地遺跡
第48次調査
図-29(1)

XIII 横尾遺跡群第49次調査B-6, S地点 (東中尾遺跡)

調査面積 1,200㎡
地域 E

調査期間 96.04～96.08
調査担当 池邊千太郎

遺跡は大野川下流左岸の第一河岸段丘上の標高35mにあたり、大分市横尾土地区画整理地内にあり、台地の端からやや奥まった大分市大字横尾字寺ノ下に所在する。調査地は、酒屋があった場所であり、以前は、造り酒屋として営まれていた所である。

調査によって、近世の酒造所に関する竈の施設、作業場、井戸跡、建物周囲に巡っていた排水溝などが検出された。このほかに平安時代の粘土採掘坑跡60基、近世墓2基をはじめ溝状遺構9条や穴蔵1基などの生活遺構も検出された。さらに、時期不詳ながら掘立柱建物跡を調査区東側と西側に4棟確認した。

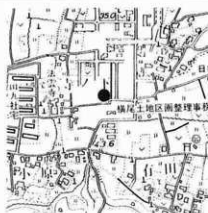
平安時代の粘土採掘坑跡は調査区全体に広がっており、特に西側では遺構の密度が70%を超える状況である。粘土採掘坑跡の分布範囲は、東側では平成4年度に調査を行ったB-6・7地点(5次調査)につながら、北側では平成5年度に調査を行ったB-6地点(20次調査)に広がっているが、次第に遺構の数が減少しており北限の範囲として確定できる。一方の南側においても試掘調査の結果、粘土採掘坑跡は確認できず、広がりを見せない。したがって、粘土採掘坑跡の分布状況は西から東にかけて舌状に伸びていることが確認できた。遺物には土師器環、内黒土器碗が随所で出土し、所産時期は10世紀前半代である。

調査区中央を南北に走る大きな溝状遺構が4条確認された。これらの溝状遺構は幕末から明治に順次利用されたもので、一番新しいものは現在まで利用されている。

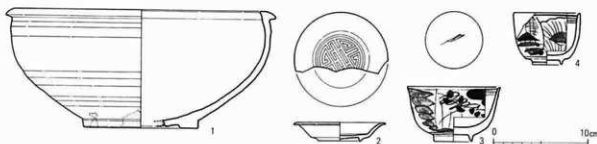
SD05溝状遺構(水路)からは、著しい量の陶磁器が連綿と出土し、ここが居住者のゴミの廃棄場所となっていたことが判明した。水路から多量の陶磁器などが出土する例が52次調査区のS023遺構で見られる他、平成6年度の32・37次調査区のSD001・SD002遺構などの例などに散見されることから、こうした居住空間における廃棄物の処理がかなり普遍的に行われたものと思われる。また、SD011遺構には、溝に沿って東側に玉石を敷いた足場なども検出されており、水場としても用いられていたことも確認できた。さらにSD001からは、溝に丸太を付設し、杭で補強された下水溝の施設が確認された。

近世においては、調査区東側において酒醸造の良好な資料となる煉瓦遺構が検出された。この遺構は、赤煉瓦を使用したボイラーで、焚口部と燃焼部、煙道からなり、当時は方形を呈する煉瓦積みの煙突が構築されていたものと考えられる。また、これに関連した土管を用いた排水施設や建物基礎の周囲に巡らされた排水施設などがあり、醸造生産の資料として高く評価されよう。

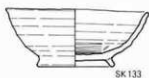
(池邊千太郎)



第42図 調査地点位置図



第43図 SD001出土遺物実測図 (1/4)



第44図 粘土採掘坑出土遺物 (1/4)



第45図 粘土採掘坑跡完掘状況



第46図 遺構完掘状況 (東より)



第47図 遺構配置図 (1/300)

横尾遺跡群
第49次調査
B-6.S

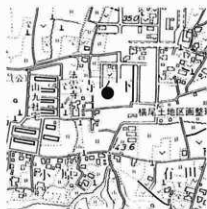
XIV 横尾遺跡群第52次調査 B-4・5地点（東中尾遺跡）

調査面積	580㎡	調査期間	96.10.07～96.12.18
地域	E	調査担当	池邊千太郎

遺跡は、大分県大分市大字横尾字寺ノ下に所在し、大分市横尾土地区画整理地内に位置する。市街地より南東へ約7.5km、大野川河口より約6.5km上流の左岸にあたり、標高約25～35mの第一丘陵上に位置している。

今回の52次調査は、平成8年10月7日より同12月18日まで行われ、平安時代の粘土採掘坑跡が31基、近世墓が12基、近世から近代の溝状遺構6条、井戸跡1基、時期不詳の掘立柱建物跡2棟が検出された。ほとんどの遺構は、平安時代の粘土採掘坑跡であった。

平安時代の粘土採掘坑跡は、直径2m前後、深さは60cm前後の規模が多く見られる。これは、検出面の土質に淡黄色の硬質の土壌が10cmほど層を成し、その下層に良質の白色粘土層が50cmあまり堆積しており、どの粘土採掘坑跡も類似した形状を呈することから粘土はこの良質な粘土層を狙って採掘されたものであろう。このうちの1～2割程度の遺構からは、黒色土器碗や土師器杯が出土しており、排土を埋め戻した上に、意図的に置かれたものと判断され、所産時期は9世紀後半から10世紀前半代である。



第48図 調査地点位置図

粘土採掘坑跡の分布状況は、ほぼ調査区全体に広がっているが、詳細に見ると中央からやや北側では、その密度が高いように見受けられる。また、調査区外への広がりの状況では、調査区東側は、同年度のB-6、S地点（49次調査）によって粘土採掘坑跡の遺構密度が70%を超える状況にあり、北側では、平成5年度のB-5地点（21次調査）によって粘土採掘坑跡の密度は希薄になっている。南側は、未調査区ではあるが、周辺の分布状況を踏まえるとかなりの広がりが予測される。

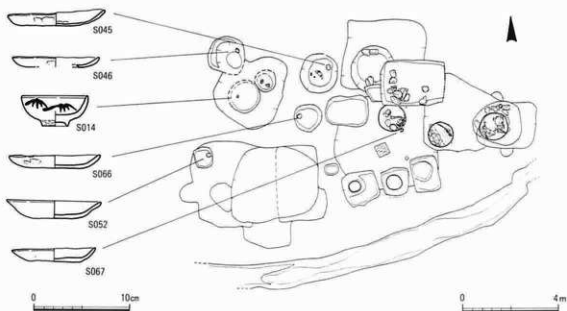
江戸時代の墓は、調査区の北側に集中して見られ、限られた範囲で墓地域を形成したもので、この墓域を区画したと思われる溝も検出している。埋葬の形式は、大きく2種類に分類される。一つは、直径55cm、高さ約70cm程の木製の円形棺桶（早桶）であり、もう一つは、直径25～30cm程の小さな曲物製蔵骨器の埋置である。早桶からは、18世紀代を中心とする土師器の皿や寛永通宝や勘十郎などの副葬品が見られ、遺体は無処理遺体で、座葬人骨であり、人骨の各部位が良好に遺存していた。遺構上面には集石が見られた。一方の曲物は、木質部はほとんど残っておらず、その痕跡を留めているにすぎない。副葬品には、18世紀代を中心とする土師質の皿や寛永通宝が見られたが、人骨は残っておらず、わずかに歯が残っている程度であった。

早桶として判明している4基の内、1基は成人男性、1基は成人女性でありいずれも東向きに顔を向けられ埋葬されていた。成人男性の方は、鉄ナベが桶の上部にかぶせられていた状況が認められ、病死や変死などの死因による埋葬方法として認められる。

判明している6基の曲物には、幼児などを含む子供が納められていた可能性が高いことが判明した。

この場所が江戸時代の大人の早桶と幼児を中心とする曲物の墓が集中した墓地であり、一定区画内に埋葬場所を限定していることから、同一血縁関係の庶民墓地と考えられる。なお、2基の墓からは、寛永通宝による六道銭の副葬品が見られ、いずれも6枚組の副葬形態であった。九州地域で6枚組の副葬が一般化するののは、17世紀末頃といわれており、今回の検出された墓の造営時期が18世紀代とすれば、この地域においても墓制・葬送習俗に副葬する葬送儀礼も形式化していると推測できる。また、当時の死亡率を見てみると、全体の墓の数が12基あり、このうち5割の6基が子供の墓であるとすれば、この時期、幼児の死亡率が非常に高かったことがうかがえる。

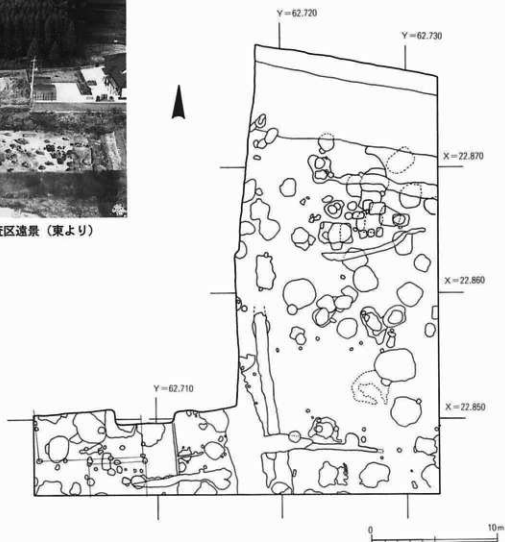
（池邊千太郎）



第49図 墓地平面図 (1/80)・出土遺物 (1/4)



第50図 調査区遠景 (東より)



第51図 遺構配置図 (1/300)

XV 横尾遺跡群第53次調査 B-11、N地点（東中尾遺跡）

調査面積	1,050㎡	調査期間	96.12.10～97.03.31
地域	E	調査担当	池邊千太郎

遺跡は大野川下流左岸の川岸段丘上の標高35mにあたり、台地の端からやや奥まった大分市大字横尾字寺ノ下に位置する。大分市横尾土地区画整理事業により調査が行われた。

検出した遺構は、平安時代の粘土採掘坑跡52基、近世から近代にかけての土坑19基、井戸跡4基、土坑墓（早桶を含む）3基、溝・暗渠2条、時期不詳の掘立柱建物跡6棟を確認した。

平安時代の粘土採掘坑跡は調査区の3分の2に偏って分布し、南側にいくほど遺構の密度が低くなっている。また、平成7年度に調査がおこなわれた東側に位置するB-11地点（45次調査）では粘土採掘坑跡が検出されていない。こうしたことから粘土採掘の分布は、北側と北東側に伸びていることが推定できる。土器は粘土採掘坑跡の25%の比率で出土しており、ほとんどが、土師器の坏、内黒土器碗など9世紀後半から10世紀前半代の遺物が目に付く。

近世の墓は、いずれも埋設桶でSK011は、直径1.6mの掘方に直径90cmの棺桶を埋設した埋葬形態である。副葬品には棺桶の内部から直径5mm程の数珠玉が出土し、桶外に土師質小皿が2点出土した。土師質土器は2点ともにロクロ整形で糸切り底である。法量は、1点が直径11cm、器高2.3cm、底径6.7cm、もう1点が直径11cm、器高2.2cm、底径7.5cmで17世紀代のものと考えられる。また、SK107は、桶の痕跡は見られなかったが、遺構内より土師質小皿2点と唐津筒形碗1点が出土した。土師質土器は1点が非ロクロ整形で器壁が薄く、端部が外反しなくて胎土は淡黄色である。法量は、直径10cm、器高1.9cm、底径6.2cmである。もう1点は、ロクロ整形で糸切り底であり、胎土は明赤褐色である。法量は、直径10.6cm、器高1.7cm、底径6cmである。これらの土器から18世紀代の年代が考えられる。

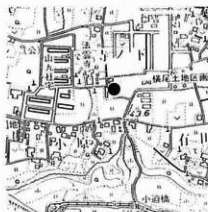
調査区中央付近で石組遺構（S023）を確認した。上面には20～30cm大の円盤に取り巻き、その下部には直径1m、高さ60cmの大きさに幅20cmの板が組み込まれた遺構である。遺構の形状から水溜めとして使用されたものと考えられる。遺物には瓦・揺鉢・肥前産の碗など近代の遺物が出土している。

掘立柱建物跡は、調査区の北側と南側とに大きく区分される。北側にはSB001～SB003の3棟の建物を確認した。いずれも切りあいはなく、SB01は、桁行方向を東西に向け、建物規模は2間×1間である。身舎面積は12.4㎡で最も小さく、桁行方向はN-10°-Eでほかの建物とは少し異なっている。SB002は、桁行方向を東西に向け、建物規模は3間×1間である。身舎面積は32.85㎡で、桁行方向はN-2°-EでSB006と柱間隔と方向が類似する。SB003は、桁行方向を東西に向け、建物規模は2間×1間である。身舎面積は18.2㎡で、桁行方向はN-6°-Eである。

南側には、SB004～SB006の3棟の建物を確認し、切りあいが最も古く、SB005とSB006が新しく造られている。SB004は、桁行方向を東西に向け、建物規模は4間×2間である。身舎面積は33.44㎡で最も大きい建物で、桁行方向はN-3°-Eであり、柱間隔が他の建物と異なっている。SB005は、桁行方向を南北に向け、建物規模は2間×2間である。身舎面積は26.4㎡で、桁行方向はN-4°-Eである。SB006は、桁行方向は東西に向け、建物規模は1間×1間である。桁行方向はN-2°-EでSB002と同時期の可能性が高い。

これら掘立柱建物跡からは遺物がほとんど出土しておらず時期が不明であるが、S0028の構築年代が中世であること、近世の溝や井戸跡が見られることから、建物の年代をこれらの時期に想定できよう。

今後、掘立柱建物の正確な時期比定を周囲の調査を踏まえて判明させていかななくてはならないであろう。また、1間の間隔や方位による分類、建物規模によって建物の変遷も解明していかななくてはならない。（池邊千太郎）



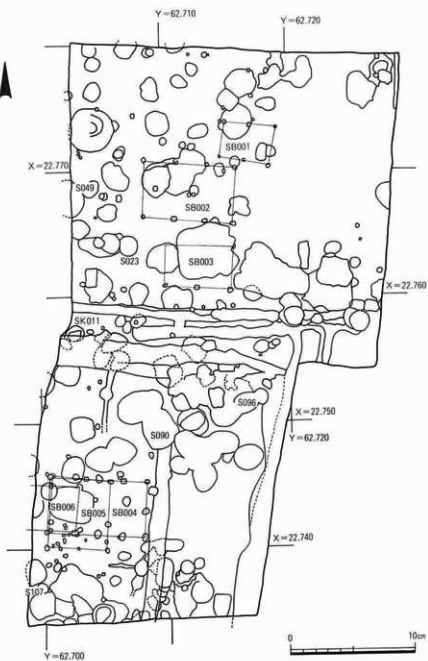
第52図 調査地点位置図



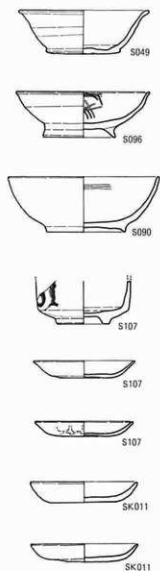
第53図 調査区遠景（東より）



第54図 遺物出土状況



第55図 遺構配置図 (1/300)



第56図 出土遺物 (1/4)

境尾遺跡群
第53次調査
B-11、N

XVI 亀塚古墳第3次調査

調査面積 1,653㎡
地域 G

調査期間 96.11～97.03
調査担当 讃岐和夫

国指定史跡亀塚古墳は、大分市大字里字大塚に所在する。古墳は丹生川の河口左岸、標高43mほどの丘陵上に位置している。

平成5・6年度に国指定を受けるための調査と保存整備の基礎データの収集を目的として実施しており、墳丘は3段築造であり、葺石を施しており、傘大の自然礫を使用している。各段には円筒埴輪がみられる。古墳の西側には方墳状に張り出した造り出し部が発見され、ここから形象埴輪である家形とすいじ貝の文様を描いた楕形埴輪片も出土している。

後円墳頂部には、埋葬施設である主体部が2ヶ所確認されたが、既に盗掘にあい大きく改変されていたが、第一主体部は中央に位置しており、9m×7m以上の墓墳が掘られ、緑泥片岩を組合せた箱形石棺で蓋石、北小口石、西側壁石が抜き取られ底石も動かされているが、石棺の内寸は、長さ2.8m、幅0.9mを測り、0.5mの副室を南側に有しており、9m×7m以上の墓墳が掘られている。また、東側に平行移動して第2主体部が造られており、堅穴石室を意識した3～4段の小口積みで内寸は長さ2m、幅0.8m、深さ0.7mを測り、凝灰岩質の小型くりぬき式石棺材が割られた状態で出土している。



第57図 調査地点位置図

亀塚古墳の北東約35mの位置に小亀塚古墳が発見され、墓墳の規模からくりぬき式の石棺が埋設されていた可能性の強い、全長35m以上の前方後円墳であることが前回の調査で判明した。

今回の調査は、前回の調査を踏まえて、小亀塚古墳およびサクラ疎林広場の史跡整備事業を実施するための事前調査として小亀塚の北側にあるサクラの疎林広場と亀塚古墳本体の調査を行った。

サクラ疎林広場の調査区を小亀塚古墳北地区として実施した。地形の現状は近年の蜜柑栽培地として利用された場所であり段造成されている。

トレンチは、各段に設定した。第1トレンチ(62㎡)を中段部に設定する。遺構については、蜜柑栽培の時に掘られた溝が確認された。次に、一番低い段部分に第2～第7トレンチの6ヶ所(約623㎡)を設定して調査を行なった。

第3～第5トレンチにかけて大型の遺構が確認されたので、この部分について拡張した。また、南方向へ延びるため第6・第7トレンチで確認すると第7トレンチで大型の遺構が終って、約35mの長さを測る。

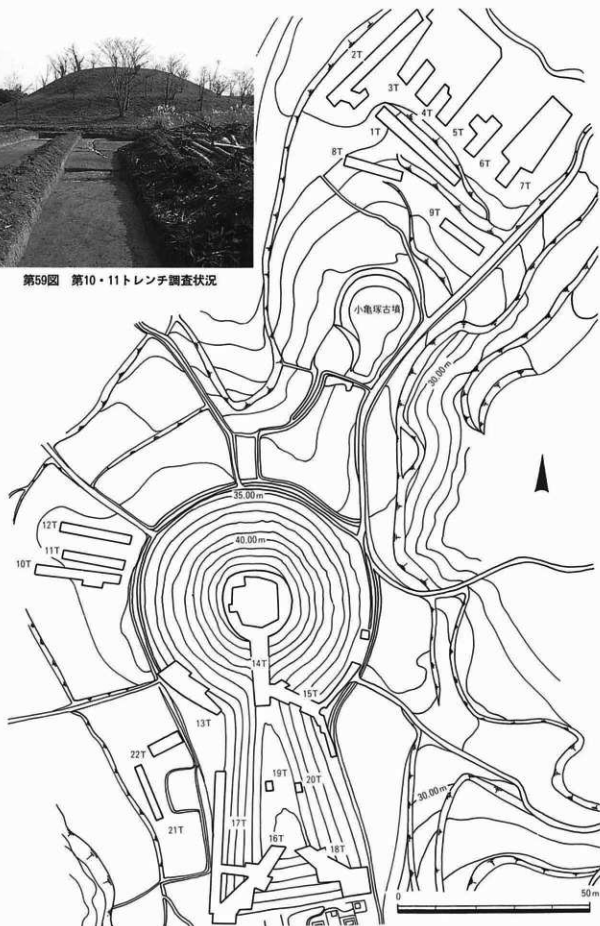
この遺構は、当初大型の掘り込み事業跡と考えていたが第3・第4トレンチで掘立柱建物跡が2棟とその他の柱穴等も確認したため土層断面を観察すると大型掘り込み事業でなく、自然地形が北北東方向に傾斜しており、その傾斜を平坦面にする



第58図 葺石検出状況



第59図 第10・11トレンチ調査状況



第60図 亀塚古墳トレンチ配置図 (1/100)

亀塚古墳
第3次調査



第61図 線刻面埴輪片

北東側に位置している。建物主軸はN-30°-Wの方向にむいている。建物規模は柱の状況から2間×3間でないかと思われる。

出土遺物については、数少ない遺物からみると、非クロロ系の土師器皿片、青磁破花皿片、青磁碗片、掃鉢片と素焼きの土鉢片が出土している。

今回検出された建物遺構の時期は、出土遺物からみても15世紀～16世紀代に比定されると思われる。この地区の遺構については盛土を行い遺構保存を行っており、また、遺構以外で自然林も多く残して整備している。上段の第8・第9トレンチでは遺構を確認することは出来なかったが自然地形の落ち面を確認するが遺物は皆無である。

次に、亀塚古墳の本体と後円部西側について調査区を14ヶ所(973㎡)のトレンチを設定して調査を実施した。亀塚古墳西地区の後円部側に第10～第12トレンチと前方部側に第21・第22トレンチを平坦面に設置し遺構確認作業を実施する。それによると周濠遺構やその他の古墳時代に関係する遺構は確認することは出来なかったが、中・近世の遺物と溝遺構や畑地の畝状遺構が見られた。

亀塚古墳本体部分の調査区は、墳頂部埴輪列区、西側くびれ部と後円部・中段・下段(第13T)、前方と後円部の接続部(第14T)、東側くびれ部(第15T)、前方西側稜線部(第16T)、前方部西側裾部(第17T)、前方部東側稜線部(第18T)、前方上段平坦面埴輪列(第19・第20T)である。

後円部埴輪列は、平成5年度の北側トレンチで確認しており、今回の調査は埴輪列が巡る状況がみられ、埴輪底径で40～50cmを測るため上部径はもう少し大きくなると思われる。埴輪との間隔も接して立てられている。

また、平成5年度の時、前方部西側コーナー付近の裾部はバチ状に広がりを見たが、前方部西側裾部の根石が直線的に伸びており、バチ状に広がりは見られなかった。

前方西側稜線部は、中・上段の葎石が開口していたが、テラス面の砂利敷き状況から見ても稜線部は開口していないことが窺えた。

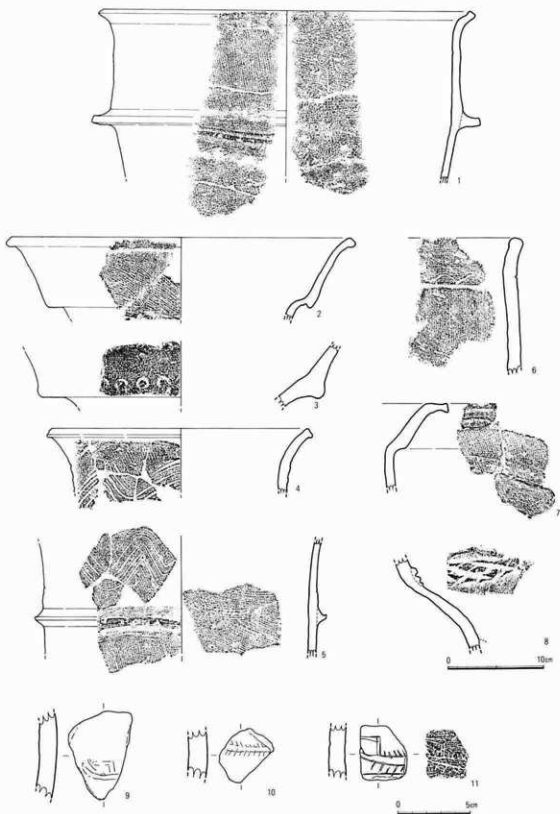
東側くびれ部の葎石の遺存状況は良好であり、下段テラス面で径30cmの埴輪列が30～40cm間隔で並べられていた。

平成5・6年度と今回の調査で埴輪の文様を見直すとして東側部分にスイジガイの文様を描いた埴輪が数多く出土している。また、今回新たに発見された準構造船と思われる船の線刻画が6点ほど破片で見つかった。このことは、古墳時代の船にかかわる葬送儀礼と船の発達史を知るうえで貴重な資料と言える。(讃岐)

るため茶褐色や褐色系の粘質土を入れて整地した遺構である。

掘立柱建物跡(SB)の規模については、SB001では1間×3間(3.6m×6m・10.8㎡)の大きさで、柱の掘方については0.8～0.5mの円形で深さ0.9～0.8mを測る。建物主軸はN-30°-Eの方向に向いている。

SB002については一部調査区から外れるため、建物全体を把握することは出来ないがSB001と接する様に約1mほど北



第62図 出土遺物実測図 (1/4・1/3)

XVII 尾崎遺跡

調査面積 188㎡

地域 E

調査期間 96.05.12～96.07.28

調査担当 讃岐和夫

大分市教育委員会では、明治北小学校の児童数増加により北校舎が増築されることになり、事前に試掘調査を実施し遺構、遺物を確認したため、平成8年5月13日～7月25日にかけて発掘調査を実施した。

当遺跡は、大野川とその支流である乙津川の左岸にあたる南北に延びた丘陵上の大分市大字小池原に所在しており、この丘陵は数本の小さな谷筋を形成しており、乙津川寄りの丘陵北端部の深く入り込んだ谷奥の小規模な舌状台地上に位置している。

ここは、昭和57・58年度にかけて学校建設に伴う発掘調査をすでに実施しており、遺跡の内容は、後期旧石器時代（分布）・弥生時代（堅穴住居跡27基、土坑4基）・中世（掘立柱建物跡4棟）にかけての複合遺跡であることが判明しており、特に弥生時代の遺構は、後期前葉～後期末までの集落を形成しており、円形・隅丸方形から方形住居跡へと推移していく傾向がみられる。

また、この丘陵上には数多くの遺跡が存在しており、当遺跡より北方向に弥生～平安時代初頭の地蔵原遺跡、弥生時代中期～後期の米竹遺跡や東方向の舌状に延びる台地先端部に弥生時代後期の環濠集落跡の北の崎遺跡等が所在している。

以上のことを踏まえて調査を実施したが、調査区の制限のため全体の遺構把握が出来なかったことや、遺構面がかなり削平をうけており遺存状況は良くなかったが、弥生時代の堅穴住居跡・土坑・溝状遺構・柱穴群等の遺構を検出しており、前回調査の続きとして集落跡をみる事が出来た。遺構については、調査区の東側に堅穴住居跡6基が切合関係をもって集中しており、6号住居跡のみが離れて北西隅に位置している。

1号住居跡は調査区南東隅に位置しており、4号住居跡と切り合う直径約6mの円形を呈しているが、調査区の制限によって半分だけの調査となる。

住居跡の壁高約0.04m測り、内側には幅0.1～0.2m、深さ0.04mの溝が掘られており、主柱は8本と思われる。柱の掘り方は、直径約0.3m、深さ約0.7mを測る。

この住居跡には、焼土痕と炭が散乱しているため火災を受けたものと思われる。2号、3号、4号、5号住居跡は切合関係をもっていたが、新旧の遺構時期差は断面土層観察等でも確認出来なかった。

これらの住居跡の形状は方形か隅丸方形を呈しており、壁高約0.03～0.06mを測る。6号住居跡は隅丸方形を呈しているが、調査区が制限されているため半分のみである。住居跡の大きさは径約6m以上、壁高約0.06mを測るが、主柱の数については不明である。

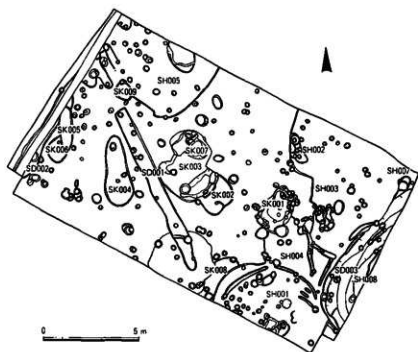
3号溝状遺構と切合関係にある8号住居跡は、調査区の東側に位置しており、壁周溝のみが残存している。遺構形状は、弧を描いているため円形住居跡と思われる。遺構規模については不明である。次に、溝状遺構は3条確認されており、1号溝は北東から南西方向に掘られている。溝の規模は、幅0.8m、深さ約0.09mを測るが、



第63図 調査地点位置図



第64図 調査区全景(東より)



第65図 遺構配置図 (1/200)

南西側は閉じている。

また、調査区の東側隅に新しい排水溝が2号溝を切る様に掘られており、2号溝の全容は不明である。

3号溝は弧を描く様に掘られ、幅は約1m、深さ約0.1mを測り、断面U字形を呈している。遺物は皆無であった。

土坑は、10基ほど確認しているが、遺構の性格等は不明である。

遺物については、旧石器時代の剥片、弥生時代の打製石鏃や複合口縁壺形土器等を確認している。出土量は少ないが、前回の調査状況から見ると、遺跡の時期は、弥生時代後期前葉から後期末に比定されると思われる。

(巖波)

尾崎道雄

XVIII 辻古墳群

調査面積 830㎡
地域 G

調査期間 96.08.05～96.10.31
調査担当 讃岐和夫

辻古墳群は、坂ノ市土地区画整理事業に伴う事前調査として行った確認調査である。

亀塚古墳が所在している丘陵の東方に延びる先端部に位置しており、丹生川河口の左岸にあたり古くから周知された場所である。

現状では、古墳のある丘陵部は国道197号線とJR日豊本線によって切断され独立台地上になっており、すでに4段からなる段築状に開墾され丘陵頂上付近には辻古墳の由来となる緑泥片岩の石棺材が抜き取られ放置された状況で確認されている。JR踏切付近の丘陵北東斜面部にも石棺の一部が露出している。

また、この周辺部には数多くの周知遺跡が所在している。辻古墳群の前方に広がる住宅地帯は嘗ては砂丘が存在しており、砂丘上には弥生時代の中期から後期と古墳時代初頭の祭祀と埋葬施設が知られており、特に中細形銅剣4本や集石墓、壺棺墓と石棺墓を出土している大在浜遺跡、細形銅戈1本を出土している細道跡や久原遺跡等がある。古墳時代では砂丘上に大在古墳と横塚古墳等の高塚古墳がみられるが、あとは丘陵上にすべて所在している。

前方後円墳3基と円墳7基からなる野間古墳群、船載鏡の方格規矩鏡と環頭太刀、剣、鉄鏝、玉類を出土している前方後円墳の上ノ坊古墳や大蔵古墳と県下最大規模をもつ亀塚古墳、小亀塚古墳がある。王ノ瀬の天満社境内には縄掛突起をもつ5世紀中頃以降の凝灰岩製家形石棺が置いてあり、この石棺は明治頃に運び込まれたと伝えられている。6世紀以後は飛山横穴墓群、尾崎横穴墓群、城原横穴墓群等の横穴墓群の分布をみる。

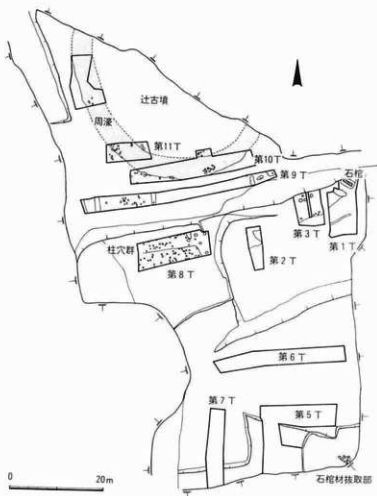
この地域一帯は古代の律令制下における海部に属しており『日本書紀』巻10、応神天皇5年8月の条に『海人部』を設置されたことが記されている。

また、坂ノ市は水上交通の拠点として坂門津が比定される地域でもある。

調査区は12ヶ所のトレンチを設定して調査を実施しており、その結果、遺構については、丘陵頂上の石棺材抜き取り部分の周辺部に4ヶ所トレ



第66図 調査地点位置図



第67図 辻古墳トレンチ配置図 (1/800)



第68図 祭祀土坑・石棺検出状況



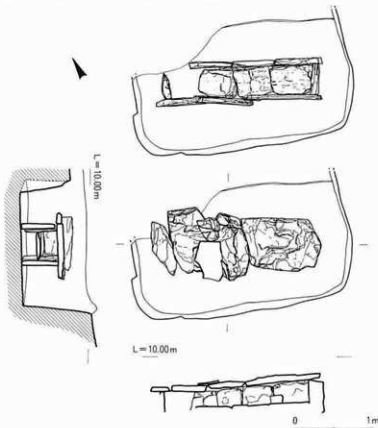
第69図 祭祀土坑内土器出土状況

ンチ（第4～7T）を入れ、掘り下げを行なったが遺構を確認することができなかった。

石棺の一部を露出した中段部分に4ヶ所のトレンチ（第1～3T、8T）を入れる。この石棺は第1トレンチで全容を確認する。石棺には2.9m×1.5mの墓壇が掘られており、箱式石棺は6枚からなる石蓋、3～4枚の側壁石と4枚（3枚現存）の底板石から造られている。石棺の内寸は長さ1.8m、幅0.4m、深さ0.25mを測る。石棺内部からは、遺物は皆無であるが南南西側1.5mの場所に長さ2.5m、幅0.6mを測る楕円状の土坑が位置している。遺物は4世紀前半の壺、鉢、高坏などが祭祀された状況で出土している。第3・第8トレンチと下段の第9～第12トレンチには平安時代の建物跡と思われる柱穴群がある。このことは、平安時代ごろ既に段造成を行なっていることがわかった。また、この下段の低い部分には、直径40mを越える古墳の周濠が第10～第12トレンチで確認できた。古墳のマウンドは、既に平安時代ごろ削平を受けており、周濠部分は日豊本線の工事によって丘陵北側の半分以上に削平されており、遺存状況は良好ではなかったが、周濠部を3ヶ所掘り下げ遺構状況を見る。周濠は幅4m、深さ1.2mを測り、断面逆台形を呈している。周濠内に20cm程の自然礫を使用した葦石と埴輪が落下していた。埴輪については、円筒埴輪と朝顔埴輪が主体を成しており、一部形象埴輪である家形埴輪と蓋形埴輪片や動物の脚部でないかと思われる筒状の埴輪も出土している。I層黄茶褐色土とII層茶褐色土の幅50cm内に平安時代の遺物が出土しており、暗褐色土の間層をはさんで古墳時代の遺物である埴輪を出土させるIII層暗茶褐色土とIV層黒褐色土が層位を成している。

平安時代の遺物は、土師器の高台付環と皿片等が出土している。また、縄文時代の土器片と半分欠けている石製加工品が周濠内からも流れ込みの状況で確認された。

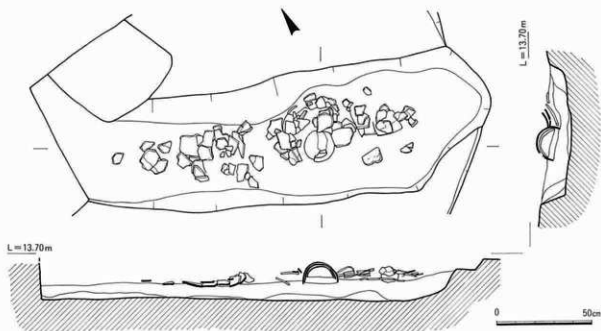
今回の調査は、確認調査のため遺跡の全容は把握できなかったが、2基の箱式石棺が確認され、露出した石棺については調査を実施して全容を把握した。



第70図 石棺平面・断面実測図（1/50）

新たに発見された、直径40mを越える周濠をもち、墳丘には葦石を施し埴輪を飾る大型の古墳は、海部の首長墓である亀塚古墳と繋がりをもちことが窺える。

また、平安時代の建物跡と思われる遺構は、標高12m～15mの段造成を行なった場所に造られており、丹生川河口付近に位置していることから、古代から、この坂ノ市地域が水上交通の拠点地として考えられるため、この遺跡も何らかの関連が考えられるため、今後の検討課題と思われる。



第71図 祭祀土坑平面・断面実測図 (1/20)

出土遺物

1～4は石棺に伴う祭祀土坑遺物の一部である。1、2は複合口縁壺形土器の同個体であり、1は口縁部で外面は竹管文を中央にめぐらし上下に波状文を施している。また内面は刷毛目後ヨコナデ調整。2は胴部に刻み目突帯を有しており、1、2共に淡黄褐色で胎土は石英細粒子が混入。

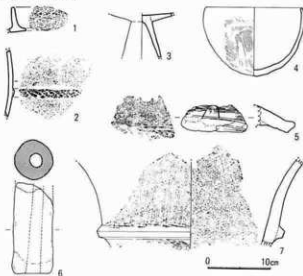
3は高杯の脚部である。4は口径15.1cm、器高10.9cmを測る鉢形土器である。外面は刷毛目、内面はナデ調整を施している。色調は淡黄褐色、胎土は石英細粒子と角閃石が混入。

5～7は周濠内遺物の一部である。5は形象埴輪の蓋形埴輪で笠の先端部である。外面は細かい刷毛目と内面はヨコナデ、指オサエの調整である。器壁は口唇部で厚くなり、外面は2条の沈線が3cmの間をもち平行してめぐっており、また放射状に2条の沈線が施されている。

6は動物脚部の埴輪と思われる物で、現状の高さ15cm、最大径7.1cmを測る円柱状である。

7は朝顔形埴輪の一部である。口縁部の直下に台形の突帯をめぐらし、外面はハッキリした縦方向の刷毛目、突帯はヨコナデ、内面はヨコ、ナメ方向の刷毛目を施している。

(讃岐)



第72図 出土遺物実測図 (1/6)

XIX 東大道遺跡

調査面積 346㎡
地域 G

調査期間 96.09.25～96.10.11
調査担当 杉崎重臣

調査は駅周辺総合整備事業に伴う仮設事務所建設予定地の埋蔵文化財確認調査である。

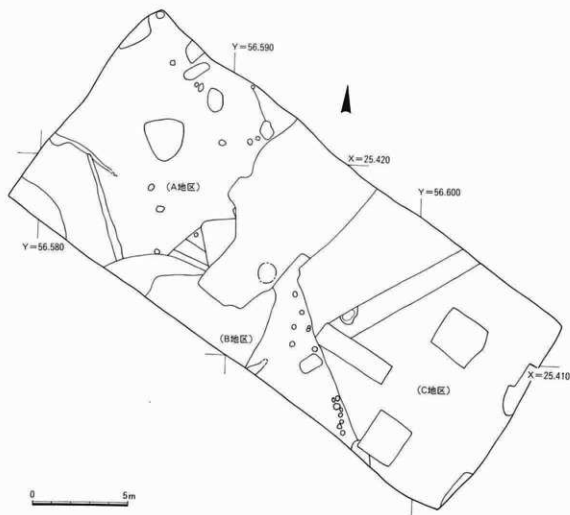
A地区の地山は黄色粘土層で土坑が5ヶ所確認された。

B地区は住居跡らしきものが確認され、B地区とC地区の間に溝状遺構の検出を見た。

C地区は黒色粘質土層で深さ10cm～20cmで白色土層に達している。そのC地区の南側にそって、柱穴（柵列）が並んでいる。遺物は弥生時代後期の物が多量に出土している。



第73図 調査地点位置図



第74図 遺構配置図 (1/200)

XX 井ノ久保遺跡

調査面積 2,800㎡
地域 E

調査期間 96.04.01～97.03.31
調査担当 塔鼻光司

本調査は東九州自動車道建設に伴う発掘調査である。

井ノ久保遺跡は大分市の東部、横尾・松岡地区にまたがって所在する。地形的には、大野川左岸の河岸段丘を乙津川支流の挾間川によって開析された扇状地上に位置し、現状は水田として利用されている。平成7年度の試掘調査において8世紀末から9世紀前半の土師器類と掘立柱建物跡が確認され、平成8年度に挾間川の右岸（A地区）の本調査を実施し、同年10月より左岸（B地区）の本調査を同時に行った（第76図）。

（A地区）

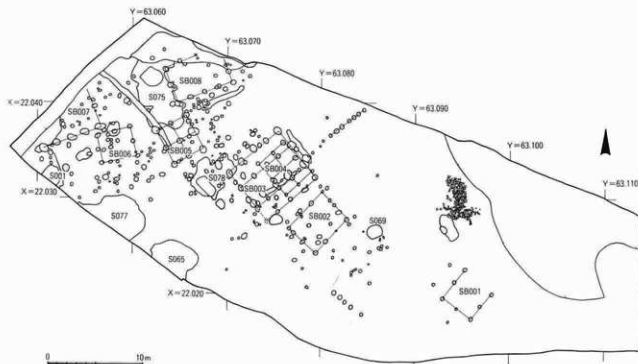
挾間川の右岸で、井ノ久保遺跡の南部に位置する。試掘の段階で大量の環、埴、蓋類が出土し、掘立柱建物跡1棟が確認されたので、これを中心に約1800㎡を調査区として設定した。表土には人頭大の礫が所々に点在し、礫が集中する蛇行した流路なども確認され、土層断面観察からも、当遺跡が挾間川の氾濫や土石流によってかなり失われていることが判明した。上層の礫層からは近世の陶器片が出土し、遺構確認面より下層でも礫層が確認された。当調査区では北側から西側にかけての一部と東部一帯が蛇行流によって遺構面が削られていた。表土を0.5m～1m程掘り下げたところ、20cm～30cmの黒褐色遺物包含層



第75図 調査地点位置図



第76図 調査区全景



第77図 A地区遺構配置図 (1/400)



第78図 S069焼成坑検出状況

を検出し、8世紀末から9世紀前半の土師器類が多数出土した。

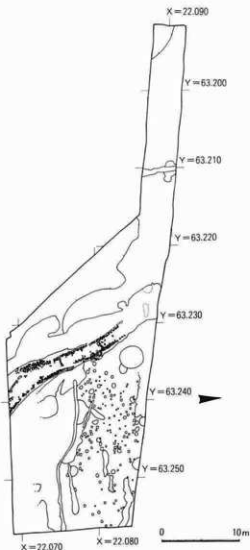
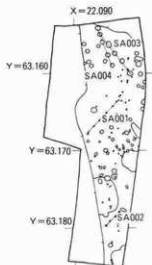
遺構としては、遺物を含んだ多数の土坑と柱穴と思われるビットが検出され、8棟の掘立柱建物跡が確認された。規模は、2間×2間の総柱の倉庫と思われるものが2棟(SB004、SB005)、雑所と思われる2間×2間(SB006)、2間×3間(SB002)、2間×4間(SB008)の建物と両面庇付きの3間×4間の建物(SB003)がそれぞれ1棟ずつ、規模不明が2棟(SB001、SB007)である。ただし、SB003とSB004はほぼ同じ位置に重なっており、またSB008では柱穴に重複があることから8棟が同時期に存在したのではなく、数度の建て替えが行われたと思われる。

特筆すべきは、土師器を焼いた焼成坑が2基(S068、S069)確認されたことである。焼成坑と思われる土坑は他に4カ所あったが、最終的に確定とされたのは2基のみであった。S068は残存状態が悪く、焼成を受けた床部のみが確認された。S069(第78図)は残存状態が良好で、平面形は長軸1.6m、短軸1.2mの楕円形を呈しており、焼成を受けた北側の壁面の立ち上がりが確認され、廃棄された形で土師器の蓋、坏等が多量に残されていた。

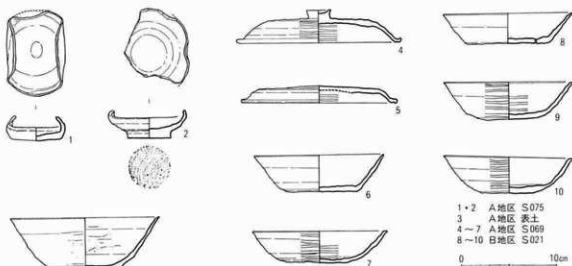
また、S068の近くから須恵器片が被熱して固まった遺物が出土した。現場付近に須恵器を焼いた窯の存在が考えられ、当調査区の南側斜面を精査したが、それらも遺構の確認には至らなかった。

さらに多量の遺物が廃棄された落ち込みも3カ所(S001、S075、S078)あり、比較的完形品に近いものや、完形品も多く出土した。また、泥炭層が堆積した落ち込みが2カ所(S065、S077)確認され、S077には護岸用あるいは囲み用と思われる石列の1部が残されていた。また、調査区西南部からは小礫の石積みにも坏をかぶせたビット(S012)が確認されており、何らかの埋納遺構と考えられる。

当調査区で出土した遺物の多くは、いずれも8世紀末～9世紀前半のものであり、坏、碗、蓋、甕、鉢、移動



第79図 B地区遺構配置図(1/500)



第80図 出土遺物実測 (1/4)

式かまど、甌など種類も豊富でそれぞれが様々な形式で見つっている。特徴的な遺物としては内黒土師器や耳皿などが出土した。耳皿は糸切り痕があることから10世紀後半の形式とみられ、内黒土師器は10世紀後半より以前のものと考えられることから、井ノ



第81図 風車硯検出状況



第82図 S021土師器検出状況

久保遺跡が存在した年代の確定に1つの指針を示すものと思われる。しかしながら、他の出土遺物のほとんどが8世紀末～9世紀前半のものであり、土師器焼成坑も同様と見られることから、糸切り耳皿や内黒土師器の取り扱いについては、今後の資料整理を待ちたい。他に土師器製作時に使用したと思われる刀子や製塩土器等も出土している。また、ふいごの羽口や鉄滓が発見されたことから、鉄製品の鋳造工場の存在が推定されるが現地での確認には至っていない。また、硯が3点(第81図)発見されているが、いずれも風車硯で大分県内での出土は大変貴重である。

以上のことから、当遺跡は8世紀末から9世紀代に様々な種類の土師器類等を製作していた一大工場であることは疑いなく、須恵器や鉄製品も製作していた可能性がある。周辺には地蔵原遺跡や猪野新土井遺跡など、8世紀～9世紀の官衙的要素をもった遺跡が位置しており、挾間川～大野川～別府湾を経由する水運路によって豊後国府や国分寺、さらには中央との結びつきも考えられ、それらとの関連も注目されるところである。(塔鼻・大野(B地区))

A地区の対岸に位置する。調査面積は、約1000㎡。里道を挟み東西に調査区を設定した。

西側調査区は、挾間川の氾濫によって、南側約半分の遺構がすでに失われている。残り北側約半分の東側、地表面下約0.5m～1.2mで、厚さ約30cm～40cmの黒褐色遺物包含層を検出した。その中心には、人頭大の石を含む集石があり、この集石を中心として、数多くの土師器片が出土した。この中には、完形品(甌・皿・蓋)も多く含まれ、輪状つまみを持つものなどが見られる。

また、柵列を4条(SA001、SA002、SA003、SA004)を検出した。この他に、16枚の土師器の坏が重なった状態で出土した土坑が(S021)も検出された。出土品や出土状況から、この西側調査区は対岸のA地区と関連があると考えられる。

東側調査区からは、幅約2m、側溝を伴う石積みの道路状遺構を検出した。出土品等から近世のものと考えられる。また、多数のビットも検出したが現段階ではその性格を特定するには至っていない。(塔鼻・奥村)

XXI 府内城・城下町跡 第8次調査

調査面積 1,101㎡
地域 A

調査期間 96.10.24～97.05.19
調査担当 塩田潤一

調査に至る経過

今回の調査は若草公園リフレッシュ事業に伴う事前調査として行われたものである。

平成7年10月6日付、公園内の遺跡確認調査依頼を受けて、同年12月18日～21日にかけて確認調査を実施。公園のほぼ全面に遺構の存在を確認した。開発予定面積は6,158㎡である。

その後の協議の結果、遺跡の状況と工期の問題から遺跡に影響がないと判断される広場や施設の建設予定地については盛土により遺跡の保存を実施、遺跡が破壊される部分のみ調査を行うこととした。

この段階で調査予定面積は約3,000㎡となった。

このため、平成8年度当初から発掘調査を計画したが、同年民間開発に伴う発掘調査が浮上したため、大分市公園緑地課と再度協議を実施し、平成8年度下半期からの調査計画に変更することとなった。

実際に発掘調査が開始されたのは平成8年10月24日からである。

調査区の設定については、工期の確保から、設計変更が全く不可能な地下駐輪場建設予定地を第1調査区(1,300㎡)とし、調査終了後、噴水建設予定地等の残りの部分を第2調査区(1,700㎡)として工事と併行しながら調査を実施することとした。

しかしながら、調査担当者による確認調査段階での遺構占有率の積算ミスと、防火水槽建設予定地の追加などから、大分市内の民間サポート会社の導入、発掘作業員の追加雇用を図り、調査を押し進めた。

その後、調査の進捗状況は変わらず、協議の結果、サポート業務の見直しを図り、技師の増員や区画整理課調査員の応援、発掘作業員大量増員、さらには県教委や臼杵市ならびに野津町からの支援をいただき、第2調査区の設定変更により遺跡保存を図る中で、調査期限の平成9年5月19日まで発掘調査を行った。

結果的には、発掘調査段階の不手際もあって、未掘部分を含め十分な調査とは言えないものとなってしまったが、今後の多岐に亘る問題点の検討資料として以下に、調査の概要をまとめる。

また、この報告については調査が複数調査員によって行われたものであり、膨大な記録資料が残されているため、現状ではデータの共有が十分にできていない。

よって、これは調査担当者(報告者)が把握できている範囲での概要報告であることを予め述べておく。



第83図 調査地点位置図



第84図 調査区全景

調査の概要

今回の調査地は推定府内城下町の西町・西上市町の一部にあたり、調査の結果、城下町造営段階の整地層を基盤面として形成された17世紀～19世紀にかけての遺構群を検出した。

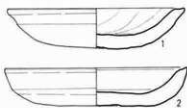
この整地層（SX600）からは京都系土師器皿を埋置した土器埋納遺構（SX595）も確認されており、この土師器や整地層出土遺物の帰属年代から、城下町形成段階のものとみて大過ないと思われる。

土器埋納遺構（SX595）については整地土（SX600）掘り下げ段階で検出した。京都系土師器皿2点を合わせ口に重ねて埋置した遺構で、これに伴う土坑は確認されていない。



第85図 SX595出土状況（東より）

第86図の1は蓋として転用された京都系土師器皿で、口径14.2cm、器高3.2cmを測る。器厚は厚いものの、調整は全体的に丁寧である。



第86図 SX595出土遺物実測図（1/3）

口唇部は内外面ともに強い横ナデを施し、口縁部内面は横線状に窪む。また、見込み部分にはナデ調整、内面屈曲部から口縁内面にかけては2の字ナデが施されている。

第86図の2は同図1の受け皿として使用されていた同皿であり、口径14.7cm、器高3.0cmを測る。器厚ならびに調整については1とほぼ同様であるが、内面屈曲部から口縁部にかけては横ナデが施されている。

これらの資料の一括性は極めて高く、城下町建設段階（1602～1605年）のものと比定される。

この整地事業の発見は、「城主の命令によって旧府内町の町人が城下町の建設を行い、近隣の親戚や友人の協力を得て新地（府内城下町建設予定地）を平らにした。」という『豊府開書』（1698年成立）の記述を証左する所見として極めて重要視されよう。

また、調査区南側で検出された東西道路跡は推定の西上市町のメインストリートに相当するものであり、幅約8mの掘り込み地業と版築状の盛土を施していることが判明した。

第90図の砂目積み唐津溝緑皿は17世紀前半に比定され、道路の盛土の一部を切り込んでつくられた土坑（SX0



第87図 遺構配置図（1/400）



第88図 SF200東西断跡検出状況(西より)



第89図 SF200土層観察時(東より)

20) から出土している。底部外面には「三」の墨書が認められる。このことは17世紀前半段階で、すでに道路幅の変更、改修が行われていた可能性を示唆していると考えられる。

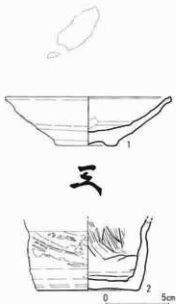
さらに調査区北側の遺構群からは「西町長右衛門」と書かれた墨書磁器や「西町 □□」と朱書された陶磁器などが多量に出土しており、この地点が府内城下の西町である蓋然性は高いと言えよう。

この他にも18世紀初頭～幕末までの夥しい数の火災処理土坑や17世紀～19世紀にかけての地下式倉庫跡、井戸跡など町屋の遺構群が数多く発見されている。

火災処理土坑については大別すると18世紀初め頃と19世紀初め頃のものが認められる。府内城下町での大火は記録に残るものだけでも14回以上数えられ、その中には元禄7年(1694)11月に西町から出火した大火も記されている。これらの火災処理土坑は府内城下町での度重なる大火の実態を端的に示唆していると判断されよう。

今回の調査によって夥しく重複して検出された遺構群はまさに「都市遺跡」を象徴するものであり、近世府内城下町の賑わいを彷彿させるに十分なものと考えられる。

大分市街地における再開発と埋蔵文化財保護の調整は、本市にとって最重要課題と言っても過言ではなく、その検討は急務と言えよう。(塩地)



第90図 SX020-448出土遺物実測図(1/3)



第91図 墨書磁器実測図(1/3)

XXII 中世大友城下町第1・2次調査

調査面積 620㎡・200㎡
地域 A

調査期間 96.05.07～97.04.02・97.04.07～97.08.11
調査担当 杉崎重臣

調査地区は大分市錦町二丁目に所在し、「中世大友城下町跡」として周知される遺跡の範囲内にある。大分川左岸の微高地上に立地し、遺構検出面での標高は約4mを測る。中世大友城下町跡については、戦国時代の府内町を描いたとされる絵図が存在し、調査地区はこの範囲内に所在するのであるが、絵図に基づく復元想定図(註)によれば今回の調査地区は「横小路町」に比定されることになる。今回の調査は、大分駅周辺総合整備事業に伴って行われたもので、調査の結果、戦国時代の道路状遺構が検出されるとともに16世紀後半を主体とする遺構群が検出された。また道路状遺構の地業のさらに下層からも先行する遺構群が検出された。



第92図 調査地点位置図

道路状遺構(SF001)は調査区中央で確認した。遺構は、検出面から約40cm～60cm程度掘りくぼめ、砂、粘土、小石等を版築状に突き固めた硬質土が充填されている。こうした掘り込み地業として道路状遺構を確認できたのは2次調査区と1次調査区の西北端である。1次調査区の中央部から南東では、調査時に地業の上部を掘り下げてしまったと思われるが、掘り込み地業の下部で用いられている砂礫土層の分布は確認できた。こうした掘り込み地業及び土層の分布により推定される路面幅は約10mで、主軸N-64°-W方向に展開する。両側には側溝としての機能が考えられる溝状遺構が確認されている(SD799・SD810)。溝はほぼ同じ場所に何度も掘削されており、ある期間踏襲されていた状況が認められる。これらの



第93図 溝状遺構検出状況

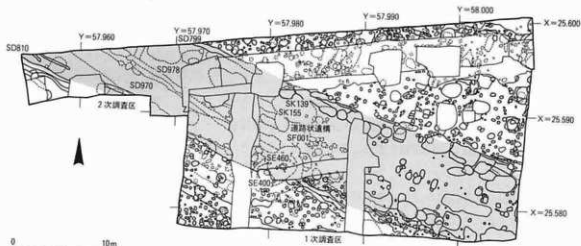
溝から出土した遺物から、道路状遺構の最終的な廃絶年代は16世紀後半から末と推定される。今回検出された道路状遺構の位置は復元想定図において推定されていた位置とほぼ一致しており、推定の正しさを証明することとなった。

道路状遺構を挟む形で南北に土坑や柱穴などの遺構群が展開しているが、これらは切り合いが著しく、遺構密度は極めて高い。調査面積が限られていることもあり、



第94図 道路遺構断面土層

柱穴群から建物を復元することは現状では困難であるが、調査区の東端付近では、道路状遺構に対して直交方向の柱穴列が認められ、道路に直交する地割が存在していたことが窺われる。出土遺物から、これらの遺構の多く



第95図 遺構配置図

は16世紀代のものが多いとみられるが、15世紀代あるいはそれ以前に遡ると思われるものも存在する。

1次調査区の中央部から南東では道路状遺構の推定範囲内に井戸 (SE400・460)、土坑 (SK137・139・155など) 等の遺構が認められる。井戸はいずれも結桶を井戸棒として用いている。SE460の底からは木製櫛及び銅製の柄をもつ鉄製小刀などが出土した。土坑のうちSK155からは多量の鉄滓、銅壁片、ふいごの羽口などが出土しており、調査地付近に鍛冶関係の生産遺構が存在したことをうかがわせるものである。これらの遺構の多くでは埋土の上部に砂礫土層が認められるため、これらはおおむね道路状遺構の下位にあったものと考えられる。ただ、この遺構群の分布をみると、道路状遺構推定位置の中央部に密度が疎の部分や帯状に認められることから、道路状遺構の地業が行われた時期が複数存在したことを推定することが可能である。



第96図 SE460(上) SE400(下)水貯部

道路状遺構の地業よりも明確に下層から出土した遺構としては、溝状遺構 (SD850・SD970・SD978) がある。このうちSD970は断面V字形、検出面からの深さ約140cmを測り、主軸方向はN-60°-Wで道路状遺構とはわずかに異なる。出土遺物から、埋没したのは16世紀前半代と推定され、ほかの溝でも確実に16世紀後半代に位置づけられる遺物が出土していないことから、道路状遺構の築造時期の上限はこの時期であると考えられる。何らかの区画溝としての機能が想定され、道路状遺構築造以前にも何らかの地割がすでに存在したことがうかがわれる。

出土した遺物のうち最も注目されるものは、成型にロクロを使用しないいわゆる京都系土師器が多量に出土したことである。とりわけ、16世紀後半から末に位置づけられる遺構においては出土した土師器の主体を占めており、当該期に京都系土師器がかなり普及していたことを示している。しかし16世紀前半代にさかのぼる資料の存在は現状ではまだ不明といわざるを得ず、京都系土師器の初現時期については資料整理の際の課題である。

今回の調査の結果得られた成果によれば、中世大友城下町では特に戦国時代末期に大規模な道路が整備されており、それを中心とした都市的景観が成立していた可能性が推定される。今後の資料整理、また今後も相次ぐとみられる周辺での発掘調査を通じて、中世大友城下町の成立と道路を含めた整備過程の解明、さらには景観の具体的な復元が進むことが期待される。

(高畠)

(註) 大分市史編纂委員会1987『大分市史』中巻付図Ⅱ

XXIII 多武尾遺跡第3次調査

調査面積 550㎡
地域 D

調査期間 96.10～96.11
調査担当 塔鼻光司

遺跡は、大野川の支流である乙津川の西、鶴崎丘陵上、大分市大字横尾字南城の辻に所在している。調査の契機は大東中学校の武道館建設に伴うものであり、調査は、民間調査機関に委託する形で実施された。

調査区は、昭和54～55年度にかけて実施された実施された第1次調査の北側に隣接するかたちで設定され、調査の結果、弥生時代・近世・近代の3面にわたる遺構面が検出され、それぞれの時期に伴う遺物が出土した。

最も新しい近代から現代にかけての遺構面では、水田耕作に伴う農道、水路、畦畔、素堀溝が検出された。

近世から近代にかけての遺構面では、調査地の中央からやや南東に中心を置いた十字状の大溝と、この大溝に伴う小溝、土坑を検出した。大溝は、東西方向が最大幅約8m、深さ約0.9m、南北方向の溝が最大幅約9m、深さ約1.2mを測り、南北方向のものがやや大型である。遺構の性格としては、埋土の土質が粘質性を帯びていない点から池及び沼地、水路等の水質に関連したものでないことが判明した。従って当遺跡の性格としては、溝、住居を囲む空堀や道等と考えられるが、今回の調査では断定できる資料を得ることはできなかった。

最も古い弥生時代後期末の遺構面では、溝状遺構2条、土器棺1基、柱穴、ピット、坑穴等が検出された。検出された遺構群については、第1次調査で検出された遺構群と連続するものと考えられる。

溝状遺構は、西側にSD001、東側にSD065があり、両者とも南北方向に延びており、SD001は断面「V」字状を呈し、SD065はやや幅広い「U」字状を呈し、溝の掘り直しがみられた。出土遺物については、若干の時期差がみられ、SD001は後期後葉、SD065が後期終末に位置づけられる。更にこれらの溝跡は、以前の第1次調査のSD-3の北側に継続、SD065は第1次調査のSD-6及びSD-8の北側に継続するもので、全体の平面形状からみると大きく右側に旋回した円弧を描いている。SD-3は今回検出したSD001と形状、規模とも同一であることから同一溝であることが確実である。SD065の南側に継続すると考えられるSD-6及びSD-8については



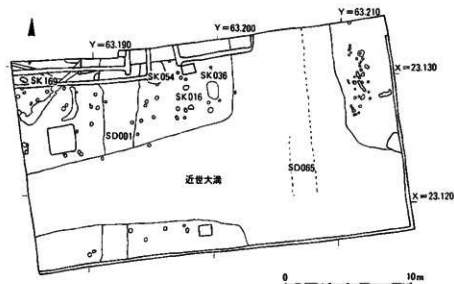
第97図 調査地点位置図



第98図 調査区全景



第99図 SD001遺物出土状況



第100図 遺構配置図 (1/300)

第1次次調査地の北側で重なっていることから、いずれであるかは断定できなかった。

土器棺は調査地の北側中央にSK016が1基ある。土墳の形状は楕円形で長軸は東西方向を向いている。土器棺の中からは副葬品・人骨を検出することは出来なかったが、幼児用の墓と考えられる。

土坑は3基あり、形状はいずれも異なっている。調査地の中央に位置するSK036は南北方向の楕円形、北側中央よりやや西側に位置するSK054は円形、北西に位置するSK169は長方形を呈する。土坑内に特別な施設はなく出土遺物からもその性格を判断することは出来なかった。

柱穴、ビット、杭穴は約70基を検出することができた。柱穴・ビットは、直径約3cmを測るものが多く、規模的にも均一しているが、明らかに柱穴と判断できるものは少ない。また、建物としての並びをもつものも確認できなかった。埋土も同一の暗茶色土層である杭穴は調査地の北東部に集中しており、直径約10cmを測る。

以上が、多武尾遺跡第3次調査の概要である。今後、これまでに行われた第1次、第2次の調査成果を併せ、多武尾遺跡の全容解明に努めたい。

(河野)

多武尾遺跡
第3次調査

XXIV 下寒田遺跡

調査面積 約580㎡

所在地 B

調査期間 96.10.07～96.12.02

調査担当 讃岐和夫

調査地は、大分市大字寒田1369番地の1にあたり、寒田川と敷戸川に挟まれ本宮山から北東に延びた丘陵上にあり、豊後一の宮、西寒多神社から北東へ約1,400mの場所に位置する。同じ丘陵上に中世の遺跡である敷戸城津留遺跡や敷戸磨崖仏が見られ、また、縄文早期後半期の旦野原神原遺跡が所在する。

調査は、市立植田東中学校の武道館建設のために行われ、大分市で初めて民間補助業務を導入したものであった。

調査の結果、奈良時代を中心とする溝状遺構、土坑、柱穴などの遺構を若干検出した。また、風倒木痕と考えられる地層横転痕跡も多数確認された。

調査区は南から北へ旧地形の傾斜が見られその比高差は、約1.5mを測る。調査区中央部において、その傾斜は北へ平坦面を形成している。

調査区中央部の傾斜変換点において、東西方向に走る幅約2mを測る溝状遺構を検出した。また、調査区南側に、それと平行して走り幅約1.5mを測る溝状遺構を確認した。

調査区北側北西部では、現状で3間×3間+α間の東西方向の掘立柱建物跡を検出し、その建物跡の南北方向の柱穴には柱痕も確認した。

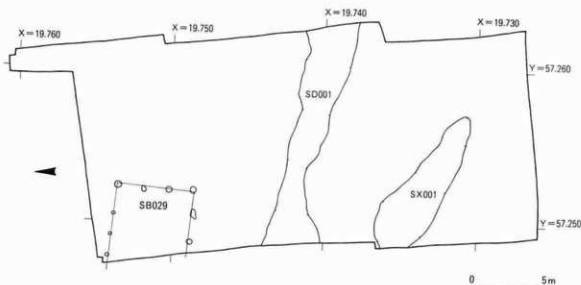
遺構からの遺物の出土がないため、時期の確定は困難を極めるが、本来の遺構検出面となろう層から8世紀後半と比定される土師器が多数出土していることを考えれば、おおむね同時期の所産と考えて大過ないであろうと思われる。



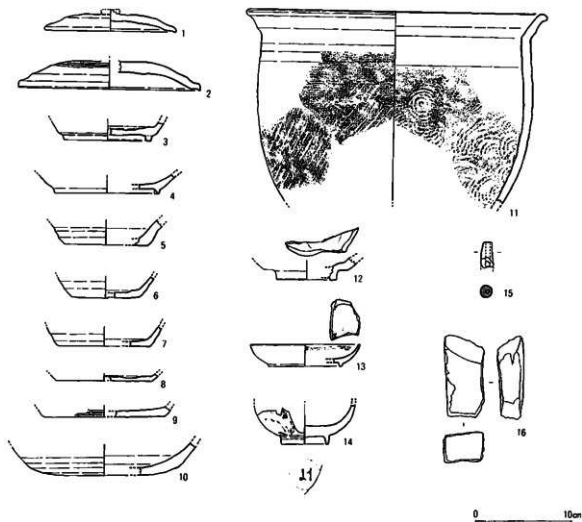
第101図 調査地点位置図



第102図 調査区全景



第103図 遺構配置図 (1/250)



第104図 出土遺物実測図 (1/4)

出土遺物

下寒田遺跡からは、土師器環、皿、蓋、甕、土師、青磁碗、染付、砥石などが表土中から出土している。出土遺物は概して少なく、加えて遺構に帰属するものも皆無であった。

出土遺物は、大きく古代、中世、近世～近代の遺物に分けることができる。以下、各時代別の遺物について概観する。

古代の遺物については、土師器環、蓋、甕がある。環については、高台付のもの(3, 4)と、いわゆる「ハコ形」の環(6, 7)の2種類が観られる。特に後者の環については、太宰府系とされる「環d」との比較において、在地系と位置づけられている。皿(8, 9)については、内外面共に回転台を使用したヘラ磨きを施すもの(9)が含まれる。蓋については、ボタン状もしくは擬宝珠状の扁平なつまみがつき、口縁部については、端部を丸くおさめる(1)と緩やかに下方に屈曲する(2)が観られる。甕については、内・外面に叩き痕を残す数段型「叩き甕」と呼ばれるもので、その技法は須恵器製作技法の影響を受けたものと考えられる。これら遺物群の時代的な位置付けについては、概ね8世紀後半に位置づけられると考えられる。

中世の遺物については、土師器環(5)、青磁碗(12)がある。青磁碗については、龍泉窯系碗Ⅰ類(詳細分類は不明)にあたり、時代的な位置づけは、12世紀中頃から13世紀初頭に位置づけられる。土師器環については、小片のため詳細は不明であるが、その形態からは青磁碗よりは後出する印象である。

近世～近代の遺物については、肥前磁器染付碗(14)と不明色絵皿(13)がある。(14)は、高台内に「大明年製」銘款が観られる。判読し難いほどに崩れた書法のもので、18世紀の磁器に良く用いられる銘である。(後藤)

XXV 旦野原神原遺跡

調査面積 約600㎡
所在地 B

調査期間 96.06.14～96.07.31
調査担当 後藤典幸

本遺跡は、寒田川と敷戸川に挟まれ霊山から北東に延びた丘陵上にあり、植田東中学校から南西へ約1,200mの場所に位置する。豊後一の宮、西寒多神社の東側裏山にあたる。

調査の結果、調査区東側中央区付近において集石遺構1基を確認した。調査区中央から南側（谷側）では、覆土に焼土を含む土坑15基+ α を検出した。遺構付近からは平格式土器片（縄文早期後半）、押型文土器片などが出土している。調査区北側では多数の柱穴を確認し、無文土器片や土師器片・近世の播鉢片等が少量出土した。



第105図 調査地点位置図

調査区東側中央付近で検出。検出面より深さ10cm程度の円形掘り込みを有し、中に最大10cmほどで大小の角礫を投入した状態であった。その形状は径約1.2mの円形プランを呈し、礫は火を受けていた。また、焼土や炭化物も見られ、礫の間や集石付近から縄文土器片が出土した。

<土坑>

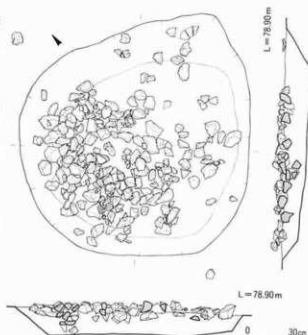
調査区中央から南側にかけて検出した。土坑は単独のもの、あるいは複合したものがあり、円形または楕円形プランを呈す。径約0.8～1.2m、深さ20～30cmを測るものが多く、すべての土坑の覆土は焼けており、中には炭化物や縄文土器片、また礫を含むものも確認した。さらに、遺存状態は良くないが、連結土坑と思われる遺構が切り合って確認されている。

<柱穴>

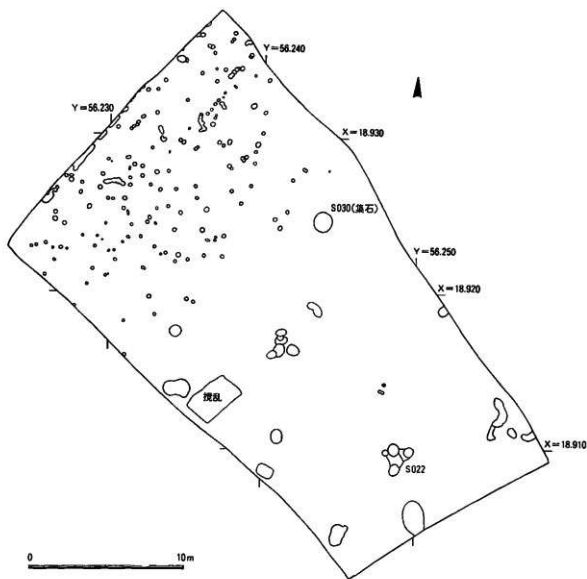
調査区北側で多数検出した。径約10～20cm程度で建物跡は確認されなかった。柱穴からは、少量の無文土器や土師器・近世の播鉢、黒曜石、石器等の破片が出土している。



第106図 調査区全景



第107図 集石遺構平面・断面実測図 (1/20)



第108図 遺構配置図 (1/250)

大分市域において縄文土器の出土は各所で認められている。その時代別内訳をみると縄文後期出土遺跡が最も多く、次いで晩期資料の出土が目立つ。

ところで、今回旦野原神原遺跡で出土した早期資料は市北西部に位置する国分台地ならびに庄ノ原台地に出土事例が集中し、内容的には押型文土器が主体を占めるものである。今回出土した土器群は早期後半期に位置づけられる平形式を含み、前出の台地出土資料より若干新相を示すものと考えられる。

検出遺構に関しては、長楕円形プランを呈する土坑の一端に焼土、被熱面が集中する様態が注視される。このような状況から想定される遺構としては、前段でも触れたように、九州内において特に南九州に検出事例の多いいわゆる連結土坑に近い構造のものが考えられる。大分市域内において縄文時代の遺構の検出例は小池原貝塚、横尾貝塚などを除く極めて少なく、そういった意味からも今回の発見事例は貴重なものといえよう。(後藤)

〈参考文献〉

- | | | |
|---|----------|------|
| 「大分市の文化財」第30集 - 大分市域の縄文土器資料集成 - | 大分市教育委員会 | 1996 |
| 「三 縄文早期・前期の文化」『大分市の文化財』第3集 | 大分市教育委員会 | 1962 |
| 「国分ニュータウンで採集した縄文土器」『大分市歴史資料館ニュース』31 | 大分市歴史資料館 | 1995 |
| 『庄ノ原地区遺跡群』九州横断自動車道に伴う発掘調査概報 | 大分県教育委員会 | 1962 |
| 『野間古墳群・横尾貝塚・小池原貝塚緊急発掘調査』『大分県文化財調査報告書』第13輯 | | 1967 |

XXVI 猪野・中原遺跡

調査面積 2693㎡
地域 E

調査期間 96.05.13～96.10.09
調査担当 塩地潤一

調査地は大野川の支流・乙津川下流域の左岸に広がる標高40m前後の鶴崎丘陵上に位置し、中世には高田荘猪野名、また、戦国期には大友氏の被官となった在地領主（徳丸・中村・種具氏など）の給地となっていたと想定されている地点にあたる。

今回の調査は店舗建設に伴う事前調査として実施した。

調査の結果、戦国期の居館跡と思われる遺構群と弥生時代中期前半に比定される大溝を検出した。

以下に各時代の様相をまとめる。

・戦国時代

南北約50m、東西約40mの範囲には幅約2mの溝が走り、南面が別区状に張り出す長方形区画を呈していた。

さらに、区画の中心部には土師器環に銭貨が埋納された地鎮遺構（SX050）が検出され、それを取り囲むようにコの字状に配置された掘立柱建物跡群が確認された。

地鎮遺構（SX050）から出土した土師器環は5点。すべての環には3枚ずつ銭貨が埋納されていた。

腐食が著しく、現段階では銭貨の同定はできていない。

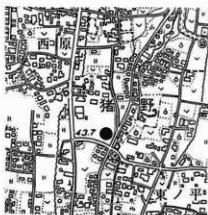
土師器の法量は口径10.9～12.1cm、器高2.7～3.1cm、底径5.3～5.8cmを測る。底部切り離しはすべて回転糸切りによって処理されている。口径に比して底径がかなり小さく、屈曲部から口縁部までは外に大きく開きながら直線的に立ち上がる。体部内面から口縁部内面にかけては明瞭に強い横ナデが施され、そのためであろうか口縁部がやや肥厚しているのが目立つ。また、底部内面にはナデを施し、底部外面には板状圧痕を残すものが大半である。

これらの一括性は極めて高いものであり、今後の調査・研究によって詳細な属年について検討する必要がある。

先述のとおり、この地鎮遺構（SX050）を取り囲むように掘立柱建物跡群が検出され、さらにこの建物群に重複して（新旧関係については古い方から（SD057→SB105）溝状遺構が確認されている。

小溝ではあるものの、後にこの溝状遺構に沿って建物が配置されることから、地鎮遺構に関連する区画溝である可能性が指摘される。

また、建物群の前面からは井戸跡（SE033）が1基確認されている。この井戸跡からは絵唐津陶器皿が出土して



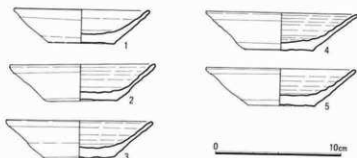
第109図 調査地点位置図



第110図 調査区全景



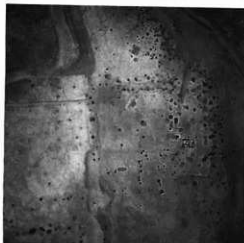
第111図 地鎮遺構(SX050)検出状況(北より)



第112図 SX050出土遺物実測図 (1/3)

おり、17世紀前半には埋没したことが判明している。長方形区画をなす溝状遺構についても同様な所見が得られている。

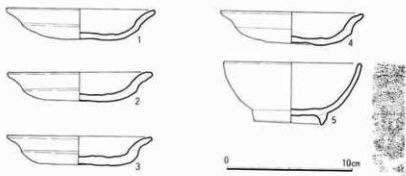
さらに、張り出し部においても掘立柱建物跡（SB100・135）をはじめ、五輪石が出土した土坑（SX020）や土器埋納坑（SX005）などが検出されている。



第113図 区画溝検出状況



第114図 土器埋納坑(SX005)検出状況



第115図 SX005出土遺物実測図（1/3）

SB100掘立柱建物跡群に隣接する土器埋納坑（SX005）からは高台付土師器碗1点と土師器皿4点（5点とも完存品）が出土している。これらの出土状況ならびに土層観察の結果から資料の一括性は高いと判断される。

碗は口径10.9cm、器高4.8cm、底径5.4cmを測る。体部外面は横ナデ、底部内・外面にはナデを施し、体部内面には布目痕を残すが、内面上半は横ナデにより撫で消されている。また、体部下半と底部内・外面に黒班が認められ、底部外面には判読不明ながら花押風の墨書が確認されている。

さらに共伴する土師器皿はすべて京都系土師器であり、口径11.4～11.9cm、器高2.25～2.6cmを測る。口縁部外面は強い横ナデ、体部内・外面には横ナデ、底部内・外面はナデを施す。

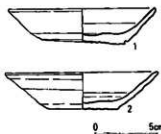
豊後における京都系土師器の出現は一般的には16世紀中頃と考えられており、その後、幕末まで確実に存続する。これら土師器の型式学的変遷の詳細については明らかにされていないが、近年の研究成果によると、16世紀末～17世紀初頭に比定される一群と17世紀前半代のものとは口縁端部の調整や器形に差異が認められるという。また、山口県大内氏館跡出土資料との比較からその出現が16世紀前半まで遡る可能性が指摘されており、さらには戦国時代の属性として器壁が薄く、口縁部が外反する（口縁端部外面に強い横ナデを施す）ことが挙げられている。

以上のことから、今回出土した土師器皿の帰属年代は戦国時代の範疇で捉えられ、共伴する高台付土師器碗も同時期と判断されよう。

この他の遺構としては区画の北西角において、同時期の木棺墓が1基（ST080）と土器埋納坑（SX065）が検出され、中核建物の前面からは井戸跡が1基（SB033）確認される。この井戸跡からは絵唐津陶器皿が出土しており、17世紀前半には埋没したことが判明している。長方形区画をなす溝状遺構についても同様であり、当該期の遺構群は戦国時代（16世紀後半か？）～江戸時代はじめ（17世紀前半）にかけての比較的短期間に営まれたものであると考えられる。

さらにこれらの遺構群からは概して出土遺物が少なく、その組成についても火鉢や壺などの雑器が目立つ。また、陶磁器についても饅頭心型の青花碗をはじめ僅少である。一方では土器埋納坑からの出土遺物には目を見張るものがあり、対照的な現象と言える。

今回の調査成果は遺構・遺物ともに当該期の社会像の解明につながる内容を少なからず内包していると思われる。遺構については居館構造の解明につながる発見が相次ぎ、遺物においては太友氏の領国と一致する傾向で分布している京都系土師器皿について埋納遺構からの一括資料を提示することができた。



第116図 ST080・SX065出土遺物実測図(1/3)



第117図 遺構配置図(1/400)

事実、他の遺構からも京都系土師器皿の小破片は若干出土しているが、あくまでも客体としての存在であると判断される。

遺跡内の京都系土師器の位置付けについては大変興味深い現象が指摘されている。大分県緒方町に所在する千人塚遺跡では戦国末期を中心とする墳墓群が造営されており、その供献品として京都系土師器皿が使用されているものが確認されている。

供献品の組成についてはクロ成形の土師器と京都系土師器に大別され、この二種が共伴する事例は確認されていない。さらに後者が供献される墳墓については規模や立地、その他の供献品などから前者を供献する墳墓より優位性が認められる可能性が高く、時期的な問題も念頭に入れながら、その分布状況や出土状況などの詳細な検討を加えることによって遺跡そのものの位置付けについても可能となるであろう。

この猪野・中原遺跡が所在する鶴崎丘陵上には当該期の遺構が数多く展開しており、文献に残る猪野名の地名ならびに大友氏の被官である在地領主の存在を示唆している蓋然性は高いと考えられる。

・弥生時代

調査区北側の大半を占める幅約17mを測る大溝(SX055)が唯一該当する遺構として挙げられる。

しかしながら、戦国時代の遺構に一定量、当該期の遺物が混入しており、ある程度の遺構の広がりがあったと想定される。今回の調査地全面に戦国時代の遺構が展開していることから、おそらくこの段階で破壊されたと思われる。

この大溝(SX055)は鶴崎丘陵に直交する形で形成され、最深部で表土より約4mを測る。また、底面レベルは西から東に向けて深くなっている。さらに断面形状は緩やかなU字形を呈し、中央底面には断面逆台形の落ち込みが確認されている。埋土は粘質土ならびにシルト質土を基調とするが、最下層には砂質のシルト質土が堆積していた。また、上層には掘り返しの痕跡と思われる不整合の土層堆積が確認された。

周辺の地形測量の結果からは、この一帯が大溝に沿って東に傾斜していることが判明しており、この大溝が人為的に改変されているかどうかは別として、この地点の旧地形が谷部に相当していたと考えられる。

また、本遺構の壁面には多くの坑跡が確認され、列状に並ぶものも存在している。

この大溝からの出土遺物は上層と下層とでは明確な時期差が看取される。先述のとおり、上層には後世の掘り返しが認められることもあり、4世紀後半～戦国時代にかけての遺物が出土している。

一方、下層からは弥生時代中期前半に比定される須玖I式併行期の甕・壺片などが出土している。

以上のことから、この大溝の特徴は以下のようにまとめられる。

この大溝は、谷部に形成された東西方向の溝状遺構であり、弥生時代中期前半以前にはある程度の流水が確認される。この段階の平面形状には人為的な改変が加えられている可能性が指摘される。また、中期前半以降は滞水していたようであり、粘質土ならびにシルト質土が堆積する。

この大溝は調査区外に延びており全体的な形状は不明である。しかしながら、福岡市三苦永浦遺跡で発見された弥生時代中期後半の溜井遺構がもつ諸特徴に多くの類似点を認めることができることは注目されよう。

今後の周辺調査が期待されるところである。

(塩地)



第118図 SX055全景(東より)

XXVII 猪野新土井遺跡（第3次調査）

調査面積 約3,500㎡
所在地 E

調査期間 96.10.15～97.09.06
調査担当 後藤典幸

本遺跡は、大野川左岸の標高40mの南北に延びた鶴崎丘陵上にあり、明治北小学校から南に700mの場所に位置し、平成7年度に行った1・2次調査地の南側隣接地にあたる。遺跡の東側には、大野川方向へ開析する谷が見られる。

調査の結果、弥生時代から近世におよぶ多くの遺構を検出した。主な遺構として調査区1区で、古代のものと思われる東西方向に走る道路状遺構が見られ、2区では、戦国時代末期の道路状遺構が南北に延び、北側で途切れている。また、その東に方形に巡ると思われる溝状遺構の一部が確認された。3区でも、戦国時代末期の方形に巡ると思われる溝状遺構の一部が確認され、内側に同時期の多くの建物群を検出した。4区では、前回の調査で確認された方形に巡る溝状遺構の一部が確認され、その内側（東側）に同時期の平安時代初期の建物遺構が見られた。



第119図 調査地点位置図

〈調査区1区〉

調査北側に東西方向に走る溝状遺構を検出した。SD003とSD005の2本は幅5mの間隔を有し、溝幅0.5mを測る。溝の間には、江戸時代から近代まで3度以上の掘り返しが見られ幅3.5m最深1.4mを測る溝状遺構SD004がこれら2本の溝と同一方向に走り、東に向かって傾斜し2区西側で途切れている。その南側には溝状遺構に隣接し東西に並行に走る近代から近現代まで踏襲されていた幅1～1.5m、深さ0.3～0.7mの溝状遺構SD001が見られ、東に向かって傾斜し2区西側で途切れている。これらは地割りの溝であろうと考えられる。以上のことから並行して東西に走る溝は、永い間踏襲されていたことが窺える。

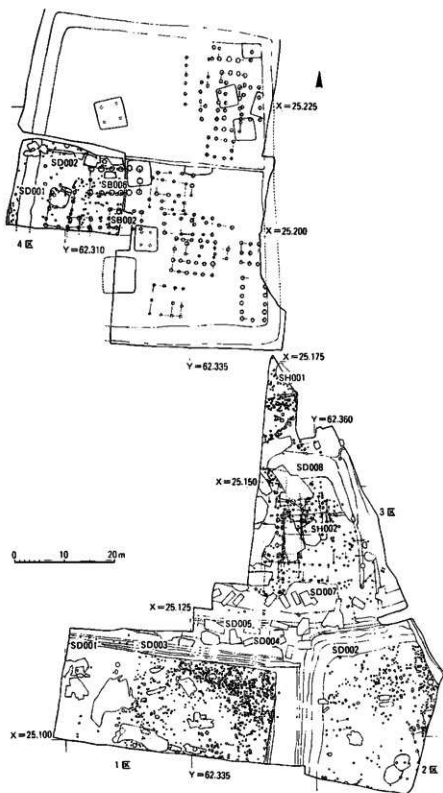
本調査区の西に位置する西原の調査では、8世紀中頃前後に比定される道路状遺構が発見されており、様態も全く同じであり、方向も一致している。双方とも路面は削平により欠失し、明確に道路と判断する材料に乏しいもの、他事例との比較から、同一の道路状遺構と判断して差し支えないであろう。今回検出された古代遺構との関連の検討が今後の課題となろう。この道路状遺構は2区西側で途切れている。後述する中世の道路状遺構に切



第120図 調査区（1・2・3区）全景



第121図 調査区（4区）全景



第122圖 遺構配置圖 (1/750)

られていてわからないが、南方向へ曲がっていたとも考えられ、今後の調査における留意点といえるだろう。

調査区東側では弥生時代から古代にかけての非常に多くの柱穴が検出され、他の調査区に比べてもその多さは突出している。遺物として弥生土器、須恵器、土師器片が多量に出土している。詳細については今後の資料整理に期待するところである。

〈調査区2区〉

調査区北側に東西方向に走り逆L字に南方向に延びる溝状遺構SD012は、幅2～2.5m、深さ0.5mの逆台形に掘られた溝で、前回調査で確認された方形区画の溝と状況が類似する。東側と南側調査区外に延びており規模は不明であるが、同様に方形区画の溝と判断して差し支えないと思われる。時期については、出土遺物が概して少なく決しがたいものの須恵器の蓋片等から、7世紀末から8世紀初頭の所産と考えて大過ないであろう。

調査区西側では、調査区の遺構検出面より1mほど下から、さらに地山を掘り込み粘土・土・砂等を版築状に叩きしめた水平堆積（敷き詰める）が認められた。それらは2層確認され南に傾斜しながら南北方向に展開している。層の厚さはそれぞれ7～8cmを測り、東側は近世から近現代の溝により削平を受けているが長さ20m幅2mにわたって残存する。下層からは、全て南北方向を向き幅10cm深さ1～3cmほどで長さは0.2m～1mの小溝が50条ほど全面に確認され、西側に幅10cm深さ7～8cmの溝が検出された。堆積層も溝も北側で途切れている。中国産の染め付片が下層から出土しており、所産時期は16世紀末頃と比定される。

最近の館町の調査で16世紀末の道路が検出されている。その構造は、両側の屋敷地よりやや下がり、基本的に両側に側溝をもち、断面観察によると両側の屋敷地より1m程掘り下げ、そこに粘土・砂・土が交互に水平に堆積しており、掘り込み地業のような状態が確認されている。また、上野総社山道路でも、中世の切通し状道路が検出され、その断面では、掘り込んだ後、片側に溝を掘り、道路面を整地している様子が観察されている。また、若草公園では、近世の西上市町の東西道路が検出され、道路は整地層を幅6mにわたって掘り下げ、砂・粘土・土を最終的に1mの高さまで版築状に敷き詰めて整備していた。当初は道路面が両側の町屋部より低くなっていたことが推定される。このように、中世から近世まで豊後府内では同じような特徴的な工法で道路が造られていたと推測される。

以上のことから、調査区西側で検出された遺構は、その様態から道路の可能性が高いと考えられる。道路であるとすると、その全面に検出された小溝は、荷車等の往来時の轍（ワグチ）の跡とも推測され、今後の詳しい検討が課題であろう。また、南方面へ展開していると思われることから、延長地点の今後の調査に期待したい。

〈調査区3区〉

方形の聖穴住居跡2基を検出した。北側のSH001は大きく東側を掘削されており、南西部が残るのみで、深さ30cmを測る。中央部のSH002は東西4m南北5.5m深さ30cmを測り、南西部の多くを掘削されている。2基とも土師器環・須恵器等が出土し、9世紀初頭の所産と推定される。

調査区南側に東西方向に走る溝状遺構SD007は、東方向へ傾斜し最深1mを測り、東側で途切れる。3度以上の掘り返しが見られ、西壁で幅3.5m、東へ13mのところまで2.5mとくびれ状に幅を減じ、それ以後幅6mに広がり、逆台形を呈す。溝からは16世紀末と比定される京都系土師器や中国産染め付等が出土した。SD008は、東西方向に走り、東側斜面手前で南方向へ曲がり、調査区南東部で途切れる。溝は西方向へ傾斜し最大幅5m最深1mを測り、逆台形を呈す。SD007と同様の遺物が出土しており、16世紀末の所産と推定される。SD007とSD008の全体規模は不明であるが南東部を開口し長方形に巡る溝の可能性が高いと推定される。SD007とSD008の間隔は南北20～25mを測り、その内側に溝と同時期の掘立柱建物跡を約15棟+αを検出した。柱穴の直径30～40cmを測り、柱間に差が見られるのが多くは3間×2間の建物である。柱穴の重複関係ならびに建物配置などから、最低

6 回程度の建て替えが想定される。

今回の調査地から南へ約400mの地点にある猪野・中原道跡では、調査区全面に堀を巡らした、戦国期の居館跡と思われる遺構群が検出されている。本道跡とほぼ同時期であり関連性が注目される。

〈調査区4区〉

前回実施された1・2次調査地の南西隣接地にあたり、今回の他の調査区から少し離れた北西約50mのところに位置する。調査区西側で検出された溝状遺構SD001は、南北方向に走り幅約2.2m、深さ0.5mを測る溝で前回調査された方形に連なる溝状遺構の一部であると思われる。今回調査では時期比定できる遺物は出土していないが、前回調査では8世紀から9世紀初頭にかけての土師器等の出土が認められている。SD002は幅約0.4～0.6m、深さ約10cmを測り、床面には波状の凹凸が認められ、SD001とほぼ直行し東西方向に走る。これも前回調査された方形区画内を大きく区切る東西方向の溝状遺構の一部と思われ、SD001から東に約3.2mのところであっていったん途切れ、2.3～2.6mの空間をもって東へ続くと考えられる。出土遺物はほとんどなく、時期を比定し得る資料はない。

調査区南東で検出された掘立柱建物跡SB002は、現状で2間×1間+α確認しているが、前回の調査と併せて考えると、4間×2間の東西方向の建物跡として完結する。出土遺物に時期の比定し得る資料はなかった。調査区北東で検出したSB006は前回の調査と併せると、建物の主軸は真東西をなし、5間×2間の規模であることが確認され、大きさから建物群のなかで主軸となるものと思われる。柱穴の掘り方は、円形で直径1.2mを超える大形のものであり、深さは深いもので、検出面より0.7mを測る。柱痕跡は直径20cmを測り、掘り方の端に寄せて建てられている。土層観察の結果、建て替えは認められず、一部に柱の抜き取り痕が確認された。また、柱穴のうらごめからは、多量の土器が出土しており、建物の構築時期を決定する上で極めて重要な資料となる。調査区中央付近からは竪穴状遺構（SX001）を検出した。東西3.8m×南北3.4mを測る隅丸方形を呈し、遺構の中央は、深さ20cm程度から段掘りされており、最深約50cmを測る。遺構の北西部には、別遺構が認められる。土層観察の結果、遺構の東側に竪上で堅くなった層が認められ、南東部にはカマドと考えられるような施設があり、さらに、南東隅には煙道と思われる遺構が認められる。また、この遺構には、多量の土器が廃棄されていた。

調査区4区における遺構の方向・切り合いから、掘立柱建物等の変遷を考えると建物建てる最初の段階からすでに、方形に連なる溝で区画していたと思われる。溝と並行した南北方向の建物の廃絶後に東西方向の建物が構築され、これと併行するか、後出するかして、SX001が掘られたと考えられる。この間、SD001は最初の区画溝を踏襲しながらも、幾度かの掘り返しが行なわれながら機能していたと思われる。これら遺構からの出土遺物にそれほどの時期差はなく、所定時期はおおむね8世紀末から9世紀初頭に比定して差し支えないであろう。

今回の調査では、前回の調査で検出された平安時代の方形区画の南西部の様子が判明し、主体となる大型建物の規模ならびに時期も確認された。また、方形区画の南側に鶴崎丘陵を横断する東西に延びる道路の存在も明らかになった。さらに別の方形区画も検出され、この地域の古代の様子が徐々に解明されつつある。また、戦国期の遺構も新たに検出され、南に延びる道路も確認した。その方角には猪野・中原道跡があり、この道跡との関連を究明することが今後の課題であろう。

（後藤）

XVII 羽屋・園遺跡（第3次調査）

調査面積 1,300㎡
地域 A

調査期間 96.04.10～96.04.24
調査担当 塩地潤一

今回の調査地は豊後国府推定地の一つである古国府遺跡群内に位置し、平成2年度に実施した羽屋・園遺跡第2次調査地点に隣接する。また、7世紀後半を一定点とした規格性の高い大型の掘立柱建物跡群が検出された羽屋井戸遺跡とは南東方向に約100m程しか離れていない地点にあたる。

ガソリンスタンド建設の計画に伴い、遺跡の密度を把握するため、対象地全面の遺跡確認調査を行った。調査の性格上、時期の確定はできなかったが、対象地全面に遺構が確認された。

今回検出された遺構群は大型の掘立柱建物跡をはじめとして堅穴住居跡と思われる方形プランの遺構（以下、堅穴住居跡とする。）と、溝状遺構、さらには完形に近い須恵器の坏や蓋が大量に内包されている可能性が高い土坑などが挙げられる。

以下に各遺構について概略を述べる。

・掘立柱建物跡

2間×9間の大型掘立柱建物跡（SB003）をはじめに、3間×3間（SB004）と、2間×2間（SB005・SB006）の倉庫跡など6棟が確認されている。

2間×9間の大型掘立柱建物跡（SB003）の柱掘方は直径70cmを測り、平面プランは円形を呈す。

遺構の新旧関係は、古い方からSD009・SH006→SB003→SD008となる。

また、3間×3間（SB004）と、2間×2間（SB005・SB006）の倉庫跡については3棟南北方向に並んで検出されている。これらの柱掘方は直径50～90cmを測り、柱根が残存しているものも確認された。

今回検出した掘立柱建物跡はすべて真南北を指向した方向性は認められず、第2次調査地点で確認されているものとも規則的な配置は看取できなかった。また、調査地の北側には「七曹司」という小字名が残されており、南北方向に並ぶ倉庫跡などとの関連性が指摘される。

・堅穴住居跡

可能性のある遺構として8基ほど確認されている。

平面プランはすべて方形であり、その規模は縦約5m、横約6mを測る。

遺構検出段階で出土した遺物から推測すると5世紀～7世紀初頭頃に比定される可能性が高いと思われる。

・溝状遺構

第2次調査で検出された遺構と同一のものを含む9条が確認されている。

これらの遺構はその形状や新旧関係から2つに大別される。

1つはSD005とSD008が相当する。遺構の重複関係から今回検出された遺構の中で最も新しいと判断されるものである。また、もう一つはSD002やSD009などが相当する。遺構の性格については様々であろうが、SD009についてはその平面形状から灌漑用の水路である可能性が指摘される。

今回確認された大型掘立柱建物跡群の発見は近年、霧中の親となっていた「古国府遺跡群の豊後国府推定地説」を再考する嚆矢となったと言える。

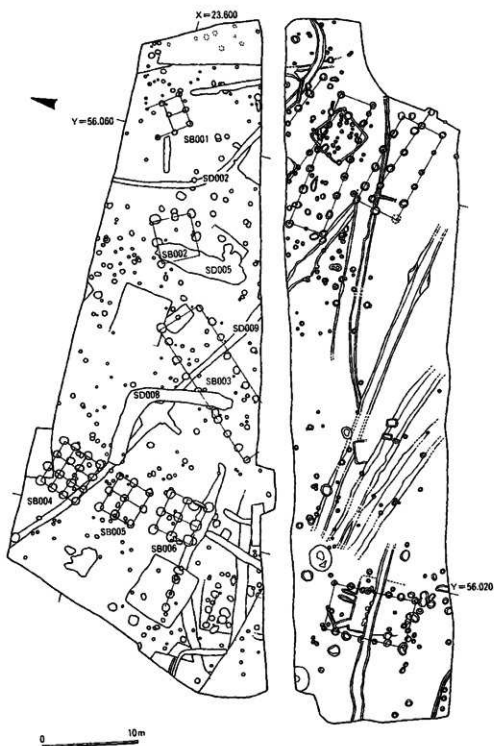
この一帯には羽屋井戸遺跡をはじめとした、大型掘立柱建物が展開していることがすでに指摘されており、豊後国成立前後の歴史的な変遷期の様相を解明し得る遺跡として高く評価されよう。

今後の調査が期待されるところである。

（塩地）



第123図 調査地点位置図



第124図 遺構配置図 (1/400)

XXX 尾崎丸田遺跡

調査面積 400㎡
地域 E

調査期間 97.03.11～97.03.31
調査担当 塔鼻光司

申請地は平成8年12月6日付で調査依頼がなされ、同年12月25日に試掘調査を実施した。その結果表土直下（-20cm）で溝状遺構や竪穴住居跡、さらに柱穴群や地層横転遺構などが確認された。これをうけて、開発業者と協議の結果、宅地内道路を除く部分で遺跡の保存に協力が得られたことから、保存を前提とした遺跡の詳細確認のため、平成9年3月11日～平成9年3月31日に遺跡確認調査を実施した。

開発面積は約1,400㎡で、そのうち道路部分の約400㎡を調査区として設定した。調査区内からは、試掘の段階で把握していた住居跡や柱穴が確認された。

住居跡（SH001）は、調査区の関係で約東側半分の調査となった。増築が行われており、旧床面は南北約8.5mで隅丸方形を呈する。炉はほぼ中央に位置し、主柱穴は4本検出しているが、住居跡全体では、配置から推測して6本と思われる。また、壁溝をめぐる。新床面は南北10mを測り、隅丸方形を呈する。調査区内で検出された部分では、約60cmの間隔を保って拡張している。主柱穴は旧床面と同じく4本検出しているが、柱間から6本と思われ、周囲には壁溝をめぐる。畑地の開墾でかなり削平を受けており、遺存状況は良くなかった。そのため、遺物も少量であった。

柱穴については、規格性を持つものは、限定された調査区のため確認されなかった。

本遺跡は、昭和56年～57年にかけて発掘調査を行った尾崎遺跡と隣接して位置する。当時検出された弥生時代の住居跡は27基で、大半は後期に属し、後期後葉に集中する状況が見られた。また、増築を行っているものは5基報告されているが、最大のものでも長軸で9mであり、西半分が未掘であるが、長軸で約10mを測る住居跡は大型であるといえよう。

（塔鼻）



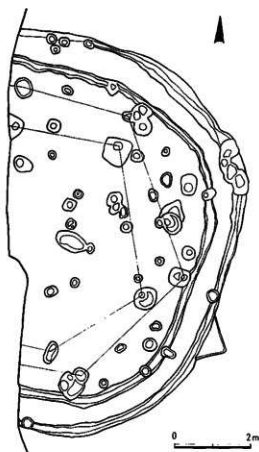
第125図 調査地点位置図



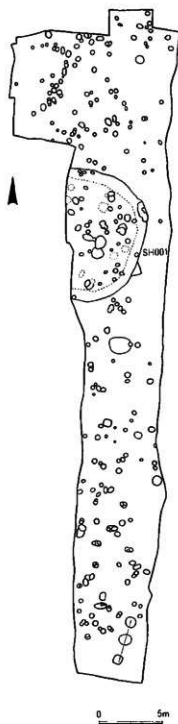
第126図 尾崎丸田遺跡と周辺の遺跡



第127図 調査区全景



第128図 住居跡 (SH001) 実測図 (1/40)



第129図 遺構配置図 (1/300)

XXX 米竹遺跡

調査面積 130㎡
地域 E

調査期間 96.11.25～96.11.29
調査担当 塔鼻光司

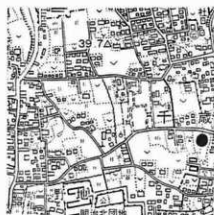
申請地は平成6年9月5日付で宅地造成に伴う調査依頼がなされ、同年12月1日に事前調査を実施した。その結果、表土下層（暗茶褐色土）にビット群および土師器片等が確認された。その後開発申請者が変更となり、開発業者と協議の結果、宅地進入路部分を除く範囲で遺跡の保存に協力が得られたことから、削平を受ける進入路部分の調査中心に、保存を前提とした遺跡の詳細確認のため、平成8年11月25日～平成8年11月29日に遺跡確認調査を実施した。

本調査区の付近は、弥生時代中期の貯蔵穴群や古墳時代の集落跡、奈良～平安時代の溝に囲まれた掘立柱建物跡群、千歳城跡など市内でも有数の遺跡集中地区である。このことから、慎重に遺構検出を行った結果、南北方向に延びる溝状遺構が2条確認されたが、近代の畑地開墾事業のため削平を受けており、遺存状況は良くなかった。

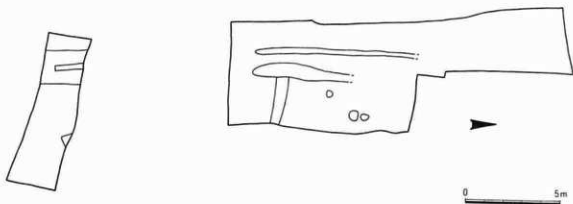
遺物は事前調査時に土師器片が、また確認調査時に溝状遺構から弥生中期の埴底部が確認されているのみである。

事前調査並びに確認調査の結果、南北方向に規則性を持った柱穴群は柵列の可能性も考えられ、また、付近の状況および遺物などから弥生中期～中世の時期に同定できよう。

(塔鼻)



第130図 調査地点位置図



第131図 遺構配置図 (1/200)

XXI 乙院屋敷遺跡

調査面積 140㎡

地域 B

調査期間 96.12.09～96.12.13

調査担当 塔鼻光司

申請地は平成8年9月10日付で調査依頼がなされ、同年10月7日に試掘調査を実施した。その結果南北方向の溝状遺構や不定形土坑。また、近世陶磁器片などが確認された。これをうけて、開発業者と協議の結果、遺跡の保存に協力が得られたことから、保存を前提とした遺跡の詳細確認のため、平成8年12月9日～平成8年12月13日に遺跡確認調査を実施した。

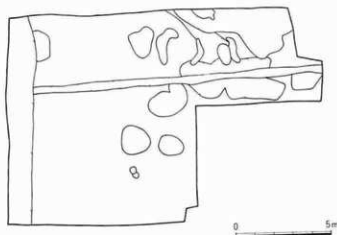
12月9日から遺構検出作業にかかり、事前調査で検出された溝状遺構や不定形土坑を含む遺構が確認された。

調査の結果、溝状遺構内には拳大の礫が敷き詰められており、暗渠排水溝と思われる。また直径約1mを測る土坑は、検出時の状態や近接する墓域から墓壇と考えられる。

遺物は遺構検出時および事前調査時に数点の近世陶磁器片が確認されているのみである。また、当調査区に隣接して平成6～7年度に、大分県教育委員会が九州横断自動車路建設に伴う発掘調査を実施しており、その調査所見が本調査区と酷似している点から、遺構の時期については、19世紀後半代と考えられる。(塔鼻)



第132図 調査地点位置図



第133図 遺構配置図 (1/200)

木竹遺跡
乙院屋敷
遺跡

第四章 受贈図書目録

1.調査報告書

宮城県	宮城県多賀城跡調査研究所	多賀城関連遺跡発掘調査報告書 第20冊	桃生城跡3	1995
福島県	福島県教育委員会 郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団	割田B遺跡		1996
		上之内遺跡		1996
		遠後遺跡		1996
		郡山市教育委員会		
		郡山市埋蔵文化財分布調査報告1		1996
		郡山市埋蔵文化財分布調査報告2		1996
		郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団		
		郡山市二池遺跡出土耐火物、鉄砂および鉄分析・試験結果報告書		1996
		木村館跡(Ⅶ・Ⅷ区)第3次発掘調査報告		1996
群馬県	高崎市教育委員会	高崎市文化財調査報告書 第99集	山名原口Ⅰ遺跡	1990
		高崎市文化財調査報告書 第137集	平成6年度高崎市内小規模埋蔵文化財緊急発掘調査概要	1995
		高崎市文化財調査報告書 第139集	高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書10	1996
		高崎市文化財調査報告書 第140集	高崎市内小規模埋蔵文化財発掘調査概要	1996
		高崎市文化財調査報告書 第141集	真町Ⅰ遺跡	1996
		高崎市文化財調査報告書 第142集	稲荷町Ⅱ遺跡	1996
		高崎市文化財調査報告書 第143集	寺尾東館Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡	1996
		高崎市文化財調査報告書 第144集	並根北Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡	1996
		高崎市文化財調査報告書 第146集	東町Ⅴ遺跡	1996
		高崎市道跡調査会		
		高崎市道跡調査会報告書 第35集	上大野地田遺跡	1995
		高崎市道跡調査会報告書 第43集	栄町Ⅰ遺跡発掘調査報告書	1996
		高崎市教育委員会 第44集	矢中村西Ⅰ遺跡	1996
		高崎市道跡調査会報告書 第45集	倉賀野中里前遺跡	1996
		高崎市道跡調査会報告書 第46号	稲荷山古墳	1996
		高崎市道跡調査会報告書 第48集	双葉町Ⅰ遺跡	1996
		高崎市道跡調査会報告書 第49集	下小島町頭Ⅱ遺跡	1996
		高崎市道跡調査会報告書 第50集	下之城村前Ⅱ遺跡	1996

	高崎市道跡調査会報告書 第51集	中尾村前V道跡	1996
	吾妻町教育委員会		
	守山地区県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告		1991
千葉県	国立歴史民俗博物館		
	国立歴史民俗博物館資料調査報告書 7	農耕開始期の石器組成 1	1996
	国立民俗歴史博物館資料調査報告書 7	農耕開始期の石器組成 2	1996
	国立民俗歴史博物館研究報告 第69集	近畿地方村落の史的研究	1996
	市川市教育委員会		
	市川市内道跡発掘調査報告		1996
	御山武郡市文化財センター		
	御山武郡市文化財センター発掘調査報告書 第16集	大綱山田台道跡群 I 縄文時代遺・旧石器時代遺・縄文・付図FD	1994
	御山武郡市文化財センター発掘調査報告書 第25集	油井古塚道跡群 (本文編・図版編)	1995
	御山武郡市文化財センター発掘調査報告書 第26集	居合台道跡	1995
東京都	府中市教育委員会 府中市道跡調査会		
	府中市埋蔵文化財調査報告 第17集	武蔵国府関連道跡調査報告17	1996
	府中市教育委員会		
	府中市埋蔵文化財調査報告 第6冊	府中市内道跡 1	1995
	府中市埋蔵文化財調査報告書第7冊	府中市内道跡 2	1996
	国分寺市教育委員会		
	国分寺市文化財調査報告 第43集	武蔵国分尼寺跡Ⅲ	1996
	国分寺市道跡調査会		
	東京都国分寺市恋ヶ窪道跡調査報告 7		1996
	武蔵国分寺跡発掘調査概要		1996
	武蔵国分寺関連道跡調査会		
	武蔵国分寺関連道跡の調査Ⅶ		1996
	東京大学大学院人文社会系研究科		
	ライトコロ右岸道跡		1995
富山県	御富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所		
	発掘調査報告 第1分冊	梅原加賀坊道跡他 3	1996
	発掘調査報告 第2分冊	梅原加賀坊道跡他 3	1996
福井県	福井県教育庁埋蔵文化財センター		
	福井県埋蔵文化財調査報告 第27集	南江守大坂道跡	1995
岐阜県	大垣市教育委員会		
	大垣市文化財調査報告書 第27集	大垣市埋蔵文化財調査概要	1996
	大垣市文化財調査報告書 第28集	経飯大塚古墳	1996
	垂井町教育委員会 三重大学考古学研究室		

	美濃国府跡発掘調査報告1付、若宮古墳範囲確認調査報告	1996
静岡県	静岡県埋蔵文化財調査研究所	
	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第65集	遠江国分寺跡の調査 1995
愛知県	名古屋市教育委員会	
	鳴海城跡発掘調査概報報告書	1991
	名古屋城三の丸遺跡第6・7次発掘調査報告書	1995
	鳴海城跡第2次発掘調査概要報告書	1996
	幡下小学校遺跡第4次発掘調査の概要	1996
	正木町遺跡第5次調査の概要	1996
	正木町遺跡第6次発掘調査概要報告書	1996
	高蔵遺跡第10次調査の概報	1996
	高蔵遺跡第11次発掘調査の概報	1996
	雷貝塚第22次発掘調査報告書	1996
	見晴台遺跡第32次・第33次発掘調査の記録	1996
	見晴台遺跡第35次発掘調査概要報告書	1996
	平田城跡発掘調査報告書	1996
	西志賀遺跡発掘調査の概要	1996
	御瀬戸市埋蔵文化財センター	
	御瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告 第11集	東拝戸A遺跡 1996
	御瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告 第12集	赤重堂跡 1996
	豊川市教育委員会	
	駒場遺跡	1996
	豊川市内遺跡発掘調査概報V	1996
三重県	福沢市教育委員会	
	福沢市内遺跡発掘調査報告書2	1996
	福沢北市場土地区画整理組合福沢市内遺跡発掘調査団	
	北市場町地内埋蔵文化財発掘調査報告書	1996
	三重県埋蔵文化財センター	
	三重県埋蔵文化財調査報告99-4	伊賀国府跡(第4次)発掘調査報告 1992
	三重県埋蔵文化財調査報告133-1	長者屋敷遺跡・峯城跡・中富田西浦遺跡 1996
津市	津市教育委員会	
	津市埋蔵文化財調査報告25	北垣内遺跡発掘調査報告 1996
	四日市市道跡調査会	
	四日市市道跡調査会文化財調査報告書XVI	茶臼山古墳群 1996
京都府	四日市市道跡調査会文化財調査報告書XVII	西ヶ谷遺跡 1996
	城陽市教育委員会	

	城陽市埋蔵文化財調査報告書 第30集		1996
	城陽市埋蔵文化財調査報告書 第31集		1996
	縣長岡京市埋蔵文化財センター		
	長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第7集	長岡京跡右京第496次東羅古墳群発掘調査報告	1996
	加悦町教育委員会		
	加悦町文化財調査報告書 第15集	史跡蛭子山・作山古墳整備事業報告書	1992
	加悦町文化財調査報告書 第19集	旧丸岡家住宅移築復原工事報告書	1994
大阪府	豊中市教育委員会		
	豊中市埋蔵文化財発掘調査概要		1996
	高槻市教育委員会		
	高槻市文化財調査概要X X II	嶋上道跡群20	1996
	高槻市文化財調査報告書 第20冊	古曾部・芝谷道跡 本文編	1996
	高槻市文化財調査報告書 第20冊	古曾部・芝谷道跡 図版編	1996
	貝塚市教育委員会		
	貝塚市道跡群発掘調査概要18		1996
	貝塚市埋蔵文化財調査報告 第39集	貝塚寺内町道跡	1996
	枚方市教育委員会 枚方市文化財研究調査会		
	枚方市民俗文化財調査報告 4	旧川越村	1996
	枚方市教育委員会		
	枚方市建造物調査報告書 III	枚方市の社寺建築	1994
	泉南市教育委員会		
	泉南市民俗資料調査報告 2	泉南市山間部言語調査報告	1994
	泉南市民俗資料調査報告 3	泉南市信達葛畑・信達楠畑地区民俗資料調査報告	1995
	日本古代国家の成立を探る・2	古代の技術革新	1994
	日本古代国家の成立を探る・3	仏教の受容と古代国家	1995
	泉南市文化財調査報告書 第28集	岡田西・氏の松道跡発掘調査報告書本文及び図版編	1995
	泉南市文化財調査報告書 第28集	岡田西・氏の松道跡発掘調査報告書第28集別冊図版編	1995
	熊取町教育委員会		
	熊取町埋蔵文化財調査報告 第24集	東門寺跡発掘調査概要IX	1996
	熊取町埋蔵文化財調査報告 第25集	中家住宅発掘調査報告II	1996
	熊取町埋蔵文化財調査報告 第26集	熊取町道跡群発掘調査概要X	1996
	大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団		
	井ノ内稲荷塚古墳		1996
	大阪大学雪野山発掘調査団		
	雪野山古墳の研究 報告篇		1996
	雪野山古墳の研究 考察篇		1996

兵庫県	芦屋町教育委員会		
	筑前 金屋遺跡報告書 第7集		1996
	南淡町教育委員会		
	南淡町発掘調査報告書	岩谷道跡	1996
奈良県	奈良国立文化財研究所		
	飛鳥・藤原宮発掘調査概報 26		1996
	奈良県教育委員会		
	平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告書	岡坂編	1995
	平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告書	本文編	1995
	平城京左京三条一坊十四坪発掘調査報告		1995
	大和郡山市教育委員会 榎原考古学研究所		
	郡山城の発掘調査		1990
	奈良県立榎原考古学研究所		
	奈良県道跡調査概報 1991年度	第1分冊	1992
	奈良県道跡調査概報 1991年度	第2分冊	1992
	奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第68冊	龍王山古墳群	1993
	奈良県道跡調査概報 1992年度	第1分冊	1993
	奈良県道跡調査概報 1992年度	第2分冊	1993
	奈良県道跡調査概報 1993年度	第1分冊	1994
	奈良県道跡調査概報 1993年度	第2分冊	1994
	加守庵寺（北葛城郡当麻町）		1995
	考古學論攷 第20冊	榎原考古学研究所紀要	1996
	奈良県道跡調査概要		1996
	奈良県道跡調査概報 1995年度	第2分冊	1996
	奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第67冊	平城京右京一条 北辺二坊三坪・四坪発掘調査報告	1994
	奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第68冊	龍王山古墳群	1993
	奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第69冊	南郷道跡群 I	1996
	桜井市高家道跡群 I	一戒塚古墳群・ゴダ古墳群・高家道跡一	1996
	奈良市教育委員会		
	奈良市埋蔵文化財調査概要報告書		1996
	平城京東市跡推定地の調査14	第18次発掘調査概報	1996
	大和高田市教育委員会		
	コンピラ山古墳		1995
	大和高田市文化財調査報告 第5集	大和高田市道跡分布調査報告書 I	1996
	奈良大学・考古学研究室		
	奈良大学平城京発掘調査報告書 第1集	菅原道跡	1982

岡山県	岡山市教育委員会		
	岡山市埋蔵文化財調査の概要		1994
	倉敷埋蔵文化財センター		
	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第5集	茂浦古墳群	1996
	岡山大学文学部考古学研究室		
	思原2遺跡		1996
広島県	神広島市歴史科学教育事業団		
	神広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第15集	広島城関連遺跡発掘調査報告	1995
	神広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第16集	串山城遺跡発掘調査報告	1995
	神広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第17集	黒谷遺跡発掘調査報告書	1995
	神東広島市教育文化振興事業団		
	文化財センター調査報告書第5冊	今田遺跡発掘調査報告書	1995
	文化財センター調査報告書 第7冊	西東子遺跡発掘調査報告書	1996
	新市町教育委員会		
	「大佐山カントリークラブ(仮称)」建設に伴う埋蔵文化財調査	四五道城跡	1992
	神石町教育委員会 広島大学文学部考古学研究室		
	辰の口古墳		1995
山口県	下関市教育委員会		
	山口県下関市大字秋根字砂子多・原田内延行条里遺跡発掘調査報告書 延行条里遺跡		1996
	山口市教育委員会		
	山口市埋蔵文化財調査報告 第51集	初瀬遺跡	1994
	山口市埋蔵文化財調査報告 第59集	山口市内遺跡群細分布調査(宮野地区)	1996
	防府市教育委員会		
	平成5・6年度 防府市内遺跡発掘調査概要	周防国府跡 下右田遺跡 中瀬瀬の上古墳 府中市埋蔵文化財調査概要	1996
	防府市埋蔵文化財調査概要	周防国府跡 第78・84次発掘調査概要	1995
	防府市埋蔵文化財調査概要	周防国府跡 第88・91次発掘調査概要	1996
	阿知須町教育委員会		
	阿知須町埋蔵文化財発掘調査報告 第12集	領家遺跡	1996
	菊川町教育委員会		
	菊川町埋蔵文化財調査報告書 第4集	風呂ヶ追横穴墓群	1996
徳島県	徳島市教育委員会		
	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要6		1996
香川県	高松市教育委員会 日本電信電話株式会社		
	高松市埋蔵文化財調査報告書 第25集	空港跡地遺跡(亀の町地区1)	1995
	高松市教育委員会 高松南部農業協同組合		

高松市埋蔵文化財調査報告書 第28集	空路跡地道路(亀の町地区Ⅱ)	1995
高松市教育委員会		
高松市埋蔵文化財調査報告 第31集	松林道跡	1996
発掘調査概報Ⅰ	引福寺・鏡遺岐岡山田郡田園関係道跡	1996
高松市教育委員会 建設省四国地方建設局		
高松市埋蔵文化財調査報告 第26集	井手東Ⅰ道跡(自然科学分析・考察編)	1995
高松市埋蔵文化財調査報告 第26集	井手東Ⅰ道跡(本文編)	1995
高松市埋蔵文化財調査報告 第26集	井手東Ⅰ道跡(観察表・写真図版編)	1995
高松市埋蔵文化財調査報告 第32集	井手東Ⅱ道跡(付図)	
愛媛県 愛媛県埋蔵文化財センター		
一般国道Ⅰ1号重信道路埋蔵文化財発掘調査報告書		1996
一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書3		1996
来島大橋建設に伴う報告書 第2集	糸谷道跡	1996
松山市教育委員会 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター		
松山市文化財調査報告書 第49集	松山大学橋内道跡Ⅱ 本文編	1995
松山市文化財調査報告書 第49集	松山大学橋内道跡Ⅱ 写真図版編	1995
松山市文化財調査報告書 第49集	松山大学橋内道跡Ⅱ 道橋・道物一覧表編	1995
大西町教育委員会		
妙見山古墳群1号墳整備概報		1996
愛媛大学法文学部考古学研究室		
愛媛大学法文学部考古学研究報告 第4冊	江口貝塚Ⅲ 第4次調査報告	1996
上浦町教育委員会 愛媛大学法文学部考古学研究室		
萩の岡貝塚		1996
高知県 高知県教育委員会		
高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	田村道跡群第1分冊	1986
高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	田村道跡群第2分冊	1986
高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	田村道跡群第3分冊	1986
高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	田村道跡群第4分冊	1986
高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	田村道跡群第5分冊	1986
高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	田村道跡群付図	1986
福岡県 福岡県教育委員会		
豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第3集	池ノ口道跡	1996
豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第4集	金居塚道跡	1996
豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集	上唐原道跡Ⅱ	1996
椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第6集	居屋敷道跡	1996
椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第7集	徳永ノ上道跡Ⅱ 本文	1996

椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第7集	徳永川 / 上道路Ⅱ 岡坂	1996
椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第8集	中村石丸道路 上巻	1996
椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第8集	中村石丸道路 下巻	1996
九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-38-	井上素崎堂道路	1996
九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-39- 上巻	中道道路、石成久保道路、大塚端道路	1996
九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-39- 下巻	中道道路、石成久保道路、大塚端道路	1996
九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-40-	外之関道路Ⅱ	1996
九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-41-	大谷道路、柿原道路群Ⅶ	1996
九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-42-	尺福道路、夕月道路、上池田道路	1996
福岡県文化財調査報告書 第122集	新延貝塚	1995
福岡県文化財調査報告書 第123集	龍頭道路	1996
福岡県文化財調査報告書 第124集	久富斗代道路	1996
福岡県文化財調査報告書 第125集	町口道路 西森田道路	1996
北九州市教育委員会		
北九州市文化財調査報告書 第68集	田原町道路第2地点	1996
北九州市文化財調査報告書 第69集	相模橋穴群	1996
北九州市文化財調査報告書 第70集	小倉城跡Ⅱ	1996
福岡市教育委員会		
平成4年度発掘調査概要報告	鴻巣跡跡4	1994
比恵道路群第40・42・44・48次調査の報告	比恵道路13	1994
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第368集	志賀島・玄海島	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第391集	博多43	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第392集	博多44	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第393集	博多45	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第394集	博多46	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第395集	博多48	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第397集	那珂道路13	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第398集	那珂14	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第399集	東那珂道路1	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第400集	比恵道路群(15)	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第401集	比恵道路群(16)	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第402集	比恵道路群(18)	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第404集	壱粕2	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第405集	雀居道路2	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第406集	雀居道路3	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第407集	成田青木道路2	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第408集		

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第409集	中南郡(4)	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第410集	板付道跡	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第411集	井尻B道跡2	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第412集	井尻B道跡3	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第413集	野多目台	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第414集	菅赤部B道跡2	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第415集	福岡城跡	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第416集	鴻巣館跡5	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第417集	長尾道跡	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第418集	四熊道跡第25次調査・熊本道跡第2次調査	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第419集	藤崎道跡10	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第420集	クエノノ道跡	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第421集	東入部道跡群4	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第422集	西熊船石1	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第423集	田村道跡XI	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第424集	入部V	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第425集	小笠木	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第426集	有田・小川部	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第427集	有田・小田部	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第428集	西熊岡辺道跡群	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第429集	周船寺道跡群	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第430集	大原A道跡1	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第431集	大原A道跡2	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第432集	桑原道跡群	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第434集	都地道跡(4)	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第435集	飯氏二尊古墳	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第436集	徳永古墳群3 女原上ノ谷製鉄址	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第437集	吉武道跡群Ⅲ	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第438集	野方久保道跡3	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第439集	板付道跡	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第440集	飯倉D道跡	1995
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第441集	井尻B道跡4 南八幡道跡4 - 第5次調査 -	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第442集	辻重道跡群(19) - 第55次発掘調査報告 -	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第443集	博多49	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第444集	原道跡8 - 第17次調査の報告 -	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第445集	持田・浦古墳群2	1996

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第446集	藤田部本原 3 次	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第447集	博多50	1996
博多道跡群第80次調査報告書 第448集	博多51	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第449集	博多52	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第450集	博多53	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第451集	比恵道跡群 (20)	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第452集	比恵道跡群21 - 第51次調査の報告 -	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第453集	比恵群22	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第454集	那珂道跡15 - 第47次調査報告 -	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第455集	那珂道跡16 - 第48次・49次調査報告 -	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第456集	下月間天神森道跡 II	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第458集	井相田 C 道跡第 5 次、高畑道跡第14次	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第459集	箱崎道跡 4 - 第 6・7 次調査報告 -	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第460集	福岡市東那珂道跡 2	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第461集	吉武道跡群Ⅲ	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第462集	長峰道跡 2	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第463集	赤坂門跡 - 福岡城第26次調査 -	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第464集	吉塚 2	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第465集	立花寺 3 - 第 3 次調査報告 -	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第466集	立花寺 4 - 第 4 次調査報告 -	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第467集	福岡外環状道跡関係埋蔵文化財調査報告 1 - 次郎丸道跡・次郎丸石道跡第 2 次調査 -	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第468集	次郎丸道跡 1 - 第 3 次調査 -	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第469集	カヌメル修道院内道跡Ⅲ - 第 4 次調査 -	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第470集	有田・小田部 第23集	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第471集	有田・小田部 第24集	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第472集	有田・小田部 第25集	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第473集	有田・小田部 第26集	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第474集	兜塚古墳	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第475集	堀ノ内道跡 1	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第476集	三苦永道跡	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第477集	三苦道跡群 2 - 第 2 次・3 次調査報告 -	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第478集	姪浜道跡 2	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第479集	今宿五郎江道跡Ⅲ (第 4 次調査報告)・徳永 A 道跡Ⅲ (第 3 次)・丸瀬山道跡群 1 (第 1 次)	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第480集	桑原道跡群 2 - 節貝塚第 1 次調査 -	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第481集	大塚 D 道跡群 1	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第482集	福岡市早良区西岡周辺道跡調査報告書 (7)	1996

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第483集	西新町道跡4・西新町道跡6・7次調査報告書	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第484集	西新町道跡5	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第485集	入部VI	1996
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第487集	鴻巣道跡7	1996
大牟田市教育委員会		
大牟田市文化財調査報告書 第47集	久福木 立山道跡IV	1996
大牟田市文化財調査報告書 第48集	黒崎山古墳群 I	1996
久留米市教育委員会		
久留米市文化財調査報告書 第80集	上津・藤光道跡群 I	1993
久留米市文化財調査報告書 第85集	日渡道跡	1993
久留米市文化財調査報告書 第86集	上津・藤光道跡群	1994
久留米市文化財調査報告書 第87集	安武地区道跡群 8	1994
久留米市文化財調査報告書 第88集	東部地区埋蔵文化財調査報告書第13集	1994
久留米市文化財調査報告書 第89集	筑後国府跡	1994
久留米市文化財調査報告書 第90集	へボノ木道跡	1994
久留米市文化財調査報告書 第91集	神道道跡第15次調査	1994
久留米市文化財調査報告書 第92集	大善寺北部地区道跡群 3	1994
久留米市文化財調査報告書 第94集	野中三十六道跡	1994
久留米市文化財調査報告書 第95集	津福西小路道跡	1994
久留米市文化財調査報告書 第96集	久留米城外郭佐々木屋敷跡	1995
久留米市文化財調査報告書 第97集	久留米市内道跡群	1995
久留米市文化財調査報告書 第98集	へボノ木道跡	1995
久留米市文化財調査報告書 第99集	安武地区道跡群 6	1995
久留米市文化財調査報告書 第100集	筑後国府跡発掘調査概報	1995
久留米市文化財調査報告書 第101集	史跡御塚・槐現塚古墳	1995
久留米市文化財調査報告書 第102集	大善寺北部地区道跡群 4	1995
甘木市教育委員会		
甘木市文化財調査報告書 第33集	下浦宮原道跡 I	1995
甘木市文化財調査報告書 第34集	屋永西原道跡	1996
甘木市文化財調査報告書 第35集	平塚・中寒木・二又川道跡	1995
甘木市文化財調査報告書 第36集	平塚山の道跡 I	1996
甘木市文化財調査報告書 第37集	栗山道跡Ⅲ 平塚垣添道跡	1996
甘木市文化財調査報告書 第38集	矢野竹道跡	1996
甘木市文化財調査報告書 第39集	三奈木大崩山道跡Ⅲ	1996
行橋市教育委員会		
行橋市文化財調査報告書 第11集	下神田道跡調査概報Ⅱ	1982

小郡市教育委員会			
小郡市文化財調査報告書 第86集	一ノ口道跡1地点 第一分冊(本文)	1994	
小郡市文化財調査報告書 第86集	一ノ口道跡1地点 第二分冊(遺構)	1994	
小郡市文化財調査報告書 第86集	一ノ口道跡1地点 第三分冊(土器)	1994	
小郡市文化財調査報告書 第86集	一ノ口道跡1地点 第四分冊(石器・表)	1994	
小郡市文化財調査報告書 第86集	一ノ口道跡1地点 第五分冊(図版)	1994	
小郡市文化財調査報告書 第86集	一ノ口道跡1地点 第六分冊(付図)	1994	
菊又土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告 1	菊又地区道跡群 1	1995	
小郡市文化財調査報告書 第97集	三国地区道跡群 4	1995	
小郡市文化財調査報告書 第98集	三国地区道跡群 5	1995	
小郡市文化財調査報告書 第99集	大保西小路道跡	1995	
小郡市文化財調査報告書 第100集	福童山の上道跡2 小郡正瓦道跡2	1995	
小郡市文化財調査報告書 第101集	菊又地区道跡群 1	1995	
小郡市文化財調査報告書 第109集	三国地区道跡群 6	1995	
小郡市文化財調査報告書 第111集	三国地区道跡群 7	1996	
県営三国地区圃場整備事業関係埋蔵文化財調査報告 6	三国地区道跡群	1995	
小郡市大保西小路所在の道跡	大保西小路道跡	1995	
小郡市文化財調査報告書 第107集	小郡正瓦道跡 3	1995	
小郡市文化財調査報告書 第108集	小郡大保道道跡	1996	
筑紫野市教育委員会			
筑紫野市文化財調査報告書 第22集	八ヶ坪道跡第 6・7 地点	1989	
筑紫野市文化財調査報告書 第37集	原田地区道跡群	1993	
筑紫野市文化財調査報告書 第45集	筑紫野市原田所在「従是北筑前国」範囲石調査報告書	1990	
筑紫野市文化財調査報告書 第46集	五郎山古墳第一次発掘中間報告	1996	
筑紫野市文化財調査報告書 第51集	東道跡	1996	
大野城市教育委員会			
大野城市文化財調査報告書 第43集	水城跡1	1995	
大野城市文化財調査報告書 第44集	牛頭塚原道跡群本文編	1995	
大野城市文化財調査報告書 第44集	牛頭塚原道跡群図版編	1995	
大野城市文化財調査報告書 第45集	小水城周辺道跡1	1995	
大野城市文化財調査報告書 第46集	牛頭塚原田道跡	1995	
大野城市の文化財 第27集	大野城市の指定文化財	1995	
大野城市の文化財 第28集	特別史跡大野城跡	1996	
宗像市教育委員会			
宗像市文化財調査報告書 第40集	富地原森	1995	
宗像市文化財調査報告書 第41集	富地原神尾崎	1996	

太宰府市教育委員会			
太宰府市の文化財 第30集	大宰府条坊跡 9		1996
太宰府市の文化財 第31集	大宰府・佐野地区道跡群 6		1996
那珂川町教育委員会			
那珂川町文化財調査報告書 第37集	中原塔ノ元道跡Ⅱ		1996
那珂川町文化財調査報告書 第38集	仲道跡Ⅱ		1996
鞍手町教育委員会			
鞍手町文化財調査報告書 第12集	新延貝塚		1996
志免町教育委員会			
志免町文化財調査報告書 第6集	松ヶ丘道跡		1996
津屋崎教育委員会			
津屋崎町文化財調査報告書 第11集	在自道跡群Ⅲ		1996
芦屋町教育委員会			
芦屋町調査報告書 第8集	旧芦屋小学校跡道跡		1996
桂川町教育委員会			
桂川町文化財調査報告書 第13集	王塚古墳		1994
杷木町教育委員会			
杷木町文化財調査報告書 第2集	穂取天神原道跡		1995
杷木町文化財調査報告書 第3集	二十谷道跡第2地点 小寛原道跡第2地点		1995
朝倉町教育委員会			
朝倉町文化財調査報告書 第5集	大庭字土ノ上道跡		1995
添田町教育委員会			
英彦山大河辺山状墓地			1996
佐賀県 佐賀市教育委員会			
佐賀市文化財調査報告書 第64集	御手水道跡Ⅱ 2区の調査		1996
佐賀市文化財調査報告書 第65集	琵琶原道跡4区 草場道跡1区		1996
佐賀市文化財調査報告書 第66集	藤附道跡1区 大塚道跡1区 大日道跡2区		1996
佐賀市文化財調査報告書 第67集	上揚道跡 3区		1996
佐賀市文化財調査報告書 第68集	確認調査報告書 1990・1991年度		1996
佐賀市文化財調査報告書 第69集	来迎寺道跡 若宮原道跡		1996
佐賀市文化財調査報告書 第70集	西千布道跡1区 友貞道跡8・9・10・11区		1996
佐賀市文化財調査報告書 第71集	修理田道跡1		1996
佐賀市文化財調査報告書 第72集	忠兵衛屋敷道跡		1996
佐賀市文化財調査報告書 第73集	下和泉一本推道跡1 1～3区の調査		1996
佐賀市文化財調査報告書 第74集	下村道跡－1・2区の調査－		1996
佐賀市文化財調査報告書 第75集	東千布道跡11～2区の調査－		1996

佐賀市文化財調査報告書 第76集	佐賀城跡	1996
佐賀市文化財調査報告書 第77集	東名道跡	1996
唐津市教育委員会		
唐津市文化財調査報告書 第65集	梨川内村前道跡(2)	1996
唐津市文化財調査報告書 第66集	雲通道跡(1)	1996
唐津市文化財調査報告書 第67集	枝去山水中道跡(II)	1996
唐津市文化財調査報告書 第68集	徳蔵谷道跡(3)	1996
唐津市文化財調査報告書 第69集	唐津市内道跡確認調査(II)	1996
唐津市文化財調査報告書 第70集	唐津城跡(III)	1996
唐津市文化財調査報告書 第71集	竹木場前田道跡(2)	1996
唐津市文化財調査報告書 第72集	唐ノ川高峰道跡(3)	1996
唐津市文化財調査報告書 第73集	栴畑田道跡	1996
武雄市教育委員会		
六角川河川改修工事に伴う発掘調査概報2	茂平道跡	1982
武雄市埋蔵文化財調査報告書 第13集	IEノ前道跡(図版編)	1984
武雄市埋蔵文化財調査報告書 第14集	郷ノ木道跡B地点	1984
六角川河川改修工事に伴う、埋蔵文化財発掘調査概報4	潮見道跡地4	1984
武雄市教育委員会		
武雄市文化財調査報告書 第36集	武雄市内古宮跡群発掘調査報告書Ⅲ	1996
千代田町教育委員会		
千代田町文化財調査報告書 第20集	託田西分道跡 II区の調査	1996
佐賀考古懇話会		
佐賀考古 第3号		1995

長崎県 長崎県教育委員会		
長崎県文化財調査報告書 第32集	里田原道跡	1977
長崎県文化財調査報告書 第72集	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書V	1985
長崎県文化財調査報告書 第98集	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書VI	1990
長崎県文化財調査報告書 第116集	県道須見・須見線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	1994
老岐・原の辻道跡		1995
長崎県文化財調査報告書 第121集	県内重要道跡範囲確認調査報告書Ⅲ	1995
長崎県文化財調査報告書 第123集	万才町道跡	1995
長崎県埋蔵文化財調査協議会		
万才町道跡		1996
新地唐人荷蔵跡		1996
島原市教育委員会		
畑中道跡		1994

福江市教育委員会			
	水の窪道跡		1976
有明町教育委員会			
有明町文化財調査報告書 第11集	一野道跡		1992
田平町教育委員会			
田平町文化財調査報告書 第5集	里田原道跡		1992
鹿島町教育委員会			
鹿島海底道跡			1992
新魚目町教育委員会			
新魚目町文化財調査報告書 第2集	西ノ股道跡		1988
芦辺町教育委員会			
芦辺町文化財調査報告書 第3集	カジャバ古墳		1988
芦辺町文化財調査報告書 第4集	鬼の富古墳		1990
芦辺町文化財調査報告書 第7集	金屋道跡		1995
芦辺町文化財調査報告書 第8集	老岐崎分寺Ⅱ		1994
熊本県 熊本市教育委員会			
	つつじヶ丘横穴群発掘調査概報Ⅱ		1995
大分県 他2 大分・熊本・宮崎県教育委員会			
	九州山地カモシカ特別調査報告書		1996
大分県 大分県教育委員会			
大分県文化財調査報告書 第85輯	慈眼山・瀬戸口道跡		1992
大分県文化財調査報告書 第93集	横手道跡		1996
大分県文化財調査報告書 第94集	徳瀬道跡		1996
大分県文化財調査報告書 第95集	特別天然記念物 カモシカ食害対策事業保護管理技術策定		1996
大分県内道跡発掘調査概報 2			1994
大分県内道跡発掘調査概報 4			1996
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報	佐寺原・原田・岩塚・治別当道跡群		1991
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報	かわじ池道跡 松木道跡		1994
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報	北ノ後道跡・二反田道跡・六反田道跡・山伏田道跡		1995
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（5）	帆根原道跡 女狐近世墓地 庄ノ原道跡群		1996
深町道跡			1993
日田市高瀬道跡群の調査Ⅰ	誠和神社裏道跡 後藤家墓地 陣ヶ原辻原道跡 高瀬深ノ田道跡		1995
府内城三ノ丸北口跡			1996
一般国道10号伊次・犬飼拡幅工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査概報 第1集	利光道跡		1995
一般国道10号伊次・犬飼拡幅工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査概報 第2集	利光道跡 上戸次道跡 上戸次北道跡		1996
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館			

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書 第13集	六郷山寺院遺構確認調査報告書 2	1994
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書 第15集	六郷山寺院遺構確認調査報告書 3	1995
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書 第17集	六郷山寺院遺構確認調査報告書 4	1996
国東半島荘園村落遺跡詳細分布調査概報	豊後国香々地往 3	1996
中津市教育委員会		
中津市文化財調査報告 第17集	沖代地区条里跡 福島遺跡東入垣地区	1996
日田市教育委員会		
吹上遺跡	—6次調査の概要—	1995
香々地町教育委員会		
香々地町文化財調査報告書 第2集	香々地町の遺跡Ⅱ	1995
国東町教育委員会		
大分県国東町文化財調査報告書 第12集	横手遺跡群 陽弓遺跡	1996
大分県国東町文化財調査報告書 第13集	千疋遺跡	1996
弥生町教育委員会		
弥生町文化財調査報告書 第4集	小田山城跡と関連遺跡 第2次調査	1995
弥生町文化財調査報告書 第5集	小田山城跡と関連遺跡 第3次調査	1996
朝地町教育委員会		
大分県朝地地区遺跡群発掘調査報告書Ⅲ	町墳墓群	1996
犬飼町教育委員会		
国道10号線犬飼バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査概報 3	下津尾遺跡	1996
久住町教育委員会		
山野城跡		1996
安心院町教育委員会		
賀来飛段関係史料調査報告書 2		1996
大田村教育委員会		
大田村文化財調査報告書 第1集	豊後国田原別府の調査Ⅰ	1994
大田村文化財調査報告書 第2集	豊後国田原別府の調査Ⅱ—田原谷の中世石造物—	1994
大田村文化財調査報告書 第3集	豊後国田原別府の調査Ⅲ—波多方の歴史—	1995
宮崎県		
宮崎県教育委員会		
山曲第1遺跡		1996
県営農業村基盤整備パイロット事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	抵園原地区遺跡	1996
宮崎市教育委員会		
平田遺跡		1996
猿野遺跡・萩崎遺跡第2遺跡		1996
史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書		1996
都城市教育委員会		

都城市文化財調査報告書 第28集	黒土道跡	1994
日南市教育委員会		
日南市埋蔵文化財調査報告書 第2集	日南市道跡詳細分布調査報告書2	1993
日南市埋蔵文化財調査報告書 第3集	飯肥城跡	1994
日南市埋蔵文化財調査報告書 第4集	日南市内道跡発掘調査概報	1995
日南市埋蔵文化財調査報告書 第5集	上溝道跡	1995
西都市教育委員会		
西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第22集	西都原地区道跡	1996
西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第24集	三納城道跡 穂北城道跡	1996
日向国分寺跡報告書 第23集		1996
三股町教育委員会		
三股町道跡詳細分布調査報告書	三股文化財報告書 第1集	1996
高城町教育委員会 (宮崎)		
高城町文化財調査報告書 第5集	雁寺第2道跡・山城第1道跡	1996
鹿児島県 鹿児島県教育委員会		
北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書V		1996
鹿児島県立埋蔵文化財センター		
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(17)	火の上山道跡	1996
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(18)	牛之原道跡	1996
鹿児島市教育委員会		
鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(20)	東迫道跡	1996
鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(21)	北麓道跡	1996
2. 定期刊行物・図録等		
北海道 帯広市教育委員会		
吉田巖 資料集2		1996
吉田巖資料集3	帯広叢書第37巻	1996
吉田巖資料集3(原資料編)	帯広叢書第37巻	1996
青森県 全国史跡整備市町村協議会		
全史協30年のあゆみ	豊かな歴史遺産を今に活かそう	1995
全国史跡整備市町村協議会大会事務局 青森県 八戸市		
第30回 全国史跡整備市町村協議会大会議会議録		1995
全国史跡整備市町村協議会		
オリエントの文化財を訪ねて シリア・トルコ視察研修報告	第5会全史協海外視察研修事業	1996
宮城県 宮城県多賀城跡調査研究所		

宮城県多賀城跡調査研究所年報1994		多賀城跡	1995
茨城県	筑波大学歴史・人類学系		
	筑波大学・先史学・考古学研究 第7号		1996
群馬県	群馬県歴史文化財調査事業団		
	研究紀要		1996
東京都	文化庁		
	文化庁月報 平成8年4月号		1996
	文化庁月報 平成8年5月号		1996
	文化庁月報 平成8年6月号		1996
	文化庁月報 平成8年7月号		1996
	文化庁月報 平成8年8月号		1996
	文化庁月報 平成8年9月号		1996
	文化庁月報 平成8年10月号		1996
	文化庁月報 平成8年11月号		1996
	文化庁月報 平成8年12月号		1996
	文化庁月報 平成9年1月号		1997
	文化庁月報 平成9年2月号		1997
	文化庁月報 平成9年3月号		1997
	第一法規出版株式会社		
	月刊文化財 4月号		1996
	月刊文化財 5月号		1996
	月刊文化財 6月号		1996
	月刊文化財 7月号		1996
	月刊文化財 8月号		1996
	月刊文化財 9月号		1996
	月刊文化財 10月号		1996
	月刊文化財 11月号		1996
	月刊文化財 12月号		1996
	月刊文化財 1月号		1997
	月刊文化財 2月号		1997
	月刊文化財 3月号		1997
	朝日新聞出版株式会社		
	月刊文化財発掘出土情報 4		1996
	月刊文化財発掘出土情報 5		1996
	月刊文化財発掘出土情報 6		1996
	月刊文化財発掘出土情報 7		1996

	月刊文化財発掘出土情報 8	1996
	月刊文化財発掘出土情報 9	1996
	月刊文化財発掘出土情報10	1996
	月刊文化財発掘出土情報11	1996
	月刊文化財発掘出土情報12	1996
	月刊文化財発掘出土情報 1	1997
	月刊文化財発掘出土情報 2	1997
	月刊文化財発掘出土情報 3	1997
	早稲田大学考古学会	
	古代 第101号	1996
	古代 第102号	1996
	世田谷区教育委員会	
	世田谷区史料叢書 第11巻	1996
	東京国分寺ロータリークラブ	
	国分寺の歴史と自然	1996
	吉川弘文館	
	本郷	1996
	斎田記念館	
	江戸の博物図譜	1996
	毎日新聞社	
	中国・南越王の至宝	1996
	社団法人 日本ユネスコ協会連盟	
	ユネスコ世界遺産 (469の遺産)	1996
神奈川県	海老名市教育委員会	
	海老名市埋蔵文化財年報 1 平成 3 年 (1991) 年度版	1993
	海老名市の庚申塔	1996
新潟県	新潟市	
	市史にいがた 19	1996
石川県	金沢市編纂委員会	
	金沢市史 資料編13寺社	1996
福井県	福井県教育庁埋蔵文化財センター	
	年報 9 平成 5 年度	1995
	年報10 平成 6 年度	1996
愛知県	名古屋市見晴台考古資料館	
	年報13 平成 7 年度	1995
	岐阜県市埋蔵文化財センター	

	瀬戸市埋蔵文化財センター年報	—平成7年度—	1996
	古瀬戸をめぐる中世陶器の世界		1996
三重県	四日市市教育委員会		
	四日市市文化財保護年報6	—平成6年度—	1996
京都府	京都市歴史資料館		
	年報 平成7年度		1995
	八坂神社の古記録		1996
	京都市の文化財新指定・登録の美術工芸品		1996
	跡京都府埋蔵文化財調査研究センター		
	京都府埋蔵文化財情報 第60号		1996
	京都府埋蔵文化財情報 第61号		1996
	平成7年度京都府内遺跡発掘調査成果速報	小さな展覧会	1996
	京都府埋蔵文化財情報 第62号		1996
	跡長岡京市埋蔵文化財センター		
	年報平成6年度		1996
	加悦町		
	加悦町古墳公園視察資料		1993
	加悦町古墳公園		1994
	加悦町役場商工観光課		
	加悦		1995
	飛鳥資料館		
	山田寺		1996
	京都大学文学部考古学研究室		
	京都大学文学部 考古学研究室紀要 第14号		1996
	図書館情報大学		
	Proceedings of International Workshop		1994
	学術情報ネットワークの基盤構造に関する調査研究		1994
	Proceeding of the 2nd SISNAP International Workshop		1995
	竊跡研究会		
	竊研通信 第5号		1996
大阪府	高槻市教育委員会		
	高槻市文化財年報	平成6年度	1996
	跡枚方市文化財調査会		
	枚方市文化財年報16 1994年度		1996
	枚方市文化財年報17 1995年度		1996
	泉南市教育委員会		

	泉南市の石造物		1990
	泉南市文化財年報 No.1	昭和57年度～平成5年度	1995
兵庫県	加西市史編集室		
	赤穂の実記		1995
奈良県	天理参考館		
	資料を語る		1996
	奈良市教育委員会		
	奈良市埋蔵文化財調査センター紀要		1996
	奈良大学文学部文化財学科		
	文化財学報 第14集		1996
	帝塚山考古学研究所（奈良）		
	渡来系氏族と古代寺院		1994
	古代寺院の移建と再建を考える		1995
	激動の古代東アジア		1995
	考古学における計量分析	計量考古学への道（Ⅴ）	1995
	第8回考古学におけるパーソナルコンピュータ利用の現状		1995
	考古学における計量分析	計量考古学への道（Ⅳ）	1994
	帝塚山考古学談話会第555回記念 朝鮮の古瓦を考える		1996
	激動の古代東アジア 6・7世紀を中心に		1995
	第8回考古学におけるパーソナルコンピュータ利用の現状		1995
	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター		
	埋蔵文化財ニュース 82		1996
	埋蔵文化財ニュース 83		1996
	天理参考館		
	天理参考館報 第9号		1996
	奈良県立橿原考古学研究所		
	橿原考古学研究所年報20		1995
	橿原考古学研究所年報21		1996
	橿原市千塚資料館		
	平成7年度埋蔵文化財発掘調査速報展 かしはらの歴史をさぐる4		1996
	橿原道跡とその時代		1996
	桜井市立埋蔵文化財センター		
	古代桜井の木製品		1996
	大和の大王の埴輪		1996
	財日本経済教育センター		
	世界文化遺産・自然遺産のはなし		1997

	甘木市教育委員会	
	甘木市の文化財	1996
	宗像市教育委員会	
	宗像市文化財ガイドブック「宗像の歴史散歩」	1997
	太宰府市教育委員会	
	大宰府文化財名鑑 観世音寺のほとけたち	1996
	芦屋町教育委員会	
	芦屋釜の図録	1995
	平塚川添遺跡を愛するみんなの会	
	水に浮かぶムラのはなし	「平塚川添遺跡と邪馬台国」シンポジウム報告 1995
	神楽の里づくり構想推進協議会	
	豊前岩戸神楽	1996
	ふくべ書店	
	自然誌関係書目録 No.4	1996
長崎県	長崎県老岐支庁	
	老岐島勢要覧	1996
	郷ノ浦町企画財政課	
	郷ノ浦みらい紀行	1996
	勝本町役場	
	勝本町町勢要覧	1996
	芦辺町役場	
	芦辺歴訪録	1996
	石田町	
	石田町町勢要覧	1995
熊本県	熊本県教育委員会	
	熊本県の文化財 彫刻・書跡	1979
	熊本県教育委員会 阿蘇実験考古学研究所	
	熊本県の文化財 建造物・絵画・考古資料	1980
大分県	大分県教育委員会	
	大分県先哲叢書 大友宗麟	1995
	大分県埋蔵文化財年報3	1995
	大分県埋蔵文化財年報4	1996
	大分県立先哲史料館	
	史料館研究紀要	1996
	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	
	運営の概要	1996

	宇佐風土の丘歴史民俗資料館	年報	1995
	大分県宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ニュース №39		1996
	大分県宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ニュース №40		1996
	大分県宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ニュース №41		1996
	大分県教育委員会・別府大学・日田市・日田市教育委員会 まちづくりフォーラム '96開催実行委員会		
	まちづくりがフォーラム '96黎明の比多国	－小道辻原道跡の世界－	1996
	大分市歴史資料館		
	大分市歴史資料館年報	平成6年度	1995
	大分市		
	大分市総合都市整備基本計画		1995
	大分市統計年鑑	平成7年度版	1996
	院内町教育委員会		
	院内町の石橋		1996
	国東町		
	史跡安国寺集落史跡整備基本設計		1996
	蒲江町教育委員会		
	蒲江町の先人たち		1996
	植田史跡探訪歩こう会		
	ぎ北の史跡		1995
	大南地区文化財同好会		
	落穂 第55号		1996
宮崎県	日南市教育委員会		
	日南市の文化財		1994
	西都市教育委員会		
	西都原古墳研究所年報第12号		1996
鹿児島県	鹿児島大学埋蔵文化財調査室		
	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報4・5		1995
	鹿児島大学法文学部考古学研究所		
	人類学研究 第8号		1992
九州 沖縄	九州・沖縄水中考古学協会		
	九州・沖縄水中考古学協会会報	NEWSLETTER	1993
	九州・沖縄水中考古学協会会報	NEWSLETTER	1994
	九州・沖縄水中考古学協会会報	NEWSLETTER	1996



文化財愛護シンボルマーク

ひろげた両手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗拱（ますぐみ）のイメージを表し、これを三つ重ねることによって、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

（昭和41年5月26日決定）

大分市埋蔵文化財調査年報 8

1997

発行日

平成9年12月31日

編集・発行

大分市教育委員会文化振興課文化財室

大分市荷揚町2番31号

〒870（0975）34-6111

印刷

大分市府内町1丁目6-29

御中央印刷
